

レッドリストあいち 2025 新規掲載種の解説

(1) 維管束植物

2025 年版レッドリストに掲載された植物のうち、新たにリストに掲載された種、および 2020 年版では絶滅とされたが今回評価が変更された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種および愛知県ではリスト外または評価対象外となったが環境省のレッドリストに掲載されている種についても、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。

記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。

【 掲載種の解説（維管束植物）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の分類上の位置を示す門、綱、科名等を各頁左上に記述した。科の範囲、名称、配列は、科内の種の配列と共に、レッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。評価の基礎になった個体数、集団数、生育環境、人為圧、固有性の階級値とその合計値も示した。

「国リスト」の種については【除外理由】として、対象種が愛知県では絶滅危惧種と判断されなかった理由を記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。この部分の記述は、特に断っていない限り全国的な資料に基づくものである。

【分布の概要】

対象種の分布状況について、県内・国内・世界での概要を記述した。県内の分布は、1985 年以後に生育が確認された区画（表 1、2 参照）を略称で示し、区画毎に代表的な標本を 1 点引用した。引用標本は愛知みどりの会標本室に収蔵されているものを優先し、また原則として採集年月日の新しいものを優先したが、標本の状態等を考慮してこの原則によらなかった場合もある。引用は採集者氏名（ただし小林元男氏と芹沢は名を省略）、標本番号、採集年月日、標本の所在（ただし愛知みどりの会は表示省略）にとどめたが、その区画内の既知産地で絶滅が確認されたものについては採集地（市町村名はラベルに表記されているもの）を加えた。また、必要に応じて 1985 年以前に採集された標本はあるがその後生育が確認されていない区画、記録はあるが裏付けとなる標本が確認できない区画を付記した。詳細な分布情報を公表すべきでない判断されたサルメンエビネとヒナチドリについては、県内を尾張、西三河、東三河の 3 地域に分けて記述した。

標本の所在は、以下の略号で示した。

- 無表示 : 愛知みどりの会 (AICH)
- CBM : 千葉県立中央博物館
- HNSM : 新城市立鳳来寺自然科学博物館
- KYO : 京都大学総合博物館
- NBC : 名古屋市立なごや生物多様性センター
- TNS : 国立科学博物館

千葉県立中央博物館については、収蔵されている故井波一雄氏採集の標本はほとんど標本番号がないので、同館の維管束植物標本登録番号を併記した。

県内分布図は図示せず、そのかわりに、絶滅種については過去に分布していた区画に対応するすべてのメッシュ(標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ)、それ以外の種については1985年以後に分布が確認されている区画地域(その後の調査で絶滅が確認されている区画を含む)に対応するすべてのメッシュを「要配慮地区図」として表示した。今回現行市町村に分けて枝番を付した区画については、枝番区画ごとの調査が不十分であるため、枝番を付さない区画単位で表示した。詳細な分布情報を示していない種については、尾張、西三河、東三河の3地域に対応する全てのメッシュを淡色で図示した。

【生育地の環境／生態的特性】

対象種の生育環境及び生態的特性について記述した。また、横に地形、縦におよその水条件(草・岩は草地・岩崖地等の略)をとった区分図に、主要な生育範囲を示した。岩崖地等の樹林を構成する種は森林、草・岩双方をマークし、湿地林の構成種は湿地のみをマークした。

【現在の生育状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生育状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については【過去の生育状況／絶滅の要因】として、対象種の愛知県における過去の生育状況、絶滅の主な要因についてわかる範囲で記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

異名、近似種との識別点、和名の語源等、以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に示した。

【関連文献】

対象種の理解の助けになる一般的文献を、著者、発行年、表題、掲載頁、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

多くの種に関連する文献については、以下の略号を用いた。

保草本Ⅰ：北村四郎ほか, 1957. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅰ. 保育社, 大阪.

保草本Ⅱ：北村四郎ほか, 1961. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅱ. 保育社, 大阪.

保草本Ⅲ：北村四郎ほか, 1964. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅲ. 保育社, 大阪.

保木本Ⅰ：北村四郎ほか, 1971. 原色日本植物図鑑 木本編Ⅰ. 保育社, 大阪.

平シダ：岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物 シダ. 平凡社, 東京.

学シダⅠ：海老原淳, 2016. 日本シダ植物標準図鑑Ⅰ. 学研, 東京.

学シダⅡ：海老原淳, 2017. 日本シダ植物標準図鑑Ⅱ. 学研, 東京.

平木本Ⅰ：佐竹義輔ほか, 1989. 日本の野生植物 木本Ⅰ. 平凡社, 東京.

平新版1：大橋広好ほか(編), 2015. 改訂新版 日本の野生植物1. 平凡社, 東京.

平新版2：大橋広好ほか(編), 2016. 改訂新版 日本の野生植物2. 平凡社, 東京.

平新版3：大橋広好ほか(編), 2016. 改訂新版 日本の野生植物3. 平凡社, 東京.

平新版4：大橋広好ほか(編), 2017. 改訂新版 日本の野生植物4. 平凡社, 東京.

平新版5：大橋広好ほか(編), 2017. 改訂新版 日本の野生植物5. 平凡社, 東京.

環境省：環境省(編), 2015. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—8 植物Ⅰ(維管束植物). 株式会社ぎょうせい, 東京.

SOS旧版：愛知県植物誌調査会, 1996. 植物からのSOS—愛知県の絶滅危惧植物. 同会, 刈谷.

SOS新版：愛知県自然史研究連絡会, 2002. 自然からのSOS—レッドデータブックあいち・植物編解説. 愛知みどりの会, 刈谷.

表1 調査区画一覧

地域	番号	略称	範囲
東 三 河	1	富山	豊根村 (旧富山村)
	2	豊根	豊根村 (旧村域)
	3	東栄	東栄町
	4	津具	設楽町 (旧津具村)
	6	設楽西部	設楽町 (旧町域の寒狭川・境川以西)
	7	設楽東部	設楽町 (旧町域の寒狭川・境川以东)
	8	鳳来北東部	新城市 (旧鳳来町の中央構造線以北、寒狭川・海老川以东)
	9	鳳来南部	新城市 (旧鳳来町の中央構造線以南)
	10	鳳来北西部	新城市 (旧鳳来町の寒狭川・海老川以西)
	11	作手	新城市 (旧作手村)
	12	新城	新城市 (旧市域)
	13	豊川	豊川市
	14	蒲郡	蒲郡市
	15	豊橋北部	豊橋市の東海道本線以北
	16	豊橋南部	豊橋市の東海道本線以南
	17	田原東部	田原市 (旧田原町、旧赤羽根町)
	18	田原西部	田原市 (旧渥美町)
	西 三 河	5	稲武
19		旭	豊田市 (旧旭町)
20		足助	豊田市 (旧足助町)
21		下山	豊田市 (旧下山村)
22		小原	豊田市 (旧小原村)
23		藤岡	豊田市 (旧藤岡町)
24		豊田東部	豊田市 (旧市域の矢作川・御船川以东)
25		豊田北西部	豊田市 (旧市域の矢作川・御船川以西、国道153号バイパス以北)
26		豊田南西部	豊田市 (旧市域の矢作川・御船川以西、国道153号バイパス以南)
27		みよし	みよし市
28		額田	岡崎市 (旧額田町)
29		岡崎北部	岡崎市 (旧市域の矢作川・乙川・男川以北)
30		岡崎南部	岡崎市 (旧市域の矢作川・乙川・男川以南)
31		幸田	幸田町
32a		刈谷	刈谷市
32b		知立	知立市
33		安城	安城市
34a		高浜	高浜市
34b	碧南	碧南市	
35	西尾北部	西尾市 (旧市域)	
36	西尾南部	西尾市 (旧一色町、吉良町、幡豆町)	
尾 張	37a	瀬戸	瀬戸市
	37b	尾張旭	尾張旭市
	38a	長久手	長久手市
	38b	日進	日進市
	39a	東郷	東郷町
	39b	豊明	豊明市
	40a	大府	大府市
	40b	東浦	東浦町
	41a	東海	東海市
	41b	知多	知多市
	42a	阿久比	阿久比町
	42b	半田	半田市
	42c	武豊	武豊町
	43	常滑	常滑市
44a	美浜	美浜町	
44b	南知多	南知多町	
45	犬山	犬山市	
46a	扶桑	扶桑町	
46b	大口	大口町	
46c	江南	江南市	
47	小牧	小牧市	

(次頁に続く)

表2 調査区画一覧（前頁の続き）

地域	番号	略称	範囲
尾	48	春日井	春日井市
	49a	岩倉	岩倉市
	49b	豊山	豊山町
	49c	北名古屋	北名古屋市
	49d	清須	清須市
	50	名古屋北部	名古屋市西区、北区、中区、東区、守山区、千種区、名東区
	51	名古屋南東部	名古屋市昭和区、瑞穂区、南区、天白区、緑区
	52	名古屋南西部	名古屋市中村区、熱田区、中川区、港区
	53	一宮東部	一宮市（奥町を除く旧市域）
	54	一宮西部	一宮市（奥町、旧木曾川町、旧尾西市）
張	55	稲沢	稲沢市
	56a	あま	あま市
	56b	大治	大治町
	57a	津島	津島市
	57b	愛西	愛西市
	58a	蟹江	蟹江町
	58b	弥富	弥富市
	58c	飛島	飛島村

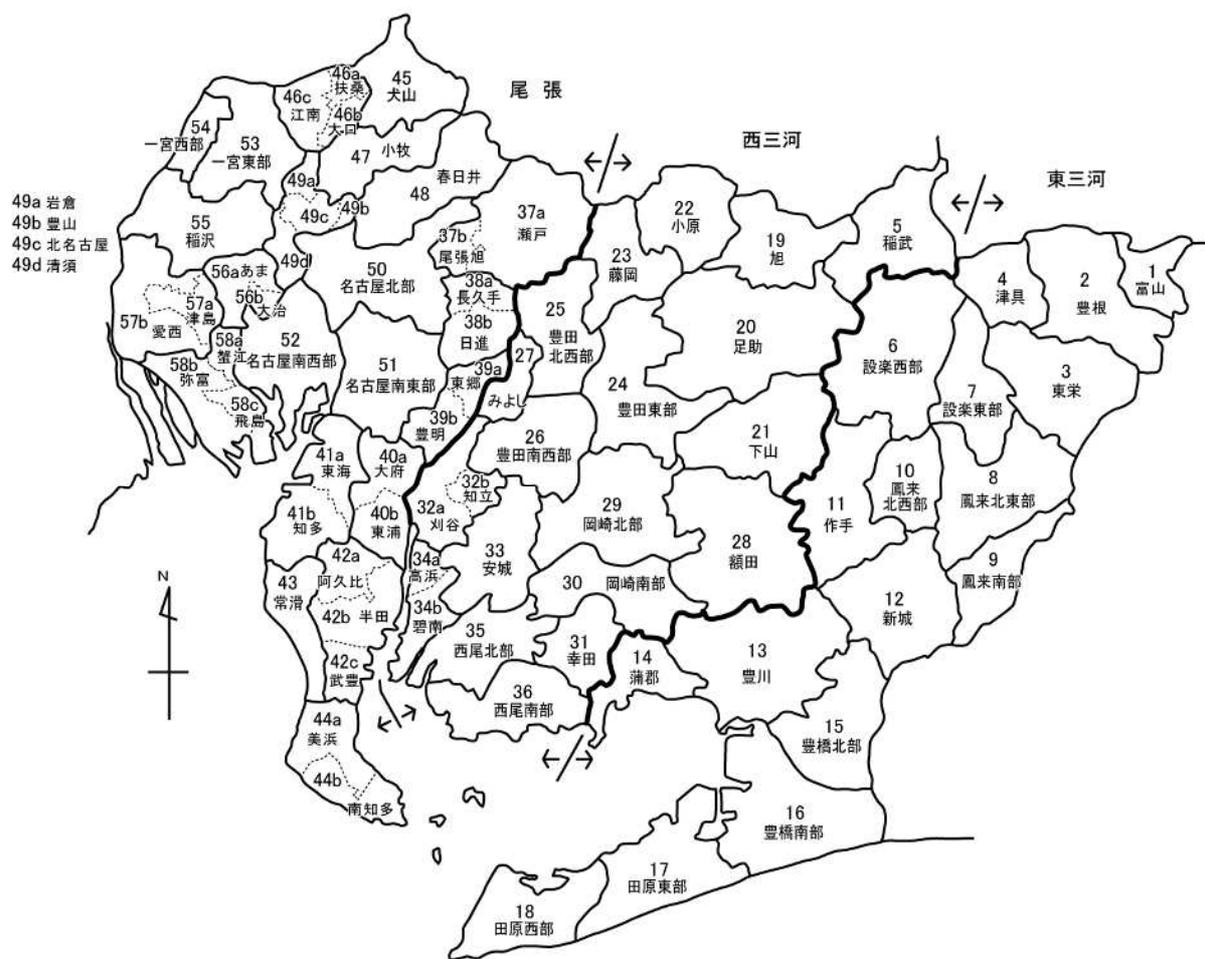


図1 調査区画図

ナツノシライトソウ (仮称) *Chionographis* sp.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 4、総点 17。極めて異なる開花期と形態的特徴を持つシライトソウ属の 1 種だが、生育地も個体数も極めて少ない。

【形態】

多年生草本。地下茎は短く斜上する。葉は束生し、長さ 3~5cm の柄があり、葉身は楕円形、長さ 3.5~4.5cm、幅 2~2.3cm、先端は鈍頭である。花茎は高さ約 12cm、茎葉は上半部に多く、斜上し、広披針形で長さ 1cm 程度、幅 2~3mm。花期は 8 月中旬から 9 月上旬、穂状花序は花時に長さ 1cm 程度、10 個内外の花を密につける。伸長する花被片は倒披針形、長さ 4~5mm、先端の幅 0.5~0.8mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部 (芹沢 104253, 2024-8-21)。

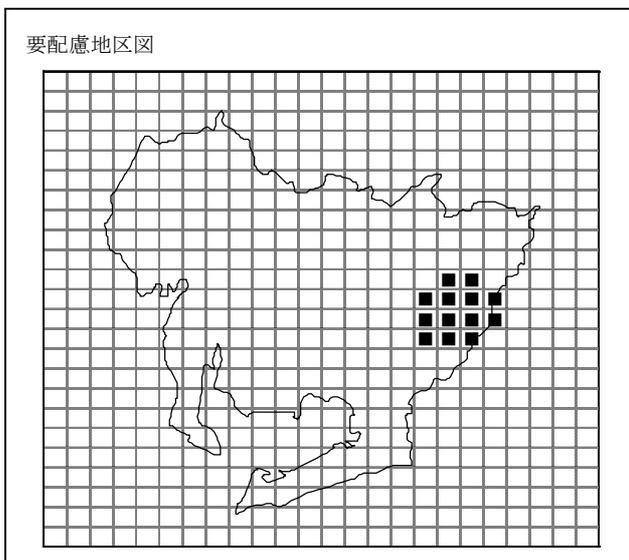
【国内の分布】

おそらく愛知県固有種。

【世界の分布】

おそらく日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

低山地の林縁の崖下にある棚状の場所に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

比較的目につきやすい場所に 2 株が隣接して生育していたが、何かの拍子に採取されてしまう恐れがあったので、うち 1 株は標本にした。周辺には春咲きの普通のシライトソウも生育していた。

【保全上の留意点】

2 株しかないというのは何とも不自然で、近くにまとまった群落があると思われるが、地形が急峻でまだ発見できない。何はともあれ、母集団を探索する必要がある。

【特記事項】

開花期も花序や茎葉の形態も他のシライトソウ類とは著しく異なっており、おそらくは新種として記載すべきものと思われる。ただし 2 株しか確認されていないので、上記の形態的特徴が小さい株にすぎないのか、充分発育したものなのかははっきりしない。発見者の浅井むつ江氏によれば、「2017 年 8 月頃、花散策に出かけた時白い小さい花を見つけた。2020 年にも同じ花を咲かせた。発見してから 7 年になるが 2 本の開花はそのまま、植物体の大きさも変化がない」そうである。

【関連文献】

ここで初めて記録する植物で、関連文献はない。

(執筆者 芹沢俊介)

ヒナラン *Amitostigma gracile* (Blume) Schltr.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 4、固有性階級 2、総点 16。全国的に減少傾向の著しいラン科植物で、愛知県では過去に採集された標本があるのみであったが、現存が確認された。

【形態】

多年生草本。紡錘状に肥厚した根がある。茎は斜上して上部は立ち、高さ 5~15cm になる。葉は茎の基部近くに 1 個つき、長楕円形~広披針形、長さ 3~8cm、幅 1~2cm、先端は鈍~鋭頭、辺縁は全縁、基部はやや茎を抱く。花期は 6~7 月、花は茎の上部に一方に偏って 10~15 個つき、短い柄があり、淡紫色、苞は卵形、長さ 3~5mm である。背がく片は楕円形、側がく片は斜卵形、側花弁は斜広卵形で、いずれも長さ 2.2~2.5mm、先端は鈍頭、唇弁はくさび形卵形、長さ 3.5mm、ほぼ中央で 3 裂し、中央裂片は幅約 1.2mm、先端は円頭、側裂片は長さ約 1mm、距は筒状で細く、長さ 1~1.5mm である。果実はさく果で楕円形、長さ 5~7mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：10 鳳来北西部 (芹沢 104068, 2024-6-11)。7 設楽東部にもわずかに生育しているらしい。東：12 新城 (加藤等次 s.n., 1963-9-8)、西：19 旭 (大原準之助 s.n., 1966-6-5)、25 豊田北西部 (岡本英一 280, 1958-5-19) で採集された標本もある。

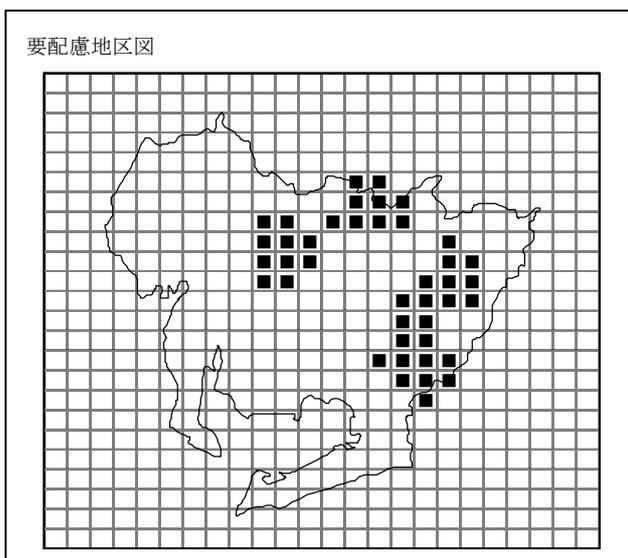
【国内の分布】

本州 (茨城県北部および愛知県以西)、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境/生態的特性】

山地の林内の岩上に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況/減少の要因】

道路近くの岩壁に 30~40 株程度の群落がある。以前は周辺にも点在していたようだが、2024 年の調査では見当たらなかった。一方で道路等の拡幅による生育地の破壊、他方で園芸目的の採取が、減少の主要因と思われる。

【保全上の留意点】

イワチドリやウチョウランに比べれば花の小さい植物であるが、それでも園芸目的の採取を防止するため、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【関連文献】

保草本Ⅲp.12, 平新版 1 p.182, 環境省 p.341, SOS 旧版 p.109.

(執筆者 芹沢俊介)

サルメンエビネ *Calanthe tricatinata* Lindl.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 4、固有性階級 2、総点 17。全国的に採取圧が高く減少傾向の著しいラン科植物で、愛知県では以前から生育しているという話を聞いていたが、最近になって確実な資料が得られた。

【形態】

多年生草本。根茎は球状で、過年度のものを含め数個が連なる。葉は 3~4 枚束生し、倒卵状長楕円形、長さ 25~35cm、幅 6~10cm、基部は次第に狭くなり、先端はやや急に狭くなって頂端は短く尖る。花期は 5 月、花茎は高さ 30~50cm で、上部に 6~12 花をつける。がく片は長さ 18~20mm、緑色、側花弁はやや小さく同色、唇弁は紫褐色から赤褐色で、中裂片の中央に 3 条のとさか状突起がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：(村松 32447, 2021-5-26)。区画は公表しない。

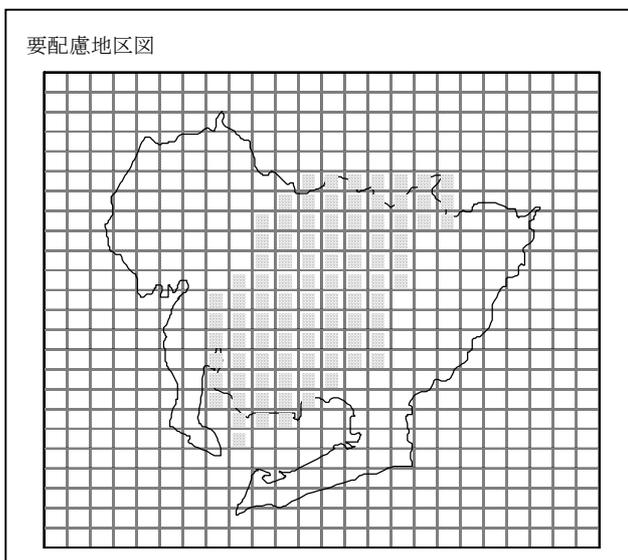
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、台湾、中国大陸、ヒマラヤ。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

温帯の落葉樹林下に生育することが多いが、愛知県の自生地は暖帯域の沢から 5~6m 離れた明るい二次林内であるという。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数は少なく、3~4 株であったという。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することはもちろん必要だが、本種の場合はそれ以上に、園芸目的の採取を防止する必要がある。

【特記事項】

エビネやナツエビネに比べ、葉の先端がやや急に狭くなる。東：3 東栄 (芹沢 87415, 2011-9-24) にも本種らしいものがあるが、まだ開花しそうもないやや小さい株で、断定できない。

【関連文献】

保草本Ⅲp.54, 平新版 1 p.188.

(執筆者 芹沢俊介)

ムカゴソウ *Herminium lanceum* (Thunb.) Vuijk

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 16。湿った草地に生育するラン科植物で、県内では過去に採集された標本があるのみであったが、2020年に1株の現存が確認された。

【形態】

多年生草本。楕円形の球茎がある。茎は直立し、高さ 20~45cm になる。葉は茎の下部につき、葉身は線形、長さ 8~20cm、幅 5~10mm、先端は尖り、基部は茎を抱いて葉鞘となる。花期は 7~8 月、花は茎の上部に多数穂状につき、淡緑色、苞は卵状三角形である。がく片は長楕円形、長さ 2~2.5mm、側花弁は線状披針形でがく片よりやや短い。唇弁は長さ 6~8mm、中部まで 3 裂し、側裂片は線形で長い、中裂片はごく短い。距はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：21 下山 (芹沢 96226, 2020-7-21)。東：稲橋ヨリ田口ノ間 (おそらく 6 設楽西部, 伊藤篤太郎 s.n., 1891-10-23, TNS)、9 鳳来南部 (黄柳野, 井波一雄 s.n., 1943-9-26, CBM264614)、13 豊川 (御津村, S.Murata 1953, 1928-7-6, TNS)、西：31 幸田 (三ヶ根山, 井波一雄 s.n., 1953-7-23, CBM70487) で採集された標本もある。大原 (1971) は産地として 4 津具、14 蒲郡をあげている。

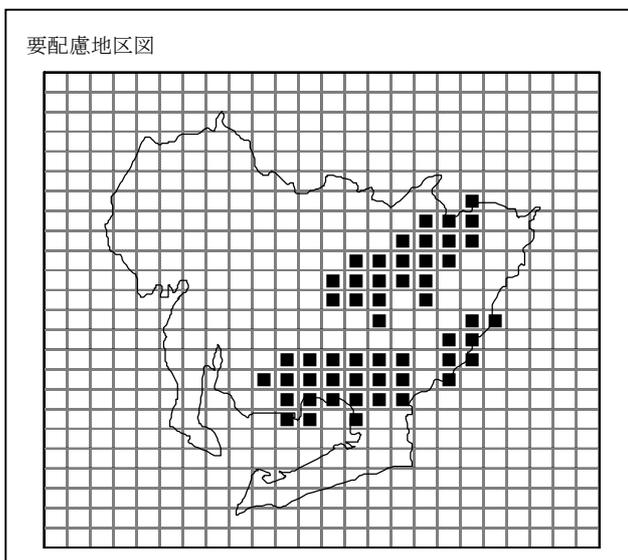
【国内の分布】

北海道 (西南部)、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、台湾、朝鮮半島、中国大陸東北部。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

通常は湿った草地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

谷戸田に沿った草地のややくぼんだ場所に、1 株だけ生育していた。

【保全上の留意点】

生育している草地の保全が必要である。

【特記事項】

1 株しかなかったので、株の上部のみを標本にした。そのため上に引用した下山の標本はやや不完全である。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.151. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本Ⅲp17, 平新版 1 p.208.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒナチドリ *Ponerorchis chidori* (Makino) Ohwi

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、地域固有性階級 2、総点 15。2020 年版ではウチョウランの項に「設楽町段戸山と稲武町井山にあると報告されているが確実な標本資料がない」と付記した種類であるが、現存が確認された。総点は 15 であるが、採取圧が極度に高いことを考慮し、絶滅危惧 IA 類と評価する。

【形態】

多年生草本。根は柱状に肥厚する。茎は斜上し、高さ 7~10cm になる。葉は茎の中部に 1 個つき、葉身は長卵形、愛知県のは長さ 4cm、幅 1.8cm 程度、先端は鋭頭、基部は茎を抱く。幼株の葉は線形である。花期は 7 月、花は茎の上部に 3~4 個つき、紅紫色、苞は披針形で最下のものは長さ 1.5cm 程度あるが上方のものは小さくなり、花柄は長さ 8~12mm、がく片と側花弁は長さ 4~5mm、唇弁はそれよりやや大きく深く 3 裂し、距は後方に伸びて長さ 12~15mm、先端はわずかに湾曲する。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：(芹沢 104121, 2024-7-9)。区画は公表しない。

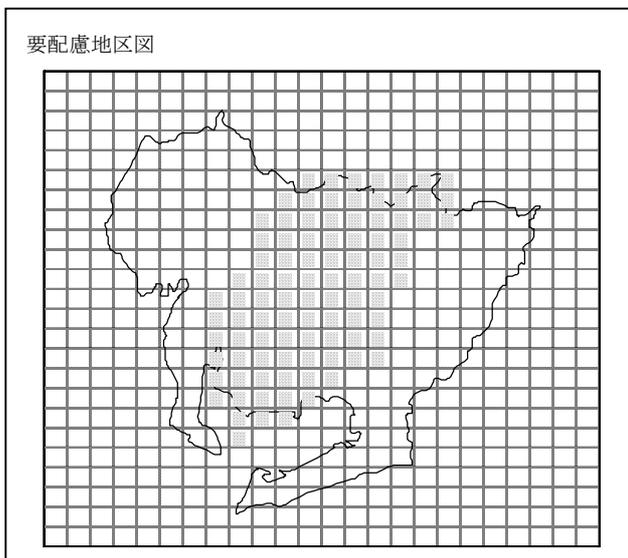
【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

温帯落葉樹林の樹幹に着生する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

林内の 2 つの倒木上に少数株が生育していた。このままではいつ消失してもおかしくない状況だが、他に生木に着生している場所があるという話なので、個体数階級は 3 として評価した。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することはもちろん必要だが、本種の場合はそれ以上に、園芸目的の採取を防止する必要がある。

【特記事項】

設楽町段戸山と稲武町井山の報告は大原 (1971) によるものである。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.152. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本Ⅲp.12, 平新版 1 p.226.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒメキカシグサ *Rotala elatinomorpha* Makino

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 4、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 16。全国的に極めて稀少な小型の 1 年生草本で、愛知県では最近 1 か所での生育が確認された。

【形態】

1 年生草本。茎は地表を這い、枝は斜上～直立して高さ 3～6cm になる。葉は対生し、葉柄はなく、葉身は倒卵状楕円形、長さ 3～5mm、幅 1.5～2.5mm、円頭で全縁である。花期は 9～10 月、花は枝中部の葉腋につき、無柄、がく筒は半球形で長三角形の短い裂片がある。雄蕊は 2 個である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：57b 愛西 (石原 淳 s.n., 2023-9-29)。隣接する岐阜県側にも生育しているという。

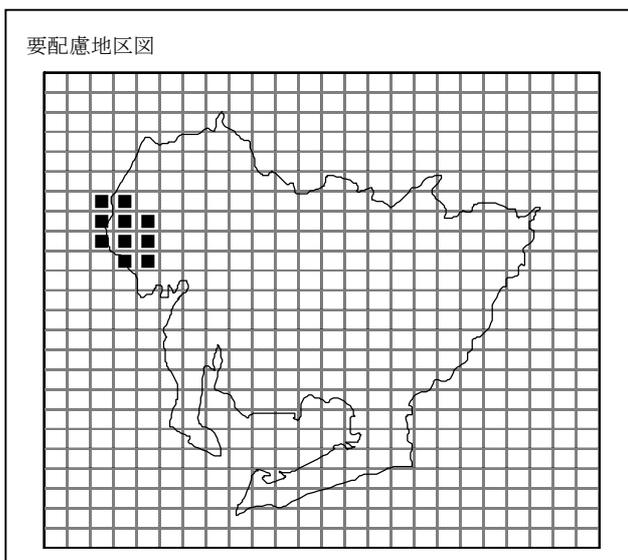
【国内の分布】

本州 (埼玉県、千葉県、長野県、岐阜県、愛知県、三重県、京都府)、四国 (香川県、高知県) から報告されているが、現存が確認できるのは木曾川の他は三重県の 1 か所だけらしい。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

感潮域の、満潮時は水没し、干潮時は干出する泥土上に生育する。事業者の委託による現地調査では、比高 0.7～1.9m のワンド・たまりに多く、流れの影響を受けやすい本流沿いの干潟には少ない傾向があると報告されている。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

1 か所に隣接して数百株と約 100 株の群落があり、周辺にも少数株が点在している (小型の植物なので個体数階級は 3) という。安定した環境であるが、河川整備事業が計画されているとのことで、その影響を受ける可能性がある。

【保全上の留意点】

「令和 4 年度に整備を終えた場所でも本種の生育が確認できたことから、伐採等の工事による改変を受けても、干潟や砂州といった生育基盤が創出・保全されれば、本種の生育は維持される可能性がある」と報告されている。本種の存在は事業者には意識されているので、それなりの配慮がなされるものと期待している。

【関連文献】

平新版 3 p.259.

(執筆者 芹沢俊介)

クロキ *Symplocos kuroki* Nagam.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 16。従来鳥取県以西に分布とされてきた植物であるが、最近になって名古屋市内で大木が 1 本生育しているのが確認された。

【形態】

常緑性の小高木。若枝は稜があり、淡黄緑色、無毛である。葉は互生し、長さ 5~10mm の柄があり、葉身は長楕円形~狭倒卵形、長さ 5~7cm、幅 1.8~3cm、先端は鈍頭または鋭頭、辺縁の上部に不明瞭な波状の低鋸歯があり、革質、表面は光沢があり、両面とも無毛である。花期は 3~4 月、花は白色で葉腋に集まってつき、花冠は直径 8mm 程度、果実は長楕円形で長さ 10~13mm、黒熟する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：50 名古屋北東部（長谷川泰洋 586, 2023-3-20, 花；芹沢 101724, 2023-6-17, 果実）。

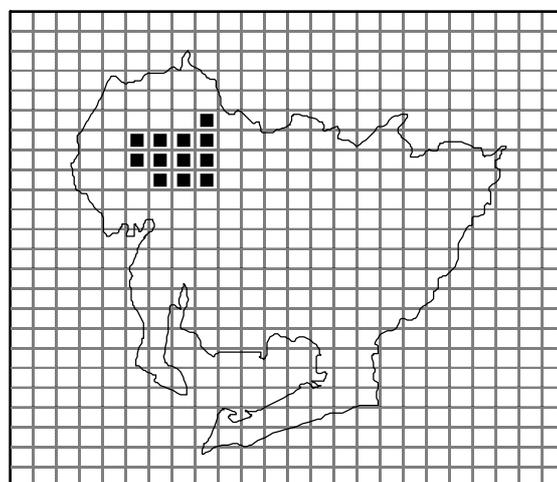
【国内の分布】

本州（鳥取県以西）、四国、九州。分布域に千葉県が含まれていることもあるが、大場(編) (2003) によれば「県内には確かな記録がない」という。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島（済州島）。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

低地~丘陵地の林内や林縁に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

名古屋市千種区植田山の沢沿いの二次林内に、1 株だけが本種としては大きな個体(樹高約 15m、胸高直径約 40cm) が生育している。周辺には 10 株以上の幼木が散在している。

【保全上の留意点】

個別的な保全が必要である。周辺に散在している幼木も、親木と合わせて保全を要する。

【特記事項】

従来自然分布は鳥取県以西とされてきた植物で、自生ならば著しい東限産地となる。しかし、本来の自生地ならばさまざまな大きさの個体が生育しているはずで、老大木 1 本というのは何とも不自然である。現地は何か植栽されるような場所には見えないが、古い時代の植栽に由来する可能性は否定できない。しかし、何はともあれ貴重なものであるから、このことは承知の上で評価対象とした。周辺の幼木は樹高 1m 程度のものが多く、比較的近年になって温暖化等の影響で発芽・生長が可能となったのかもしれない。

【引用文献】

大場達之(編), 2003. 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県植物誌 p.445. 千葉県.

【関連文献】

保木本 1 p.99, 平新版 4 p.211.

(執筆者 芹沢俊介)

コタヌキモ *Utricularia intermedia* Heyne

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 4、人為圧階級 3、固有性階級 1、総点 16。温帯性の水草で、2020 年版では「愛知県では既知のすべての自生地で絶滅」と記述したが、藤岡でわずかに残存しているのが確認された。

【形態】

多年生の食虫性水草。茎は泥上をはい、多数の捕虫囊をつけた地中葉で固着する。水中葉は互生して重なり合い、長さ 1cm 程度、二叉状に分岐して扇形となり、捕虫囊はなく、裂片は幅 0.3~0.6mm で辺縁に鋸歯がある。花期は 6~9 月、高さ 5~15cm の花茎を水上に伸ばし、1~5 花をつける。花冠は黄色で直径 12~15mm、距は前向きで下唇とほぼ同長、がくは長さ約 3mm である。秋には茎の先端に直径 3~8mm の球状~楕円状の殖芽を作り、越冬する。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：23 藤岡 (芹沢 104127, 2024-7-9)。東：13 豊川 (一宮町大木, 芹沢 54046, 1989-10-29)、17 田原東部 (田原町野田, 芹沢 53624, 1989-9-27) にも生育していたが、これらの場所では消失した。16 豊橋南部 (高師原清水池, 鳥居喜一 2054, 1952-8-2, HNSM)、50 名古屋北部 (田代町竹下、井波一雄 s.n., 1937-8-18, CBM233671)、51 名古屋南東部 (天白区八事、浜島繁隆 1078, 1968-8-25) で採集された標本もある。豊橋北部の葦毛湿原にも現存するが、これは移入されたものである。

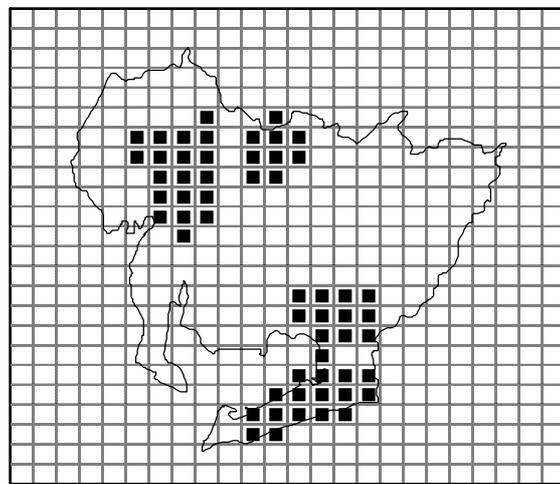
【国内の分布】

北海道、本州 (三重県以北)、九州 (大分県) に生育する。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

浅い池沼に生育する。愛知県の生育地は、いずれも湧水湿地中の浅い水たまりである。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地		○		
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数はごく少ない。田原赤羽根では湿地の上に道路ができて水脈が切れ、絶滅した。

【保全上の留意点】

葦毛湿原のものは由来不明であったが、最近になって豊橋南部の細谷湿地から 1971 年 8 月 5 日に移植されたものという話を聞いた。しかし、それを裏付ける当時の記録等は確認できなかった。本種は愛知県の自生地ではまだ開花が確認されていないが、葦毛湿原では 2 回開花したとのことなので、最初の移植後他の人が栽培品等を投入した可能性もある。いずれにしても本種は葦毛湿原の自然という観点からは余計なもので、できれば除去が望ましい。本種の場合、愛知県で新たな自生地が発見される可能性は皆無ではないが、葦毛湿原のような付け加え行為が行われると、発見された自生地が保全に値するかどうか、判断がつかなくなってしまう。湿地はどこも同じではない。ないものは「ない」のがその湿地の個性であり、その「ない」という状態を壊す移入は自然破壊行為である。本種のような希少種の場合域外保全は無意味ではないが、その場合は公的な機関の手で、管理が行き届く場所で行わなければならない。

【特記事項】

今回再確認された場所は以前生育を確認していた場所のすぐ近くで、自生と思われるが、周辺にナガエモウセンゴケが多量に生育しているのは少し気になる。

【関連文献】

保草本 I p.122, 平新版 5 p.165, SOS 旧版 p.83.
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.152. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 芹沢俊介)

モトマチハナワラビ *Sceptridium* sp.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 15。本州中部に分布するシダ植物で、愛知県は分布域の北限に当たる。県内では生育地が少ない。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は短く直立する。葉は年に 1 枚、秋に出て翌年の葉が展開する頃まで残存する。共通柄は長さ 3.5~8cm、栄養葉は長さ 7~15cm の柄があり、葉身は五角形、長さ 8~18cm、幅 11~24cm、やや 3 出葉的に 3 回羽状に深裂し、葉裂片は長楕円形で辺縁に欠刻状の鋸歯があり、表面は深緑色でやや光沢がある。孢子葉は長さ 15~25cm の柄があり、葉身は長さ 6~12cm、3 回羽状に切れ込む。孢子は 10 月下旬~11 月中旬に熟す。シチトウハナワラビに比べ、共通柄がやや短い傾向があり、葉の切れ込みが深く、裂片が細い。葉の切れ込みが深いため葉縁の鋸歯が顕著なように見えるが、オオハナワラビの葉縁の鋭鋸歯とは形状がやや異なる。同所に生育しているオオハナワラビに比べ、孢子はやや遅く成熟する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾:37b 尾張旭(芹沢 86517, 2010-10-17)、
50 名古屋北部(芹沢 104596, 2024-11-14)。

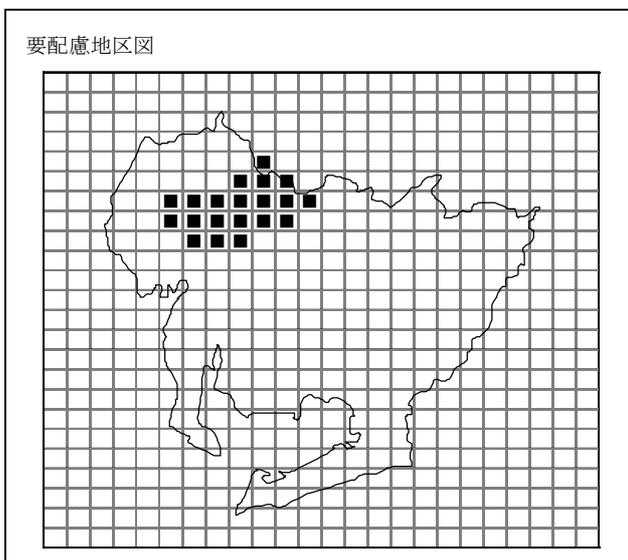
【国内の分布】

研究中の人がいるので、記述を避ける。

【世界の分布】

おそらく日本固有種と思われる。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

尾張旭の生育地はやや平坦な二次林内である。名古屋北部の生育地は常緑樹の多い林内である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

尾張旭では、森林公園内の 1 か所に、オオハナワラビと混生して、約 20 株の小群落がある。名古屋北部では保全緑地の小さい沢にそった林内に、オオハナワラビ、アカハナワラビ、本種とオオハナワラビの雑種の可能性がある大形の個体と混生して、数十個体が群生している。

【保全上の留意点】

どちらの生育地も保全されている場所であるが、名古屋北部の方は広場に接しているため、その拡張工事等で失われるおそれがある。

【特記事項】

尾張旭の植物は、2020 年版ではシチトウハナワラビに含めて掲載されている。2024 年のリスト案にも掲載されていないが、名古屋市で新しく発見された集団を検討したところ、シチトウハナワラビからは葉の切れ込みが深く、裂片が細いことで形態的には一応識別可能で、何らかの形で区別して掲載する方がよいと判断された。モトマチハナワラビとシチトウハナワラビの遺伝的關係は現在検討されているようだが、ここではとりあえず *Sceptridium* sp. として収録しておく。確実にシチトウハナワラビと判断される植物は愛知県では田原東部で確認されているだけで、レッドリストの評価は個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 16、絶滅危惧 IA 類に変更される。

【関連文献】

現在のところ公表されている一般的な文献はない。

(執筆者 芹沢俊介)

メヤブソテツ *Cyrtomium caryotideum* (Wall. ex Hook. et Grev.) C.Presl

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 14。今まで希少偶産種としてきた植物だが、2ヶ所目の産地が発見されたので評価対象に加えた。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は斜上し、葉を束生する。新葉は晩秋に展開し、葉柄は長さ 30～40cm、基部に暗褐色で卵状楕円形～広披鉢形の鱗片を密生するが、上部では鱗片は小さく、ややまばらになる。葉身は単羽状複生、頂羽片は明瞭、側羽片は 2～7 対で短柄があり、卵形～狭長卵形、基部は円形～広楔形で多くの場合両側または前側に突起があり、先端は鋭尖頭、辺縁には細かい鋭鋸歯がある。胞子のう群は羽片裏側の辺縁部を除く前面につき、包膜は円形である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部 (小林 63026, 1997-12-28)。西：28 額田 (芹沢 100055, 2021-11-18)。

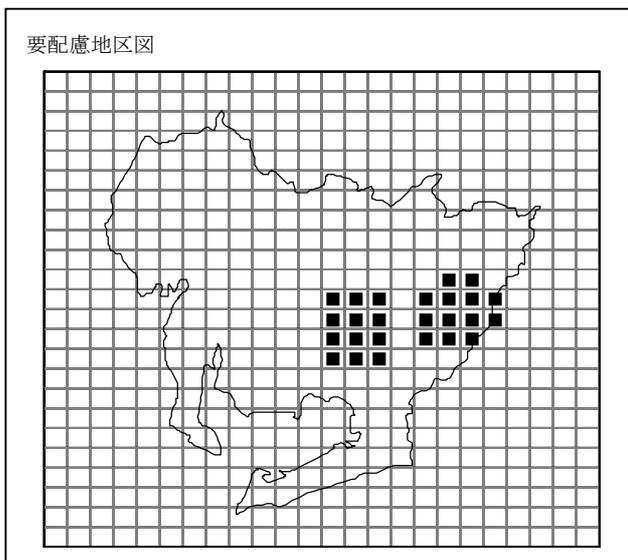
【国内の分布】

本州 (東北地方南部以西)、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島 (済州島)、台湾、中国大陸、フィリピン、南アジア。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

石灰岩地の林内や林縁に生育していることが多いが、愛知県の生育地はどちらも石灰岩地ではない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

鳳来北東部では、山道の側溝状の場所に 1 株生育していた。額田でも山の中の道路わきに、1 株だけ生育していた。

【保全上の留意点】

評価対象としたが、やや偶産的であることに違いはない。消失しても、それは自然の変動内かもしれない。

【特記事項】

新葉が晩秋に展開し、胞子が冬にかけて成熟することで、同属の他種とは明瞭に異なっている。鳳来寺山周辺では他にも小群落があると報告されている (小林 2020) が、公開された標本室に標本が収蔵されておらず、更に同書には鳥居シダ園からの逸出が疑われるシダ植物がいくつか掲載されていることもあって、生育状況を含めて再確認が必要である。

【引用文献】

小林元男, 2020. 鳳来寺山・新城市の植物. 346pp. しんしろ山観会, 新城.

【関連文献】

平シダ p.163, 学シダ II p.430.

(執筆者 芹沢俊介)

イワチドリ *Amitostigma keiskei* (Maxim. ex Franch. et Sav.) Schltr.

【評価理由】

全国的に減少傾向の著しいラン科植物で、2020 年版では「現存を確認できない」と記述したが、まだ生育しているという報告を受け、写真も確認した。現地確認はまだ行っておらず標本も採取できていないが、さしあたり残存と見なし、話をもとに定性的に絶滅危惧 IB 類と評価しておく。

【形態】

多年生草本。紡錘状に肥厚した根がある。茎は斜上し、高さ 5~15cm になる。葉は茎の中部に 1 個つき、長楕円形、長さ 3~7cm、幅 6~15mm、先端は鋭頭、辺縁は全縁、基部は茎を抱く。花期は 4~6 月、花は茎の上部に一方に傾いて数個つき、淡紅紫色、苞は披針形、長さ 4~10mm である。背がく片は楕円形、長さ 3.5~4.5mm、側がく片は斜長楕円形でやや短く、側花弁は斜卵形、背がく片とほぼ同長、辺縁に紅紫色の斑点がある。唇弁は長さ 10~12mm、大きく開出し、3 深裂して中央裂片の先端はさらに 2 裂し、各裂片は幅約 2mm、基部に紅紫色の斑点がある。距は白色、長さ 1.5~2mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

見せていただいた写真の撮影地は東三河 (区画は公表しない) である。東：8 鳳来南東部の記録 (小林 2019) もある。比較的最近では、西：23 藤岡 (塚本威彦 149, 1992-6-14) と尾：45 犬山 (平嶋 敏 452, 1989-5-9) でも生育が確認されている。どちらの場所も最近の調査では現存を確認できなかったが、十分に探索したわけではないので、残存の可能性は残されている。東：3 東栄 (加藤等次 s.n., 1968-6-2)、12 新城 (奥井道, 鳥居喜一 6139, 1966-5-1, HNSM)、西：19 旭 (大原準之助 s.n., 1965-7-20)、25 豊田北西部 (岡本英一 281, 1958-5-19) で採集された標本もある。

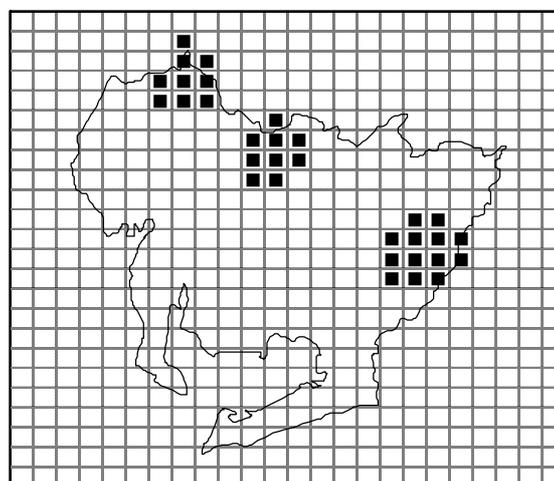
【国内の分布】

本州 (中部地方、近畿地方)、四国。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

川沿いなどの湿った岩場に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

藤岡と犬山は、生育地としてはやや条件の悪い場所に、当時から辛うじて残存しているという状況であった。本種の場合、全国的には山草業者による商業的採取が問題とされることが多い。しかし山草業者による採取は、個体数があるレベル以下にまで減少すれば、採算がとれないため停止される。愛知県の状況は、すでにそのレベルを割り込んでいる。ここまで減少させたという点で商業的採取の責任は大きい、現在僅かに残存している集団に対する最大の脅威は、むしろ好事家の手で絶滅するまでくり返される、非商業的採取である。

【保全上の留意点】

基本的には国民共有の資産である自然物を個人の庭に取り込んでしまう山草愛好家のモラルが問題であるが、このような道義的な訴えだけでは絶滅を回避できない。当面は秘匿以外に有効な手がなく、分布情報の公表に際しては慎重な配慮が必要である。

【引用文献】

小林元男, 2019. 愛知県民の森の植物 p.28. 愛知公園協会県民の森, 新城.

【関連文献】

保草本Ⅲp.13, 平新版 1 p.182, 環境省 p.341, SOS 旧版 p.109+図版 29, SOS 新版 p.43,45.

(執筆者 芹沢俊介)

ハルザキヤツシロラン *Gastrodia nipponica* (Honda) Ohwi

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 14。湖西丘陵の静岡県側では以前から知られていた植物であるが、最近になって愛知県側でも生育が確認された。今回確認できたのは 2ヶ所だが、その後他で見つかったという話も聞くので、あるいは集団数階級 3、総点 13、絶滅危惧 II 類が適切かもしれない。

【形態】

腐生の多年生草本。根茎は長さ 4~7cm、直径 3~7mm の屈曲した棒状になる。地上茎は根茎の先端から 1 本出て、高さ 5~10cm、2~3 個の膜質の鱗片葉をつける。花期は隣接する静岡県では 4 月中~下旬、茎の先端部に黒褐色の花を 1~6 個つける。苞は卵形、長さ 4~6mm である。花は 3 がく片が合着して長さ 1.7~2.5cm の鐘状になり、花柄は花時には長さ 1cm 以下であるが、花後著しく伸長して 25~35cm に達する。果実は 5 月中~下旬に熟し、細長い楕円形、長さ 2.5~3.5cm、直径 6~8mm、暗褐色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：12 新城（芹沢 104044, 2024-6-4）、15 豊橋北部（芹沢 104048, 2024-6-4）。

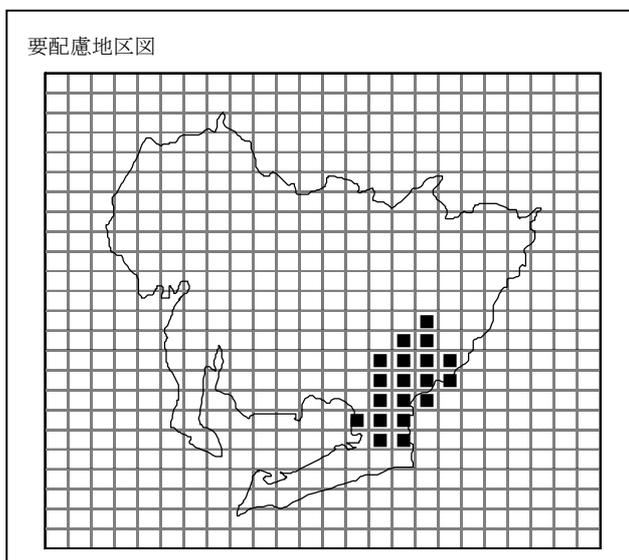
【国内の分布】

本州（静岡県以西）、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本および台湾。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

通常は暖帯~亜熱帯の常緑広葉樹林下に生育しているというが、愛知県および湖西丘陵静岡県側の自生地はいずれも発達した二次林か造林地である。クロヤツシロランと異なり、竹林では見えない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

見せていただいた範囲では、新城は 20 株程度、豊橋は数株であった。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全する必要がある。写真撮影等による踏み荒らしにも注意が必要である。

【関連文献】

保草本Ⅲp.27, 平新版 1 p.203.

(執筆者 芹沢俊介)

ヤクシマヒメアリドオシラン *Kuhlhasseltia yakushimensis* (Yamam.) Ormerod

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 3、総点 14。最近になって愛知県での生育が確認された小型のラン科植物である。

【形態】

小型の多年生草本。茎の下部は地上を横に這い、先端部は立ち上がって開花時に高さ 7~10cm になり、基部に 2~3 枚の葉を互生する。葉は長さ 2~5mm の柄があり、葉身は卵形、長さ 5~15mm、幅 4~8mm、先端は鋭頭、暗緑色で無毛である。花期は 7 月中~下旬、花は茎の先端部に総状に 1~5 個つき、がく片と側花弁は互いに接してつき、長さ約 5mm、唇弁は長さ 7~8mm で白色、基部は袋状の距となり、舷部は広卵状倒三角形で先端は深く 2 裂する。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：7 設楽東部 (中西普佐子 4875, 2020-7-23)。西：5 稲武 (芹沢 104176, 2024-8-5)、21 下山 (芹沢 104167, 2024-7-30)。

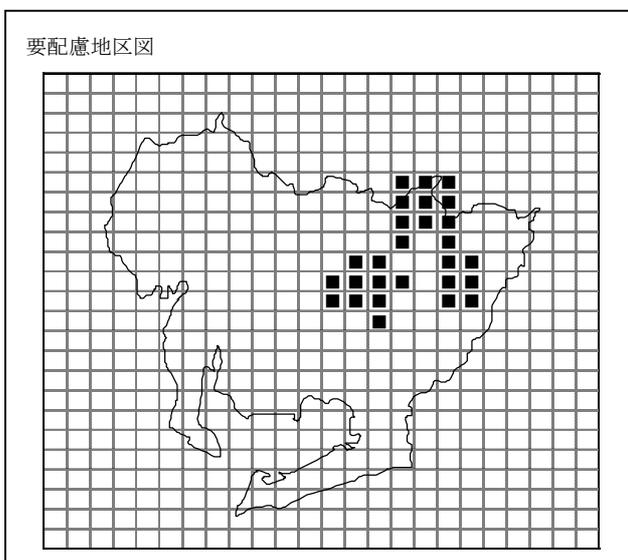
【国内の分布】

本州 (中部地方、近畿地方)、四国、九州、

【世界の分布】

日本~中国大陸、フィリピン。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

設楽東部では、山腹斜面にあるよく育った造林地の湿った林床の、スギの根元、岩陰、流れのわきなどに生育している。下山も沢沿いの造林地だが、稲武は尾根の造林地である。一般には「暖温帯の林内に生育」と言われるが、愛知県では標高 520~930m のやや冷涼な場所に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数はそれほど多くない。過去からの増減は不明だが、現在のところ特に減少していることはなさそうである。

【保全上の留意点】

生育地の森林を保全する必要がある。また、小型で目立たない植物だがそれでもラン科なので、生育地点の詳細な情報は公表を控える必要がある。

【特記事項】

比較的近年になって愛知県での生育が確認された種類であるが、とにかく小さくて目立たない植物で、「ここ！」と教えてもらわなければなかなか見つからない。「他にもある」という話も聞くので、一層の探索が必要である。

【関連文献】

平新版 1 p.209.

(執筆者 芹沢俊介)

ムカゴサイシン *Nervilia nipponica* Makino

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 14。最近になって愛知県での生育が確認された小型のラン科植物である。

【形態】

多年生草本。地下に球茎があり、走出枝を出してその先に子球をつける。葉は 1 枚、花後に出て長さ 2~10cm の柄があり、葉身はやや五角形状の円心形、大きいものは長さ、幅とも 5cm に達するというのが愛知県のものは 2.5~3.5cm である。花期は 5~6 月、花は高さ 7~10cm の花茎の先端に 1 個つき、筒状でほとんど開かず、長さ 1.5cm 程度、暗紅紫色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：3 東栄 (芹沢 101580, 2023-5-28)。西：21 下山 (芹沢 104591, 2024-10-29)。

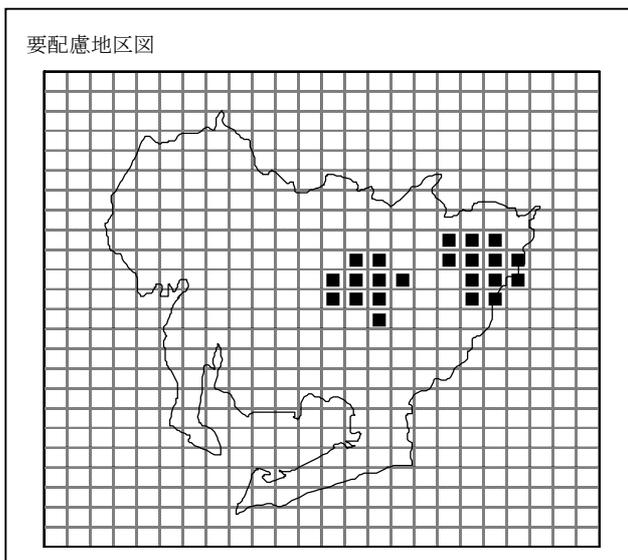
【国内の分布】

本州 (関東地方以西)、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島 (済州島)。

要配慮地区図



【生育地の環やや湿った境／生態的特性】

一般的には暖帯林の林床に生ずるというが、愛知県では 2ヶ所とも造林地のやや湿った林床に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

東栄では近接していくつかの集団があり、葉だけの株は合わせて 100 を超えるが、開花個体は 2023 年に探索した限りでは 1 株しか見つからなかった。下山では葉だけのものが 2~3 株が確認されただけである。個体数階級は、開花個体だけを数えれば 4 だが、とりあえず 3 としておく。採取圧がある植物とは思えないが、どちらの産地も環境アセスメントの調査で発見されたものであり、そのため人為圧階級は 3 とした。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することが望ましいが、造林地なのでそのうちに伐採されると思われる。特殊な環境の場所に生育しているわけではないので、更に新しい産地を探索する必要がある。

【特記事項】

葉はおよそラン科とは思えない形状をしている。

【関連文献】

保草本Ⅲp.29, 平新版 1 p.216-217.

(執筆者 芹沢俊介)

カゲロウラン *Zeuxine agyokuana* Fukuy.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧力階級 3、固有性階級 2、総点 14。最近になって愛知県での生育が確認された小型のラン科植物である。

【形態】

常緑性の多年生草本。茎の下部は地上を匍匐して節から根をだし、上部は直立して高さ 8~16cm になる。葉は茎の中部に 3~5 個互生し、葉柄は短くて基部は鞘となり、葉身は卵形~卵状楕円形、長さ 2~4cm、幅 1~2cm、先端は鈍頭、両面無毛で表面には光沢がある。花期は 10 月、花は茎の先端部に 2~6 花つき、ほぼ無柄、苞は狭卵形で長さ 3~5mm、子房は長さ 7~10mm、花被片は長さ 3~4mm でやや紅色を帯びた褐色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：12 新城（芹沢 104558, 2024-10-18）、
15 豊橋北部（芹沢 104443, 2024-10-2）。

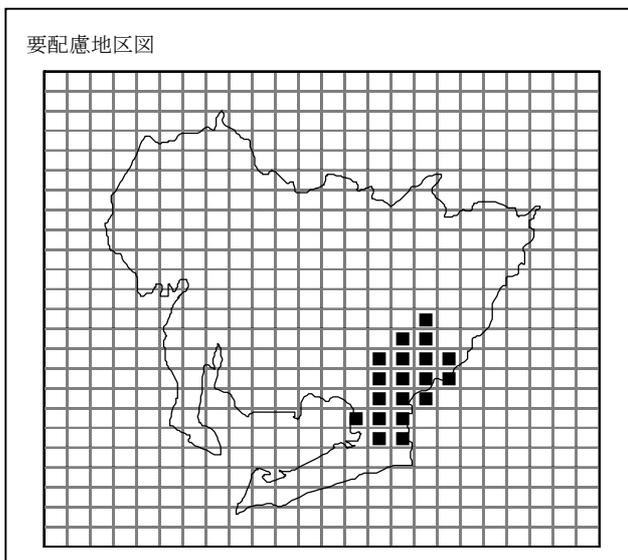
【国内の分布】

本州（関東地方以西）、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、台湾、中国大陸中南部、ヒマラヤ。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

新城は尾根の林内、豊橋は沢からやや離れた斜面中腹の、二次林内ではあるが伐採を免れた常緑樹の下などに生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

2ヶ所とも小群落である。現在のところ、特に減少しているようには見えない。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全する必要がある。目立つ植物ではないが、豊橋の方は他植物の写真撮影に訪れる人が多いようなので、踏みつけに注意する必要がある。

【関連文献】

平新版 1 p.231.

(執筆者 芹沢俊介)

アズマツメクサ *Tillaea aquatica* L.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 4、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 15。小型の低湿地性植物で、愛知県では最近になって福岡 (2024) により生育が報告された。

【形態】

小形の 1 年生草本。茎は基部で分枝し、基部は地表を貼って節から根を出し、中上部は立ち上がって長さ 4~8cm になる。葉は対生し、無柄、葉身は線状披針形で、長さ 5~8mm、幅 1mm 程度である。花期は 4~7 月、花は茎の上部の葉腋に 1 個ずつつき、長さ 1.5mm 程度、無柄、がく裂片は 4 個で卵形、花弁も 4 個で白色であるが、泥を被って細部が観察できないことも多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾: 57b 愛西 (福岡義洋 7191, 2021-5-29)。隣接する岐阜県側にも生育しているという。

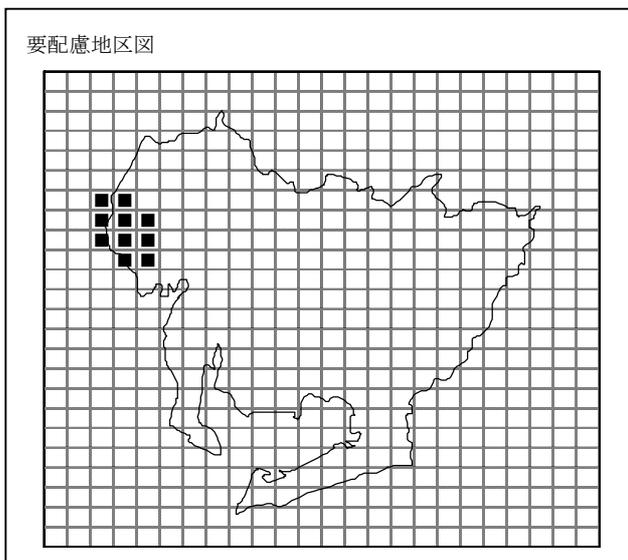
【国内の分布】

北海道、本州、四国。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

感潮域の、水の流れの影響をあまり受けず、満潮時は水没し、干潮時は陸地となる日当たりのよい場所である (福岡 2024)。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地は 1 カ所だけで、株数は多く見積もっても 250 株程度 (小型の植物なので個体数階級は 3) であるという (福岡私信)。安定した環境であるが、すぐ上流で橋の建設が予定されているとのことで、その影響を受ける可能性がある。

【保全上の留意点】

大河川下流部の低湿地的環境を全体として保全する必要がある。

【引用文献】

福岡義洋, 2024. 愛知県の木曾川にもアズマツメクサを記録する. 水草研究会誌(116): 33-35.

【関連文献】

保草本 II p.158-159, 平新版 2 p.229.

(執筆者 芹沢俊介)

ゲンバイヒルガオ *Ipomoea pes-caprae* (L.) Sweet

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 15。熱帯系の海浜植物で、愛知県では最近になって分布してきたと思われる。もともとは 1 株と思われるがある程度の面積に広がっているため、定着していると判断して評価の対象とした。

【形態】

多年生草本。茎は地表を長く這い、古いものは砂中に埋まる。葉は軍配形、長さ、幅とも 3~6cm、先端は凹頭、基部は心形~切形、全縁で質は厚い。花期は愛知県では 8~9 月、花は長さ 4~6cm の花序枝の先に 1~2 個つき、花冠は紅紫色で直径 4~5cm、果実は扁球形で直径 1.5cm 程度である。種子は海流に乗って散布される。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：16 豊橋南部（表浜海岸，中西普佐子 5580，2022-8-28；芹沢 101209，2023-4-22）。

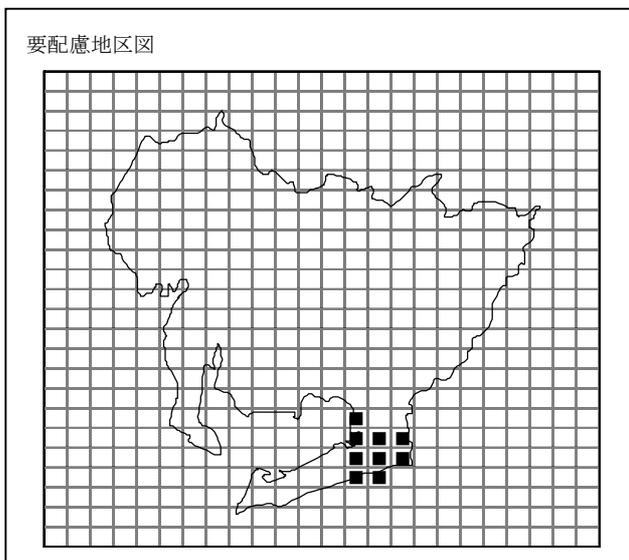
【国内の分布】

本州（紀伊半島）、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

熱帯~亜熱帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

海岸の砂地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				○
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

おそらくもとは 1 個体と思われるが、現在は 10m 四方近くに広がっている。極度に寒い冬が来れば、消失する可能性がある。

【保全上の留意点】

個別的な保全が必要である。

【特記事項】

「本州の海岸にも種子が流れ着いて発芽するが、寒さのため冬には枯れて定着しない」（米倉 2017）と言われているが、豊橋のものは確実に越冬している。芹沢 101209 は春期に地下の匍匐茎から伸長した植物体である。

【引用文献】

米倉浩司, 2017. ヒルガオ科. 大橋広好 (編), 新版日本の野生植物 5: 23-32. 平凡社, 東京..

【関連文献】

保草本 I p.203, 平新版 5 p.29.

(執筆者 芹沢俊介)

チャボハナヤスリ *Ophioglossum parvum* M.Nishida et Kurita

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 13。小型のシダ植物で、愛知県では最近になって生育が確認された。

【形態】

夏緑性のシダ植物。根茎は短く、2~5本の葉を出す。共通柄は通常長さ1cm以下、基部が土中にあっても1.5cm程度、栄養葉は地表に接して出て無柄またはごく短い柄があり、葉身は通常楕円形、稀に卵形、長さは通常1~2cmだが時に5mm程度のこともあり、幅は0.3~1cm、先端は鋭頭、基部も次第に狭くなることが多い。孢子葉は通常長さ5~8cmの柄があるがこれも1cm程度のこともあり、孢子のう穂は長さ1~2cmである。葉が春から秋まで展開するため、孢子成熟期は長期間にわたる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（芹沢 96268, 2020-9-6）、18 田原西部（芹沢 104036, 2024-6-1）。西：26 豊田南西部（芹沢 100296, 2022-5-26）。尾：42a 阿久比（芹沢 102992, 2023-10-6）。

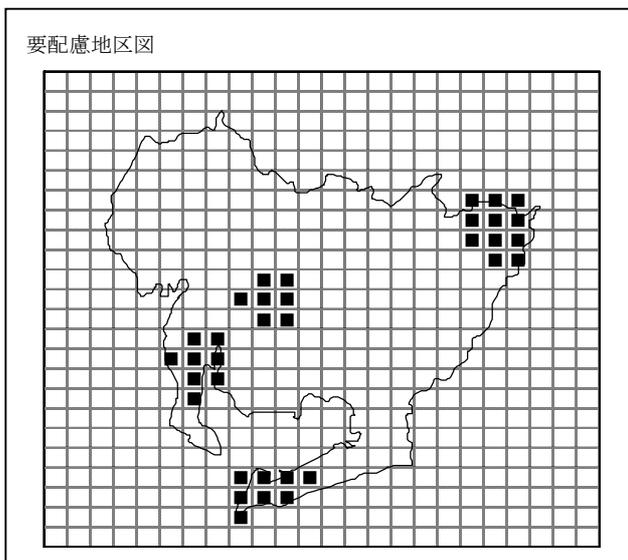
【国内の分布】

本州（伊豆諸島青ヶ島、静岡県~三重県）、九州（中南部）。

【世界の分布】

日本、台湾。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

本来は半裸地状の草地に生育する植物と思われるが、近年九州中南部各地の人里近くの公園などで生育が確認されている。愛知県の場合、田原西部は公共施設前の芝生、豊田南西部は公園の草地で、この2ヶ所は九州と同様の環境だが、阿久比は神社前やや明るい林内である。豊根は標高410mの林道わきの草地で、本種としてはやや例外的な、かなり山地寄りの生育地である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○	○	○	
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

どの場所も小群落だが、阿久比はやや個体数が多かった。

【保全上の留意点】

生育地の状況から見て個別的な保全は困難と思われるが、その一方で注意深く探せば、新たな産地が発見される可能性もある。

【特記事項】

ハマハナヤスリからは、葉数がやや多くて1枚のことはほとんどなく、栄養葉は地表に接してつき、長さの割に幅が広いことで区別される。一般に独立種とされているが、熊本県氷川町では栄養葉のあるもの（芹沢 90382, 2015-7-28）とないもの（同 90381）が同所的に生育しており、青ヶ島でも同様らしく、実際にはサクラジマハナヤスリ *O. kawamurae* Tagawa の栄養葉を持つ型の可能性がある。通常は栄養葉を持つハマハナヤスリでも、稀に栄養葉のないもの（例：岐阜県御嵩町前沢、芹沢 55698, 1990-6-27 の中の一部個体）がある。2024年のリスト案では絶滅危惧ⅠB類として掲載したが、再検討の結果評価が変更された。

【関連文献】

平シダ p.63, 学シダ I p.289.

（執筆者 芹沢俊介）

ナンカイヌリトラノオ *Asplenium serratipinnae* T.Fujiw. et Watano

【評価理由】

個体数階級 2、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧力階級 2、地域固有性 2、総点 13。分布域の北限になる植物で、愛知県では集団数が極めて少ない。知多にヌリトラノオの類が生育していることは以前から知られていたが、最近になって新種として記載された (Fujiwara et al. 2020) ので、レッドリストに加えることにした。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は短く、葉を束生する。葉柄は長さ 2~12cm、紫褐色である。葉身は線形、長さ 15~35cm、幅 3~6cm、単羽状複葉、側羽片は 15~30 対で、長さ 1.8~3cm、幅 5~10mm、ほとんど無柄、基部前側は耳状、時に裂片状になり、辺縁には顕著な鋸歯がある。中軸は紫褐色で、先端に無性芽をつける。胞子のう群は各羽片の中肋と辺縁の中間に前側は 5~6 個、後側は 3~5 個、基部裂片にも少数つき、長さ 1.5~2.5mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：36 西尾南部 (村松 34765, 2023-9-26)。
尾：41b 知多 (芹沢 99671, 2021-10-5)、44a 美浜 (堀田善久 s.n., 1992-1-3)。

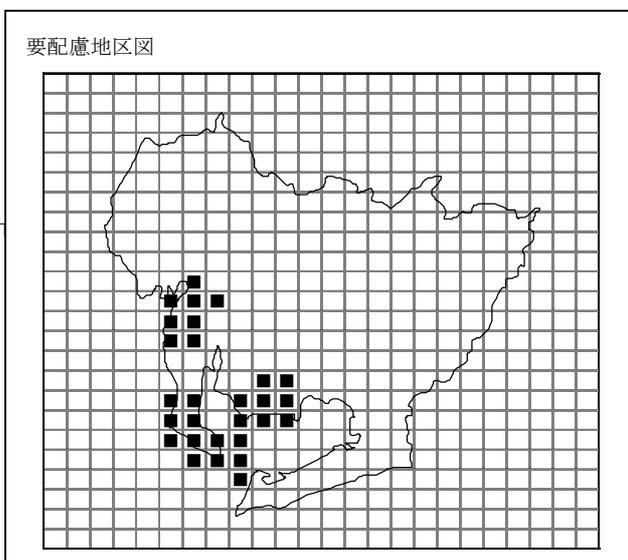
【国内の分布】

本州 (伊豆諸島、伊豆半島以西)、四国、カ

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

知多では常緑樹林内の斜面に生育している。美浜の生育環境は不明である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

知多の生育地は 1 箇所だけだが、そこでは個体数は多い。市街地に近い場所だが、現在のところ特に減少していることはなさそうである。美浜では、2021 年にざっと調査した範囲では確認できなかった。ゴルフ場建設により失われた可能性が高いが、どこかに残存しているかもしれない。西尾南部は 1 株生育していただけらしい。

【保全上の留意点】

生育地の森林は一応保全されているが、林内の整備などにより失われることがないよう、特に注意が必要である。

【特記事項】

ヌリトラノオ 2 倍体とカミガモシダの交雑に由来する複 2 倍体種である。東三河ではまだ確認されていないが、湖西丘陵の静岡県側にはある (標本：三ヶ日町、芹沢 78268, 2002-10-2)。

【引用文献】

Fujiwara, T., J. Ogiso, S Matsumoto and Y. Watano, 2020. *Asplenium serratipinnae* (Aspleniaceae: Polypodiales), a new allotetraploid species in the *A. normale* complex.

【関連文献】

現在のところ一般的な図書には掲載されていない。

(執筆者 芹沢俊介)

ナガオノキシノブ *Lepisorus rufofuscus* T.Fujiw.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 13。山地性の小型の着生植物で、愛知県では生育地も個体数も少ない。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は長く（時にやや長い程度のこともある）這い、直径 1.5～2.5mm、三角状披針形で長さ 2.5～3mm、黒褐色で辺縁は淡色の鱗片におおわれる。葉は 2～5mm 間隔、時にはそれ以上離れて出て、葉柄は長さ 0.5～2cm、紫色は帯びない。葉身は線状披針形、長さ 15～20cm、幅 4～7mm、先端はやや尾状に伸び、質は比較的薄い。新葉は夏に展開し、胞子のう群はやや楕円形、葉身先端部（尾状部を除く）の中肋と辺縁の中間に 1 列に並び、若時小鱗片におおわれる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（村松 12863, 1993-7-10）、4 津具（芹沢 78769, 2003-8-24）。西：5 稲武（面ノ木峠、芹沢 28260, 1978-8-4）で採集された標本もある。

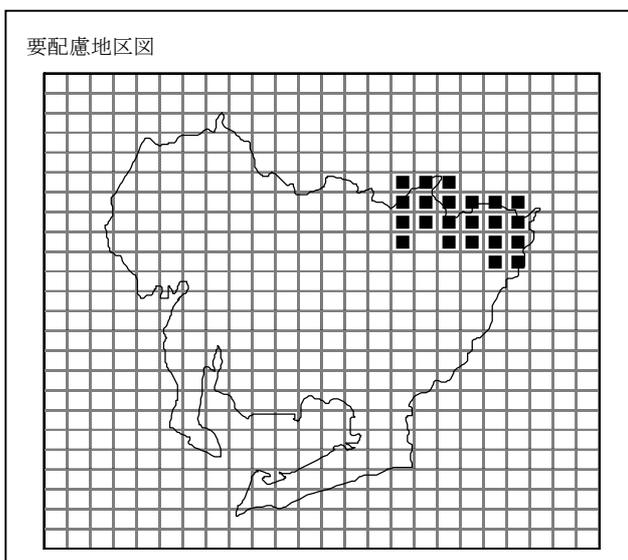
【国内の分布】

北海道、本州、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の落葉広葉樹の樹幹に着生していることが多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○		
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

どの場所も、個体数はそれほど多くなかった。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全する必要がある。

【特記事項】

面ノ木峠は、その後あまり注意しておらず標本も採取していないため集団数に含めていないが、どこかに残存している可能性は高いと思われる。レッドデータブックあいち 2020 には掲載されていないが、再検討の結果愛知県では意外に少なく、収録するのが適切と判断された。

【関連文献】

平シダ p.266, 学シダ II p.463.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒトツバハギ *Flueggea suffruticosa* (Pall.) Baill.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。愛知県では以前は時折見かけた種類であるが、近年見る機会が減少している。

【形態】

落葉性の低木。高さ 2~3m になる。葉は互生し、3~6mm の柄があり、葉身は長楕円形、長さ 4~7cm、先端は鋭頭または鈍頭、基部はくさび形、辺縁は全縁で小さく波打ち、両面無毛、表面は緑色、裏面は白色を帯びる。花期は 6~8 月。雌雄異株で、雄花は葉腋に多数束生し、雌花は葉腋に 1~5 個つく。蒴果は扁球形で、直径 4~5mm になる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：15 豊橋北部（芹沢 42046, 1985-9-9）、17 田原東部（芹沢 78206, 2002-10-3）、18 田原西部（小林 44490, 1993-6-19）。尾：37a 瀬戸（日比野修 5187, 2000-8-27）、48 春日井（山田果与乃 734, 2001-8-29）、50 名古屋北東部（芹沢 77892, 2002-7-1）。

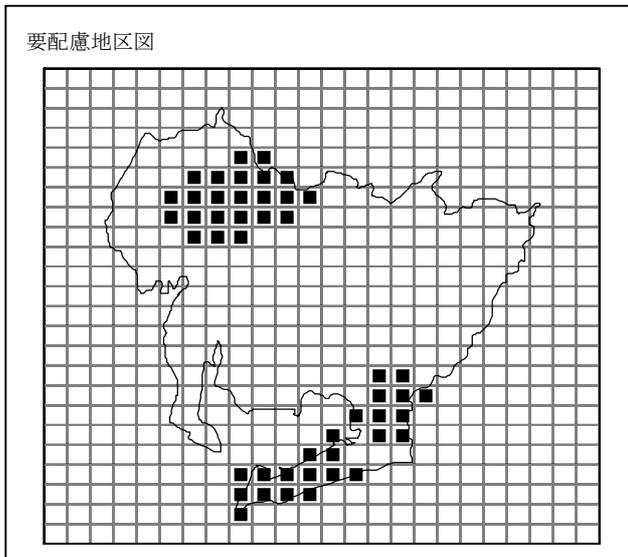
【国内の分布】

本州（中部地方以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

丘陵地の林縁や疎林内、草地などに生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○		
湿地				
水域				

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地の林縁や疎林内、草地などに生育する。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともとそれほど多くはないがそれでも以前は時折見かけた種類で、名古屋市のレッドデータブックを作成していて、改めて県内全域でも最近ほとんど見ていないことに気づいた種類である。個体数階級と集団数階級は見込み値である。本種が生育できるような草地環境が少なくなったことが減少の要因と思われる。

【保全上の留意点】

まずは確実に残存している場所を探索する必要がある。残存している場所を見つけたら草刈りなどの草地保全策を検討する必要があるが、現実問題としては困難かもしれない。

【特記事項】

和名は、全体にハギに似ているが葉が単葉だからである。2024 年のレッドリスト案では準絶滅危惧として掲載したが、再検討の結果評価が変更された。

【関連文献】

保木本 I p.339, 平木本 I p.263.

(執筆者 芹沢俊介)

メグスリノキ *Acer maximowiczianum* Miq.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。愛知県では個体数が少ない。開花結実を確認していないが、もともと結実することが稀な植物なので、県内に定着していることは確実である。

【形態】

落葉性の高木。高さ 20m 以上になるが、愛知県のものそれほど大きくない。葉は対生し、3小葉からなり、頂小葉は長さ 8~14cm、幅 3~7cm、長さ 5~12mm の柄があり、上半部に低い鋸歯があり、裏面に毛が多い。花は 5 月に咲き、果実が大きく翼と共に長さ 4~5cm になるが、愛知県ではまだ花も果実も見えていない。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山 (瀧崎 37116, 2022-9-4, T)、2 豊根 (加藤等次 3575, 1993-8-24)、3 東栄 (芹沢 63580, 1992-9-18)、4 津具 (小林 52171, 1994-6-18)、9 鳳来南部 (小林 29405, 1985-11-12)。西：5 稲武 (鈴木 学 1368, 1983-6-14)、19 旭 (小林 43200, 1993-5-23)。

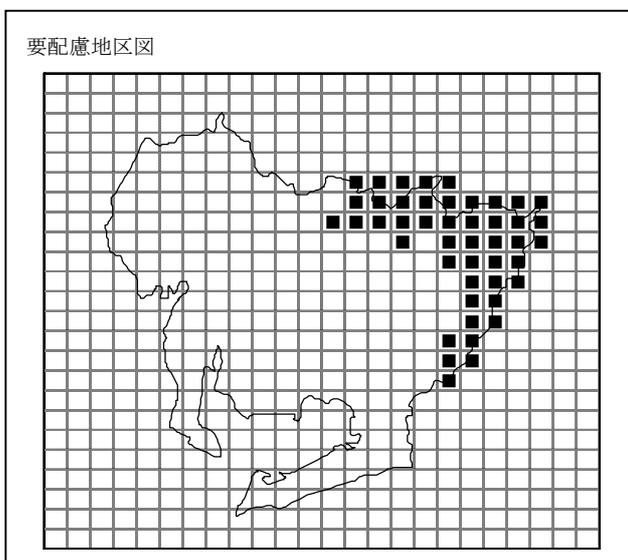
【国内の分布】

本州 (宮城県以南)、四国、九州。

【世界の分布】

日本および中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の落葉広葉樹林内に生育している。沢沿いにも尾根近くにも見られるが、極相に達した自然林内には生育していない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

点在しているが、個体数はもともと少なかった。最近は見ることがさらに減少している。

【保全上の留意点】

本種のような出現頻度の低い植物は、なかなか効果的な保全策を立てることができない。あえて言うならば、山地の林を全体的に保全する必要がある。

【関連文献】

保木本 I p.287, 平新版 3 p.296-297.

(執筆者 芹沢俊介)

ホソバノヤマハハコ

Anaphalis margaritacea (L.) Benth. et Hook.f. var. *angustifolia* (Franch. et Sav.) Hayata

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。草性植物で、近年減少傾向が著しい。

【形態】

夏緑性の多年生草本。根茎は長く匍匐し、先端から1~2本の地上茎を出す。地上茎は高さ35~80cm、先端部でのみ分枝することが多いが、中部から多くの枝を出すこともある。葉は互生し、線状披針形、長さ7~15cm、幅3~8mm、辺縁は多少なりとも裏側に巻き、表面は無毛または薄く毛があり、裏面は灰白色の綿毛を密生する。花期は7~9月、頭花は茎や枝の先端部に集まってつき、直径5~6mm、総苞片は4~5列で基部を除き白色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山（芹沢 67304, 1993-9-2）、2 豊根（加藤等次 3798, 1993-9-19）、3 東栄（芹沢 87369, 2011-9-23）、4 津具（芹沢 70588, 1994-8-31）、6 設楽西部（芹沢 83188, 2008-9-6）、7 設楽東部（芹沢 63098, 1992-9-4）、11 作手（芹沢 67997, 1993-9-24）。西：5 稲武（芹沢 67236, 1993-9-1）、19 旭（芹沢 84954, 2009-9-19）、20 足助（塚本威彦 2027, 1996-7-25）、22 小原（鳥居ちよ子 457, 1993-8-15）、24 豊田東部（畑佐武司 2666, 2011-11-11）。尾：48 春日井（太田さち子 856, 1993-9-26）。25 豊田北西部（猿投山, 岡本英一 821, 1958-6-23）で採集された標本もある。56b 大治（新大正橋上, 芹沢 70010, 1994-7-1）でも採集されているが、これは明らかに移入である。

【国内の分布】

本州（中部地方以西）、四国、九州。

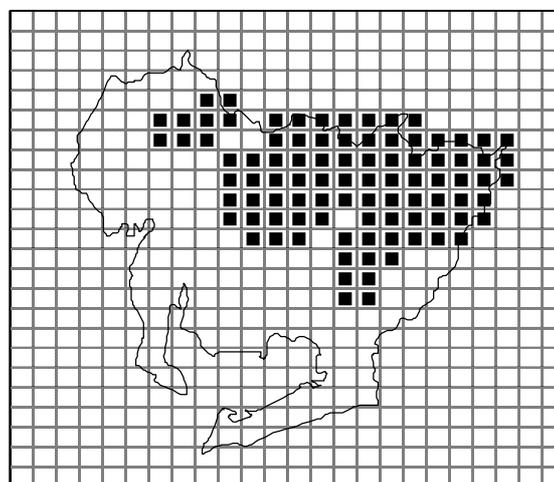
【世界の分布】

日本および中国大陸。種としてはアジア大陸東部~北アメリカに分布する。

【生育地の環境／生態的特性】

山地の草地や林縁に生育する。

要配慮地区図



	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

1990年代前半にはあちこちで見かけた植物だが、2000年以降に採集された標本は少なく、最近になって探してみても（十分探索したわけではないが）全く見当たらない。個体数階級と集団数階級は見込み値である。生育環境自体は残されているので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

まずは確実に残存している場所を探索する必要がある。残存している場所を見つけたら食害対策を講じる必要があるが、ニホンジカの個体数調整以外、有効な手はないかもしれない。

【特記事項】

狭義ヤマハハコは愛知県では4津具（小林 38432, 1992-7-26）で採集されているが、移入の疑いもあり、再確認が必要である。

【関連文献】

保草本 I p.75, 平新版 5 p.343.

（執筆者 芹沢俊介）

オオモミジガサ *Miricacalia makinoana* (Yatabe) Kitam.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 13。山地性のキク科植物で、最近見る機会が減少している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。根茎は塊状である。茎は直立して分枝せず、高さ 50～80cm、茎葉は 3 枚、最下のは長さ 12～20cm の柄があり、葉身はしばしば多少盾状につき、円形、直径 25～35cm、掌状に 9～11 裂し、裂片は更に大きな鋸歯状に切れ込み、先端は鋭尖頭となる。次の葉も比較的大きいが、最上のは小さい。花期は 7～8 月、頭花は茎の上部に総状に 5～11 個つき、総苞は長さ 1.5cm 程度、総苞片は 1 列、小花は 20 個程度で花冠は黄色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（芹沢 77887, 2002-8-25）、4 津具（小林 45712, 1993-7-31）。西：20 足助（塚本威彦 2009, 1996-7-21）。

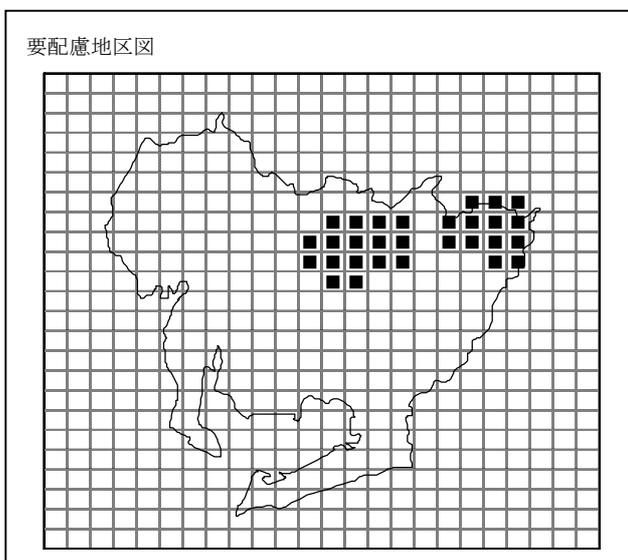
【国内の分布】

本州（東北地方南部以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の沢沿いの落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○		
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前は三河山地の数カ所に生育していたが、最近になって探してみると（十分探索したわけではないが）見当たらない。個体数階級と集団数階級は見込み値である。生育環境自体は残されているので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

まずは確実に残存している場所を探索する必要がある。残存している場所を見つけたら食害対策を講じる必要があるが、本種の場合もニホンジカの個体数調整以外、有効な手はないかもしれない。

【関連文献】

保草本 I p.50, 平新版 5 p.300.

(執筆者 芹沢俊介)

ヤマタイミンガサ *Parasenecio yatabei* (Matsum. et Koidz.) H.Koyama

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。山地性のキク科植物で、最近見る機会が減少している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。長い匍匐茎を出す。茎は直立し、高さ 60~80cm、茎葉は 2~3 枚で、最下のは長さ 10~15cm の柄があり、葉身は円形、幅 20~30cm、掌状に 7~9 裂、裂片は更に 2~3 裂し、辺縁に鋭鋸歯があり、先端は鋭尖頭となる。花期は 7~9 月、頭花は円錐状に多数ついて斜上し、総苞は長さ 8~10mm、総苞片は 1 列、小花は 2~6 個、冠毛は汚白色で、総苞の外に伸びる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根 (芹沢 102428, 2023-9-2)、4 津具 (小林 38441, 1992-7-26)、6 設楽西部 (芹沢 83174, 2008-9-6)。

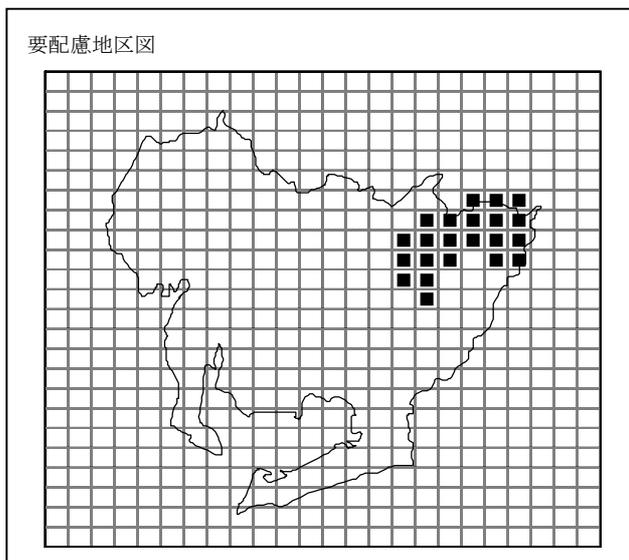
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前は三河山地の数カ所に生育していたが、最近豊根で岩陰にある小群落に出会って、改めて最近ほとんど見ていないことに気付いた植物である。過去に確認されている場所を十分探索したわけではないので、個体数階級と集団数階級はとりあえずそれぞれ 3 としておいた。生育環境自体は残されているので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

ニホンジカの個体数調整が必要と思われる。

【特記事項】

頭花の小花が 5~6 個のものはタイミンガサ (狭義)、2~4 個のものはニシノヤマタイミンガサ var. *occidentalis* (F.Maek. ex Kitam.) H.Koyama として変種の階級で区別されることが多いが、愛知県ではこの 2 つが明確に区別できるかどうかを含めて集団レベルでの解析を行っていないので、ここでは便宜的に両者を一括して掲載した。

【関連文献】

保草本 I p.49, 平新版 5 p.303.

(執筆者 芹沢俊介)

ウラギク *Tripolium pannonicum* (Jacq.) Schur

【除外理由】

個体数階級 2、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有度階級 2、総点 12。塩湿地性の植物で、愛知県では以前は生育地も個体数も多く、今まで国リストと評価してきたが、近年減少傾向が著しい。

【形態】

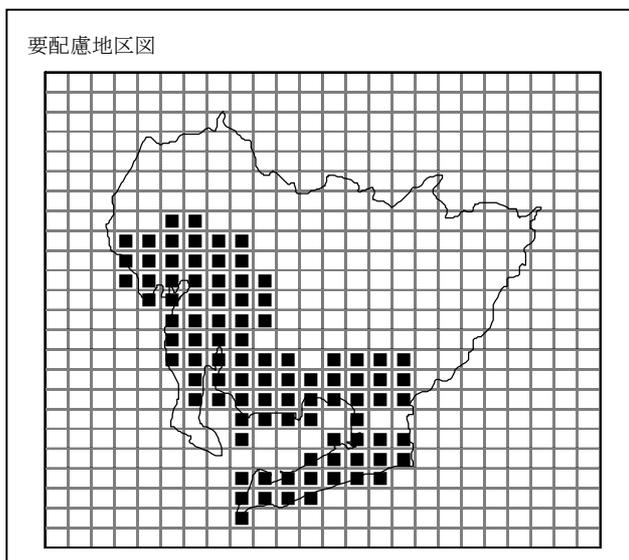
越年生草本。茎は直立して上方で分枝し、高さ 40~80cm になる。葉は互生し、無柄、葉身は披針形、長さ 6.5~15cm、幅 0.6~1.5cm、先端は鋭頭、基部はやや茎を抱き、無毛で肉質である。花期は 8~11 月、茎の上部に、多数の頭花を散房状につける。頭花は直径 2.5~3cm、総苞は筒状で長さ約 7mm、総苞片は 3 列にならび、外片は披針形で長さ 2.5~3mm、鈍頭、辺縁に短い毛があり、内片は円頭で紫色をおびる。舌状花の花冠は淡青紫色で、舌部は長さ 7~10mm である。そう果は狭長楕円形、長さ 2.5~3mm、扁平で有毛、冠毛は花時には長さ 5mm 程度であるが、果時には 14~16mm に伸びる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東: 13 豊川 (小林 65483, 1998-11-15)、14 蒲郡 (小林 58662, 1995-11-3)、16 豊橋南部 (芹沢 90801, 2015-10-12)、17 田原東部 (芹沢 78356, 2002-10-24)、18 田原西部 (芹沢 78359, 2002-10-24)。西: 32a 刈谷 (芹沢 71360, 1994-10-25)、34a 高浜 (芹沢 71363, 1994-10-25)、34b 碧南 (中村さとこ 1108, 1993-10-19)、35 西尾北部 (中根幸司 1900, 2007-10-20)、36 西尾南部 (中根幸司 1927, 2007-10-20)。尾: 40b 東浦 (中村裕治 1286, 1994-10-14)、41a 東海 (清水政美 s.n., 1999-11-9)、42b 半田 (浅野守彦 2116, 2007-11-10)、52 名古屋南西部 (芹沢 83580, 2008-10-12)、58b 弥富 (畑佐武司 1528, 2000-10-10) など確認されているが、近況は十分調査されていない。51 名古屋南東部 (加福町, 高木順夫 5628, 1997-11-1) にもあったが絶滅した。

要配慮地区図



【国内の分布】

北海道東部、本州 (関東地方以西の太平洋側)、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

アジア、ヨーロッパ、アフリカ北部に広く分布する。

【生育地の環境／生態的特性】

内湾の塩湿地や河口部の河川敷などに生育するほか、埋立地の水路などに生育していることもある。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				○
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

ある場所では群生していることが多く、花時には美しい。三河湾側では以前はかなり多かったが、攪乱が少なくなってヨシが著しく繁茂し、あまり見かけなくなった。2024 年秋に矢作川河口部を見たときには、くまなく調査したわけではないけれども、全く見当たらなかった。伊勢湾側ではもともとあまり多くなかった。名古屋南東部では、生育地が廃棄物最終処分場となり絶滅した。名古屋南西部では庄内川河口部に生育しているが、2019 年秋に左岸側を調査した人の話では、数個体しか確認できなかったという。

【保全上の留意点】

本種の生育地である内湾部や河口部は開発圧力が極めて高く、その一方で開発されなければヨシが繁茂して自然環境が単純化する。注意して自然環境を保全する必要がある。塩湿地性植物は全体的に目立たないものが多いが、その中で本種はハマボウと共に花が美しく、象徴としての意味も大きい。

【特記事項】

ハマシオンとも呼ばれる。

【関連文献】

保草本 I p.80, 平新版 5 p.326, SOS 新版 p.154,156.

(執筆者 芹沢俊介)

シラネワラビ *Dryopteris expansa* (C.Presl) Fraser-Jenk. et Jermy

【評価理由】

個体数階級 2、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有度階級 1、総点 11。温帯性のシダ植物で、近年減少傾向が著しい。

【形態】

夏緑性のシダ植物。根茎は斜上する。葉は束生し、葉柄は長さ 15～45cm、基部に褐色で中央部が暗色の鱗片を密生するが、上部では鱗片は小さく、ややまばらになる。葉身はやや五角形状の広卵形、長さ 25～45cm、幅 20～35cm、3 回羽状深～全裂、羽片は 5～7 対で、最下羽片の下側は上側に比べ幅広くなり、小羽片の裂片は更に浅～深裂する。胞子のう群は裂片の中肋と辺縁の間につき、包膜は円腎形、直径 1mm 程度である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山（芹沢 82908, 2008-6-7）、2 豊根（芹沢 102196, 2023-7-17）、6 設楽西部（小林 52665, 1994-7-16）、11 作手（小林 53485, 1994-9-4）。西：5 稲武（芹沢 84357, 2009-7-4）。

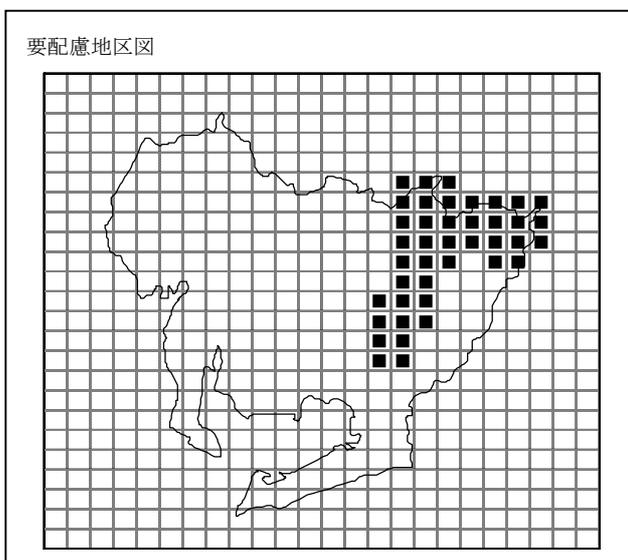
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の林内に生育する。自然林だけでなく、二次林や造林地にも生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

県内の分布域は三河山地のやや標高の高い場所に限られるが、そこでは以前はそれほど少ないものではなかった。しかし最近になって、見る機会がかなり減少している。生育環境自体は変化していないので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

ニホンジカの個体数調整が必要と思われる。

【関連文献】

平シダ p.192-193, 学シダ II p.369.

(執筆者 芹沢俊介)

ヤノネシダ *Lepidomicrosorium buergerianum* (Miq.) Ching et K.H.Shing

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 11。暖帯域の沢沿いの岩上や樹幹に着生するシダ植物で、最近見る機会が減少している。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は長く這い、密に鱗片をつける。葉は1~4cm 間隔で出て、やや2形性、胞子のう群をつけない、またはあまりつけない葉は葉柄が長さ1cm 程度のものから10cm 近くになるものまで変異が著しく、短いものは全体に広い翼があるが長いものは上部にのみ狭い翼があり、葉身は三角状卵形~三角状長卵形、長さ3.5~10cm、幅2~5cm、先端は鋭頭、基部は広い楔形~心形で、しばしば両側に不明瞭な突起がある。胞子のう群をよくつける葉は葉身がより長く、また細い。胞子のう群は葉裏全面に散在し、円形、直径1~1.5mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部（村松 26325, 2012-3-28）、10 鳳来北西部（小林 49790, 1993-12-12）、12 新城（芹沢 64239, 1992-10-16）、14 蒲郡（井上美保子 960, 1994-2-20）。西：28 額田（小林 55088, 1994-11-13）、29 岡崎北部（芹沢 47480, 1987-10-18）、30 岡崎南部（小林 56081, 1995-4-1）。

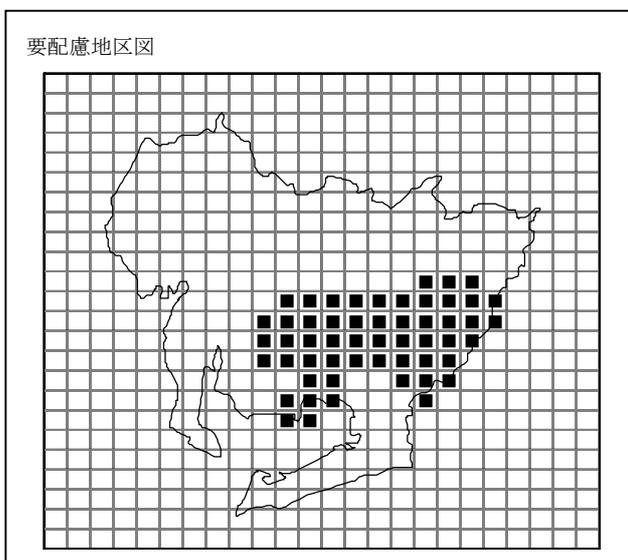
【国内の分布】

本州（関東地方以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

暖帯域の沢沿いの岩上や樹幹に着生し、根茎は基物上を長く這って、かなり高い場所まで登ることがある。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前は時折見かけた種類であるが、最近見る機会が減少している。減少の原因はよくわからない。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することが必要である。

【関連文献】

平シダ p.268-269, 学シダ II p.465.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒナノウスツボ *Scrophularia duplicatoserrata* (Miq.) Makino

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 11。三河山地区では以前は時折見かけた種類だが、近年見る機会が減少している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。地下茎は短く横に這うか斜上する。茎は1~2本出て、高さ30~100cm、4稜がある。葉は対生し、下部のものは長さ3~5cmの柄があり、葉身は卵状長楕円形、長さ6~12cm、幅2.5~5.5cm、先端は鋭頭、辺縁には重鋸歯がある。上部の葉は柄が短く、葉身も小さくなる。花期は7~9月、花は茎の上部の長さ7~15cmの円錐花序にややまばらにつくが、茎の中下部の葉腋から花序を出すこともある。花柄は細くて長く、花冠はつぼ形、長さ6~9mm、暗赤紫色、先は唇形になり、上唇は2裂、下唇は3裂する。果実は球形、長さ6~7mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山(芹沢 67326, 1993-9-2)、2 豊根(小林 38685, 1992-8-10)、3 東栄(小林 53359, 1994-8-27)、8 鳳来北東部(小林 53392, 1994-8-27)、12 新城(小林 39590, 1992-9-20)、13 豊川(小林 39547, 1992-9-20)。西：5 稲武(小林 38049, 1992-6-28)、19 旭(小林 38578, 1992-8-5)、25 豊田北西部(畑佐武司 4976, 2002-9-3)。

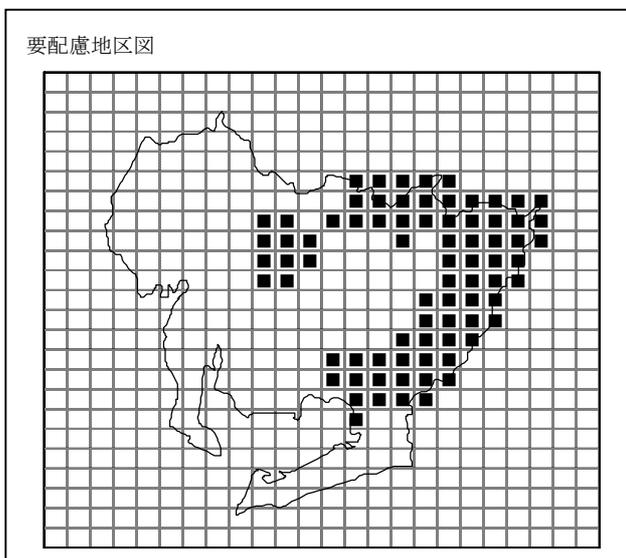
【国内の分布】

本州(東北地方南部以西)、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の沢沿いの林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

1990年代前半には時折見かけたが、個体数はもともとそれほど多くなかった。最近になって「稀少ではないか」と指摘されて、「そう言われれば最近見ていない」と気付いた種類である。ただし豊田北西部には現存するらしい。ニホンジカによる林床植物の食害が減少の要因かもしれないが、食害が激化する前から減少していた可能性もある。以前生育していた場所の近況を個別に確認しているわけではないので、今回は個体数階級 3、集団数階級 2として評価したが、実際にはもっと危機的かもしれない。

【保全上の留意点】

現存する集団については、個別的な保全が必要と思われる。

【関連文献】

保草本 I p.154, 平新版 5 p.94.

(執筆者 芹沢俊介)

クチナシグサ *Monochasma sheareri* (S.Moore) Maxim.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 11。愛知県では以前はあちこちで見かけた種類だが、近年見る機会が著しく減少している。

【形態】

半寄生の越年生草本。茎は基部で分枝し、放射状に広がって立ち上がり、長さ 15~45cm になる。葉は対生し、茎の基部のものは小さいが次第に大きくなり、線形で長さ 2~3cm、幅 1~4mm になる。花期は 4~5 月、花は茎上部の葉腋に 1 個ずつつき、長さ 0.3~1cm の柄があり、がくは基部に 2 枚の苞葉があり、花時には長さ 1~1.5cm だが花後さらに伸長する。花冠は筒状で先は唇形になり、淡紅紫色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

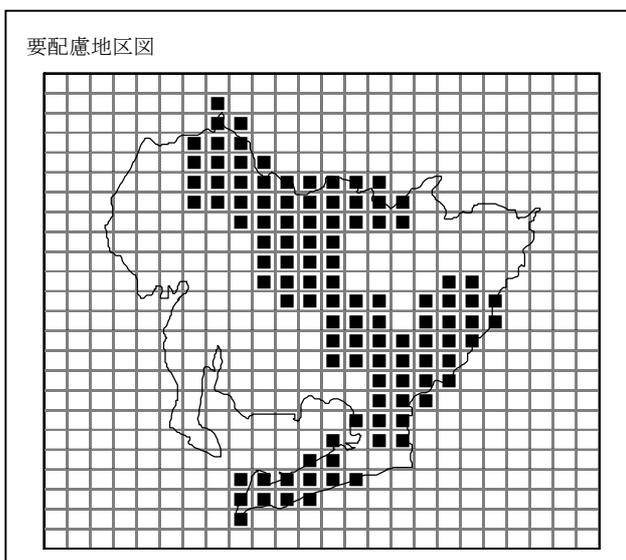
東：8 鳳来北東部 (小林 56409, 1995-4-29)、12 新城 (小林 63586, 1998-4-22)、17 田原東部 (小林 71616, 2001-5-3)、18 田原西部 (小林 42599, 1993-5-9)。西：19 旭 (小林 59370, 1996-5-12)、22 小原 (日比野修 2079, 1994-5-5)、23 藤岡 (塚本威彦 488, 1993-4-20)、24 豊田北東部 (畑佐武司 1740, 2001-5-2)、25 豊田北西部 (磯貝彰宏 1150, 1984-5-17)、28 額田 (福岡義洋 309, 1990-4-17)。尾：37a 瀬戸 (芹沢 75469, 1999-5-5)、45 犬山 (芹沢 51241, 1989-4-26)、47 小牧 (日比野修 4747, 1999-5-11)、48 春日井 (山田果与乃 1665, 2011-4-30)。15 豊橋北部にもあると聞いたが、未確認である。

【国内の分布】

本州 (関東地方以西)、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸中部。



【生育地の環境／生態的特性】

低山地~丘陵地の、林縁の草地や明るい落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○	○		
草・岩	○	○		
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前はあちこちで見かけた種類であるが、近年見る機会が著しく減少している。個体数階級と集団数階級は見込み値である。里山の森林化や林縁における大型草本の繁茂が原因で減少していると思われるが、はっきりしない。

【保全上の留意点】

現在生育している場所については草刈りなどの草地保全策を検討する必要があるが、現実問題としては困難かもしれない。

【関連文献】

保草本 I p.129, 平新版 5 p.155.

(執筆者 芹沢俊介)

ムサシアブミ *Arisaema ringens* (Thunb.) Schott

【評価理由】

愛知県では最近確認された種類で、そのまま評価すれば個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 15 で絶滅危惧 I B 類になるが、移入の可能性も皆無ではなく、更に情報の蓄積が必要である。

【形態】

多年生草本。地下茎は扁球形、上部から多くの根を出す。葉身のある葉は 2 個、第 1 葉の葉柄は長さ 25~40cm で、下方の 10~15cm は偽茎となる。葉身は無柄の 3 小葉からなり、頂小葉は菱状楕円形、花時には長さ 10-20cm、幅 5~9cm だが花後より大きくなり、先端は細く長く伸び、辺縁は全縁、表面は深緑色で光沢があり、裏面は白色を帯びる。第 2 葉は第 1 葉と同大、またはやや小さい。花期は 3-4 月、仏炎苞は葉と同時に開き、葉より低い位置につき、筒部は長さ 4~6cm、口辺は広く開出、舷部は中央部が前方に著しく膨らみ、内面は暗紫色、外面は白条が目立つ。花序は肉穂状、偽雌雄異株、花序付属体は長さ 4~6cm、棒状で前屈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：37a 瀬戸 (芹沢 104372, 2024-9-18)。
52 名古屋南東部 (長谷川 25, 2017-4-11, NBC) で採集された標本もあるが、これは更に移入の可能性が高い。

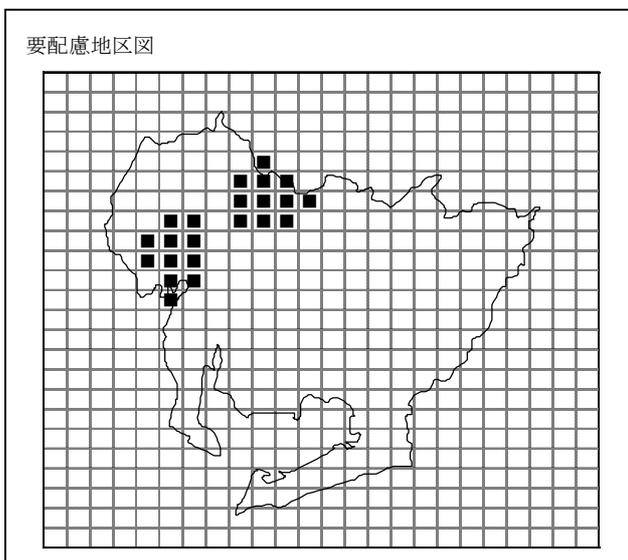
【国内の分布】

本州西部、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島南部、台湾、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

やや湿った林床。四国以南では海岸林の林内に多く見られる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

瀬戸市では、ざっと見た範囲では二次林内に 3 株生育していた。名古屋市では人家近くの林内に 10~20 株生育しているという。

【保全上の留意点】

自生ならば、生育地の林を保全する必要がある。

【特記事項】

本種は、形態が特異でしばしば栽培されること、逸出しやすい植物で名古屋市の生育地の近くには東山植物園もあるので、今まで評価対象外と判断してきた。しかし 2024 年になって瀬戸市でも発見され、もともと人里近くの藪山にも生育している種であることから、名古屋市のものも含めて自生の可能性が出てきた。しかしさらに確認が必要なので、今回は情報不足と判定する。邑田ほか (2018) は、本種の分布域を愛知県、福井県以西としている。

【用文献】

邑田 仁・大野順一・小林禎樹・東馬哲雄, 2018. 日本産テンナンショウ属図鑑. 361pp. 北隆館, 東京.

【関連文献】

保草本Ⅲp.200, 平新版 1 p.97.

(執筆者 芹沢俊介)

オオハンゲ *Pinellia tripartita* (Blume) Schott

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 12。現状をそのまま評価すれば絶滅危惧Ⅱ類になるが、逸出の可能性もあり、更に情報の蓄積が必要である。

【形態】

多年生草本。球茎は直径 2~3.5cm になる。葉は 1~3 枚、葉柄は長さ 18~40cm で、むかごはつけない。葉身は 3 深裂し、中央裂片は楕円形、長さ 10~20cm、幅 6~10cm、全縁、先端は鋭尖頭になる。花期は長く 5~9 月、花序柄は長さ 20~35cm、仏焰苞は葉とほぼ同高で、愛知県のは緑色だが淡紫色のこともあり、筒部は長さ 3.5~5cm、舷部は長楕円形で長さ 3~4cm、花序付属体は苞の外に伸びて立ち、長さ 15~20cm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：9 鳳来南部 (中西普佐子 4548, 2018-6-19)、12 新城 (芹沢 95264, 2019-6-1)。
西：35 西尾北部 (芹沢 103722, 2024-5-11)。
尾：37a 瀬戸 (塚本威彦 196, 1992-7-6)、50 名古屋北東部 (高木順夫 21449, 2012-10-13)、51 名古屋南東部 (芹沢 95193, 2019-5-18) で確認されている。

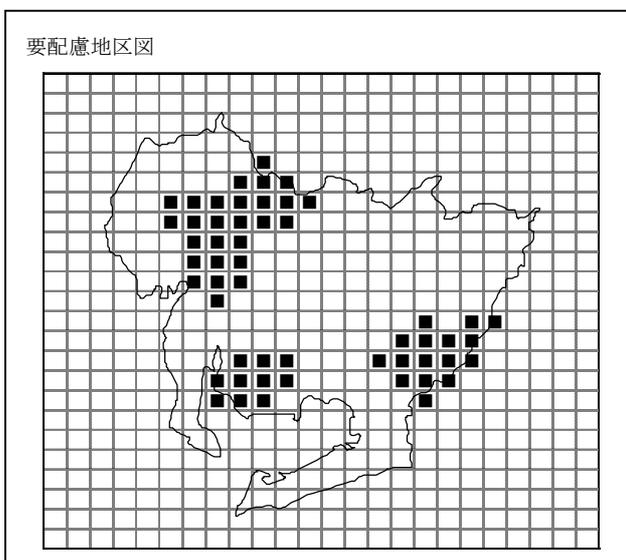
【国内の分布】

本州 (中部以西)、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の林内に生育する。ただし愛知県の生育地は、丘陵地二次林の林内や林縁、低山地の沢沿いの造林地内 (新城) である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

瀬戸では最近確認されておらず、名古屋北東部は状況不明である。他の場所では比較的最近確認されているが、どこも個体数は少なかった。

【保全上の留意点】

自生ならば、生育地の林を保全する必要がある。

【特記事項】

本種は愛知県内では最初瀬戸市定光寺境内で発見されたもので、その後名古屋市や新城市でも確認されたが、隣接する三重県ではそれなりに自然度の高い場所に生育しているのに対し愛知県では生育地が都市公園であったり、山地でも林道わきで伐採枝を捨てられそうな場所であったりするため、今まで移入と判断してきた。しかし 2024 年になって西尾市でも確認され、ここも道路わきではあったが、自生の可能性もあるという判断に傾きつつある。しかしさらに確認が必要なので、今回は情報不足と判定する。

【関連文献】

保草本Ⅲp.196, 平新版 1 p.109.

(執筆者 芹沢俊介)

コツブヌマハリイ *Eleocharis parvinox* Ohwi

【評価理由】

藤井 (2022) によって愛知県での生育が初めて記録された種類であるが、生育状況も標本も確認できていないので、今回は情報不足として掲載しておく。藤井の報告をもとに判断すれば、個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 16、絶滅危惧 I A 類になると思われる。

【形態】

多年生草本。根茎は長く匍匐する。茎は根茎の先端からややまとまって出て、高さ 30~60cm、軟質で平滑、基部の鞘は赤褐色である。花期は 6~10 月、小穂は茎の先端に 1 個つき、披針形、長さ 1~1.5cm である。そう果は倒卵形で長さ 1~1.2mm、黄褐色、柱頭は 2 岐、刺針状花被片は 4 個で長さはそう果の 2~3 倍あり、下向きにざらつく。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：49d 清須。標本 (藤井伸二 17793, 2018-5-26) は KYO,TNS にあるというがまだ確認していない。

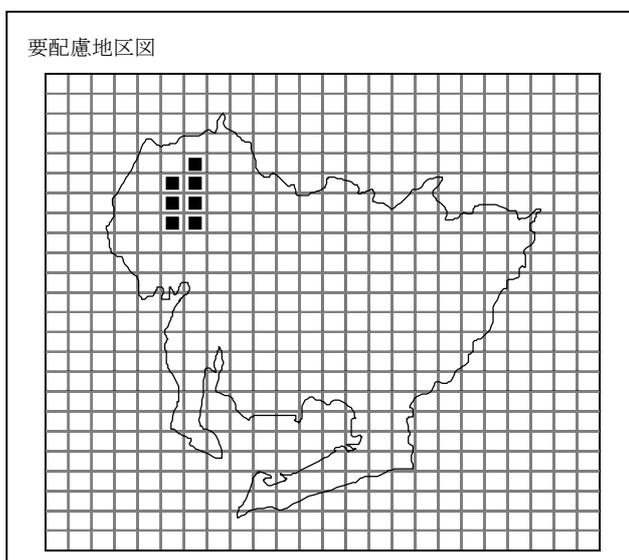
【国内の分布】

本州 (関東~近畿)、四国 (高知県)、九州 (熊本県)。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

藤井 (2022) によれば、五条川左岸河川敷の、比較的最近 (おそらく数年以内) に形成されたものと考えられる直径 3m ほどの浅いわんどの縁に生育していたという。他の場所でも、攪乱によって生じた湿地環境に生育することが多いらしい。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

藤井 (2022) には、「おおよそ 50cm 四方の範囲に東生しており、約 50 の花序シュートを形成していた。……群落の発見時には旺盛に開花・結実していたが、その後 2020 年 6 月 9 日の調査時にはヨシ群落の勢力拡大によって開水域がほぼ消失してコツブヌマハリイは消滅寸前であった。」と記述されている。

【保全上の留意点】

攪乱環境に依存する種で自然状態でも長期には存続しないようなので、個別的な保全は困難かもしれない。河川敷等の低湿地環境を全体として保全することが重要と思われる。

【引用文献】

藤井伸二, 2022. 愛知県と岐阜県からコツブヌマハリイ (カヤツリグサ科) を記録する. 植物地理・分類研究 170: 171-173.

【関連文献】

保草本Ⅲp.227, 平新版 1 p.344.

星野卓二・正木智美, 2011. 日本カヤツリグサ科植物図譜 p.636. 平凡社, 東京.

(執筆者 芹沢俊介)

キリシマギンリョウソウ *Monotropastrum kirishimense* Suetsugu

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 14。現在のところ県内産の確実な標本は1点しかなく、現状をそのまま評価すれば絶滅危惧II類になる。しかし最近記載された種類 (Suetsugu et al. 2023) で情報の蓄積が不十分であり、他の場所にあるという話も聞くので、さしあたり情報不足と判断する。

【形態】

初夏に開花する多年生の菌従属栄養植物。ギンリョウソウの子房が赤紫色になる品種 (ベニバナギンリョウソウ) に似ているが、地上部は全体に小さくて丸味を帯び、がく片も色づく (ベニバナギンリョウソウではがく片は無色)。地下部はギンリョウソウでは明瞭な根が確認できるが、本種は根が不明で、菌糸のようなものが見えるだけである。開花期は愛知県ではギンリョウソウより 1 か月程度遅い。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：7 設楽東部 (中西普佐子 5607, 2024-6-23)。この産地は天野保幸氏が発見されたものである。

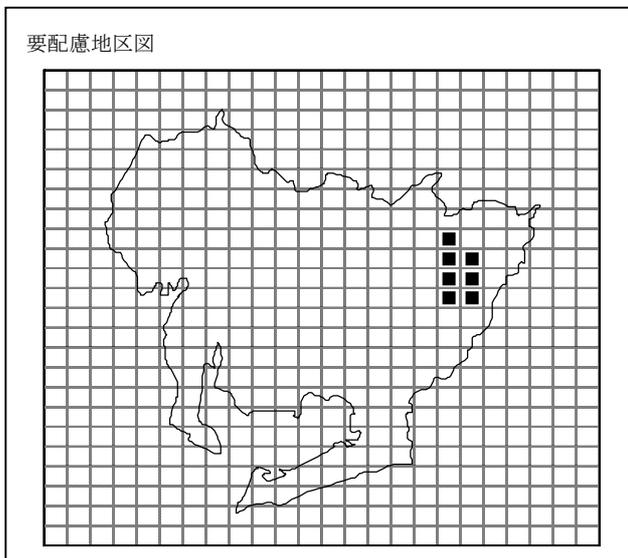
【国内の分布】

本州 (静岡県、岐阜県、愛知県、大阪府)、九州 (宮崎県、鹿児島県)。

【世界の分布】

現在のところ日本固有である。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

腐植土のたまった林床に生育する。設楽町の生育地はよく育った沢沿いの造林地である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

小群落が点在しており、個体数は数えにくい、10 より多く 100 より少ないという。

【保全上の留意点】

何はともあれ、情報の蓄積が必要である。設楽東部以外でも何カ所かに生育しているようなので、早急に現況を確認したい。

【特記事項】

本種 の原稿は瀧崎が執筆し、芹沢が加筆修正した。

【引用文献】

Suetsugu, K., S.K.Hirota, T.-C.Hsu, S.Kurogi, A.Inuma and Y.suyama, 2023. *Monotropastrum kirishimense* (Ericaceae), a new mycoheterotrophic plant from Japan based on multifaceted evidence. J. Plant Res. 136: 3-18.

【関連文献】

現在のところ関連する一般的な文献はない。

(執筆者 瀧崎吉伸・芹沢俊介)

イヌカタヒバ *Selaginella moellendorffii* Hieron.

【除外理由】

愛知県では人里周辺でしばしば見かける植物だが、すべて栽培品からの逸出で、評価の対象にならない。

【形態】

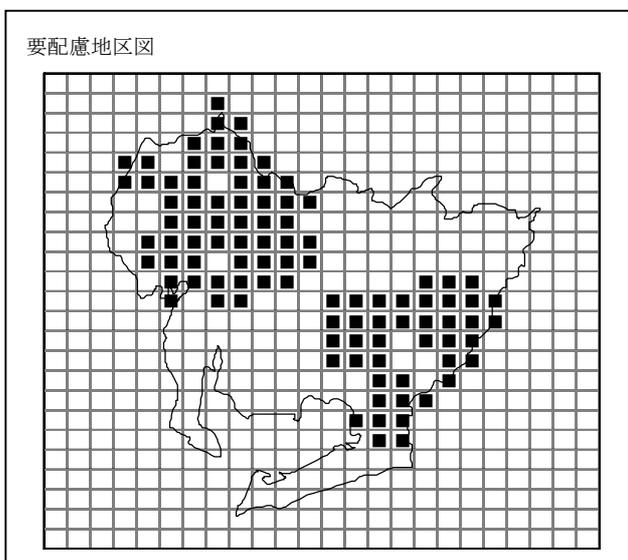
常緑性の多年生草本。匍匐茎は基物の上を這う。地上茎は長さ 10~20cm の柄状の部分があり、葉身状の部分は卵形~三角状広卵形、長さ 15~22cm、幅 8~20cm、3~4 回羽状に分岐し、先端は鋭尖頭になる。羽片状の側枝は 4~7 対である。枝上の葉は 2 形性、各 2 列につき、背葉は卵形、長さ 0.7~1.3mm、先端は芒状、辺縁は白色の膜状になり、辺毛がある。腹葉は卵形~長卵形、長さ 1.2~3mm、先端は前方に曲がって鋭尖頭、辺縁は狭い白膜部になる。胞子のう穂は小枝の先端につき、四角柱状、長さ 0.5~1cm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部（芹沢 87807, 2012-9-1）、9 鳳来南部（芹沢 98832, 2021-8-25）、10 鳳来北西部（芹沢 98911, 2021-9-4）、15 豊橋北部（芹沢 82629, 2007-10-7）。西：25 豊田北西部（山崎玲子 1345, 1996-4-2）、27 みよし（芹沢 89737, 2014-10-5）、28 額田（芹沢 104478, 2024-10-5）。尾：37b 尾張旭（芹沢 88184, 2012-10-27）、38b 日進（村松 25540, 2010-11-20）、39b 豊明（浅野守彦 1452, 2000-8-11）、45 犬山（芹沢 85344, 2009-11-7）、49c 名古屋（鈴木幸子 687, 1994-10-26）、50 名古屋北東部（太田由美子 167, 1993-8-22）、52 名古屋西部（高木順夫 23899, 2018-10-13）、54 一宮西部（渡辺幸子 4877, 2001-9-18）で採集された標本がある。これ以外にも生育している区画があると思われる。

要配慮地区図



【国内の分布】

自生のものは、琉球（八重山諸島）に分布しているだけである。

【世界の分布】

日本南端・フィリピンからインドシナにかけて分布している。

【生育地の環境／生態的特性】

自生地では沢沿いの湿った岩上に生育しているが、逸出したものは地上性またはそれに近いことが多い

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩			○	
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

愛知県では人家の周辺に生育している。やや山中に生育している場合でも、近くには建物等がある。

【保全上の留意点】

愛知県のはすべて栽培品の逸出であり、保全の対象にならない。

【特記事項】

カタヒバに似ているが、地上茎の葉身状部分はあまり伸びず、側枝は著しく重なり合い、葉縁が白色になる。2020 年版には掲載されていないが、収録もれであった。

【関連文献】

平シダ p.52, 学シダ I p.278.

(執筆者 芹沢俊介)

ハガクレカナワラビ *Arachniodes yasui-inouei* Sa.Kurata

【除外理由】

愛知県では名古屋市中で 1 回採集されただけの植物だが、採集された場所から判断しておそらく樹木苗等について移入されたものと思われ、評価の対象にならない。

【形態】

常緑性の多年生草本。根茎は短く匍匐する。葉は少数が接近して出て、葉柄は長さ 40~70cm、密に披針形で黒褐色の鱗片をつける。葉身は卵形~長楕円状卵形、長さ 30~50cm、幅 15~25cm、2 回羽状全裂、先端は急に狭くなる。側羽片は 4~6 対、最下羽片は長さ 14~20cm で 7~12mm の柄があり、小羽片は 12~15 対、短い柄があり、基部前側は耳状、下側第一小羽片は更に羽状に切れ込み、次のものより大きい、著しく長いというほどではない。胞子のう群はやや中肋寄りにつき、包膜は円腎形である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：52 名古屋南西部（熱田区、高木順夫 7705, 1999-9-23）で採集されたことがある。標本は葉身長約 40cm である。

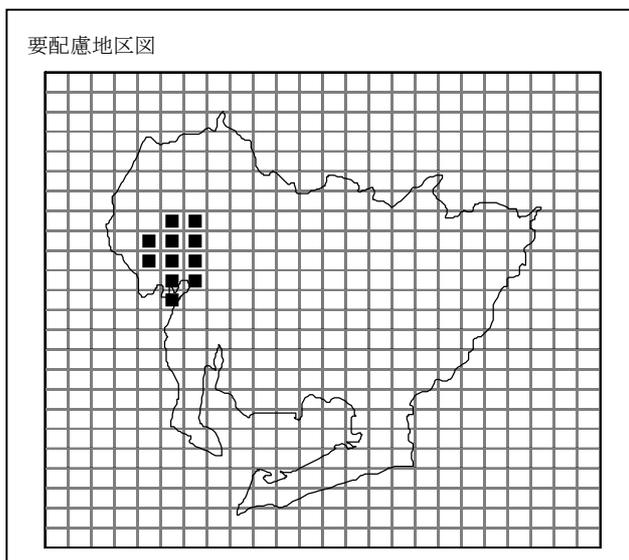
【国内の分布】

本州（紀伊半島、山口県）、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

自生地では沢からやや離れた照葉樹林内に生育していることが多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

愛知県では 1 回採集されただけで、生育状況も不明である。現在まだ生育しているかどうかははっきりしない。

【保全上の留意点】

本来の自生ではないと思われるので特に配慮する必要はないが、愛知県での記録は少ないので、見かけたら標本を作成しておいてほしい。

【特記事項】

オニカナワラビ *A. chinensis* (Rosenst.) Ching に似ているが、葉質がやや薄く、葉縁の鋸歯は先端が著しく芒状になる。2020 年版には掲載されていないが、収録もれであった。

【関連文献】

平シダ p.181, 学シダⅡp.394, 環境省 p.382.

(執筆者 芹沢俊介)

(2) 鳥 類

2025年版レッドリストに掲載された鳥類のうち、新たにリストに掲載された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種および愛知県ではリスト外または評価対象外となったが環境省のレッドリストに掲載されている種についても、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（鳥類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を評価対象個体群毎に各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。

【形 態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献のうち、代表的なものを、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* Swinhoe**【評価理由】**

本州中部以北で繁殖する夏鳥で、愛知県では主に渡りの季節に通過する個体が見られるだけで、繁殖の確認例は無かった。沿岸部の埋立てや干拓地の開発が盛んになった 1970 年代後半からここに繁茂するヨシ原で繁殖が確認されるようになったが、湿地のヨシ原面積が減少した 2010 年代の半ば以降は繁殖が確認されなくなり、通過個体も激減したため繁殖個体群は絶滅、通過個体群は絶滅危惧 I A 類と評価された。

【形態】

全長約 13.5cm と小型で雌雄同色。上面が褐色で下面は白く脇は淡褐色。顔には白色の眉斑がある。囀りはオオヨシキリより金属的な高音で動きも軽快である。細いヨシの茎の先で上を向いて囀り、長時間囀ることも特徴である。春は 3~5 月、秋は 8~10 月に渡るが、河川敷や水路などの草地を通過することが多いので姿での確認は難しい。春秋共囀りや地鳴きをするので、声で確認されることが多い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

県内を通過する個体は主に平野部のヨシ原や水田、草地や灌木林などで見られるが、体が小さく動きが早いので地鳴きや囀りが聞かれなければ確認することは困難である。県内では沿岸部の埋立地および干拓地、尾張南部の湿地群、茶臼山高原などで繁殖期の記録があるが、近年は渡りの季節でも確認数が激減している。

【国内の分布】

夏鳥として本州中部以北から北海道までのヨシ原や高原の牧場、灌木林などに飛来して繁殖する。春秋の渡りの季節には国内各地で観察されているが、国内では熊本県で繁殖したという記録もある。

【世界の分布】

中国東北部から東南部、サハリンなどオホーツク沿岸部および日本で繁殖し、中国南端からベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、スマトラ北部で越冬する。世界ではアジア東部のみに分布する小鳥である。

【生息地の環境／生態的特性】

本州中部以北や北海道の平地または山地の草原や湿原で繁殖する。なわばりを持ちヨシやススキなどの草原で営巣する。ヨシ原に営巣するオオヨシキリよりは乾燥した環境を好む。草原の中でもより高い草の天辺で囀ることが多く、オオヨシキリより金属的で細く高音の美しい声で長時間囀ることも特徴である。ヨシやススキ、ヨモギなど数本の茎の間に枯れ草で椀型の巣をつくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

古い記録では県内の繁殖記録が無く春秋の渡りで通過する旅鳥とされていた。県内では伊勢・三河湾沿岸で、埋立てや干拓地内の開発が進められた 1970 年代の後半から繁殖期の生息が確認されるようになり、1979 年に汐川で初めて繁殖が確認された。1980 年代から 2000 年代半ばまでは埋立地や干拓地の塩田跡などで繁殖していたが、これらの環境の開発が進むと共に姿を消している。

【保全上の留意点】

かつて愛知県内には鍋田干拓周辺をはじめ汐川干潟、藤前干潟、境川河口干潟、一色干潟、一色塩田跡など国内有数のシギ・チドリや水鳥の生息地として国内でも希有な環境が存在しており弥富野鳥園などの保存施設が建設され、藤前干潟や汐川干潟のラムサール条約指定などの努力も実施されてきたが、種別の保全対策も求められる。

【特記事項】

本種は関東以北の湿地や高原に生息する小鳥である。中部地方では富士山麓の朝霧高原などで見られ愛知県では繁殖しない種であったが、県内では沿岸部の埋立てや干拓地の開発が進められた僅かな間だけ繁殖が確認されている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ヒバリシギ *Calidris subminuta* (Middendorff)

【評価理由】

毎年主に秋から冬にかけて少数が確認される小型のシギである。県内の沿岸部で埋立てが進められていた頃は、泥砂でできた浅い湿地や、作付けの無い水田で他の淡水系シギやチドリと共に見られたが、2010年代後半になると埋立地は乾燥化し、休耕田の転作により湿地環境が無くなり飛来数が激減したことから、愛知県では通過個体群は絶滅危惧 I A 類と評価された。

【形態】

全長 14cm の小型シギで、夏羽では背や胸が黄褐色で黒斑があり、冬羽では灰褐色で黒斑がある。脚や脚指が長く大きいのが特徴で、柔らかい泥の上を歩くのに適しており、英名を Long-toed Stint と呼ばれる。鳴き声は小声でプリリ、プリリなどと鳴く。

【分布の概要】

【県内の分布】

主に木曾川・長良川の河口周辺、矢作川・矢作古川の河口周辺、豊川・汐川の河口周辺などに飛来する。平野部では河川中流域の水田や河川敷などでも春秋の渡りの季節や越冬期の記録があり、内陸の平野部を流れる水路でも越冬期の確認記録がある。

【国内の分布】

北海道から沖縄までの各地に旅鳥として渡来し、沖縄では少数が越冬する。

【世界の分布】

シベリア南東部で繁殖し、インド東部から東南アジア、オーストラリアの沿岸部等で越冬する。アメリカ大陸に分布するアメリカヒバリシギは亜種とされていたが、形態がかなり異なることから、これを別種とする説もある。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟や汽水の湿地で見られることもあるが、本来は淡水の湿地を好むシギである。基本的に 1 羽か 2 羽で生息するが、埋立地や干拓地の水田から湿地環境が減少した 1980 年代後半から 2010 年にかけては一カ所で 10 羽を超える個体が観察されたこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

2010 年代後半以降は飛来数が激減しており飛来場所も限られている。その大半は 1 羽の記録である。減少の最大要因は淡水湿地の環境が激減していることである。

【保全上の留意点】

県内から淡水湿地が消失していることがヒバリシギを代表とする淡水湿地性のシギ・チドリや水鳥が減少している最大の要因であることから、淡水性のシギ・チドリが生息できる環境を再生することが重要である。

【特記事項】

シギの仲間は識別が困難で、1970 年代までは有効な図鑑さえも無い時代であった。愛知県には鍋田や汐川などの観察適地が残されており、中でもヒバリシギのような識別が困難な淡水系の小型シギの識別に大きく寄与してきた歴史がある。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

チゴモズ *Lanius tigrinus* Drapiez

【評価理由】

生息数の少ない種で、県内では渡り時に通過する旅鳥である。春は 5～6 月秋は 8～9 月に記録されるが確認例は極めて少なく、環境省では絶滅危惧 I A 類に指定されている。県内では渡りの季節に名古屋市などの都市公園で稀に観察されていたが、1980 年代以降は県内全体でも 10 年に一度 1 羽以下の確認と激減しているため、通過個体群は絶滅危惧 I A 類と評価された。

【形態】

大きさはモズより小さい 17～18cm。背から尾にかけては赤褐色で背には鱗模様がある。雌雄とも過眼線は太く黒いが、雌はやや淡い。頭上から後頸にかけて薄い青灰色であり、喉から胸や腹は白く脇には横斑がある。頭の薄い青灰色から他のモズの仲間との識別は容易である。鳴き声はモズより強く濁った声で「ギチギチギチ…」と鳴く。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内での繁殖は確認されていないが、渡りの季節には名古屋市の都市公園をはじめ県内各地の都市公園などでも確認記録がある。繁殖期以外は単独で生活することや、その数も少ないことから自然環境の河川敷や低山の藪の中を渡っていると考えられるが、観察される機会は稀である。

【国内の分布】

本州の中部以北で繁殖する生息数の少ない夏鳥である。渡りの季節には日本海側の島嶼で見られることが多く、かつては毎年のように春と秋に確認されていたが 1980 年以降は激減しており、繁殖個体数も激減している。

【世界の分布】

ウスリーから中国南部、朝鮮半島、日本の本州中部以北で繁殖し、中国南部やマレーシア、スマトラ島、カリマンタン島北部などで越冬する。世界では東アジアに少数が分布している。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から低山の広葉樹林、針広混交林や都市郊外の雑木林などにある木の枝に営巣して繁殖する。営巣地では番いあるいはヒナを含む家族群で生息するが、繁殖期以外は群れにならず番いか単独で見られることが多い。繁殖環境はモズより樹木の多い環境を好み、渡りの季節には公園や人家の庭木で観察されることも多い。春は 5 月、秋は 8 月下旬から 9 月上旬の記録が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内の繁殖数は不明であるが、繁殖が確認されていた岐阜県・神奈川県・東京都・宮城県では繁殖が確認されなくなったことが知られており、国内の繁殖分布が縮小していることは明らかである。減少の要因としては開発等による生息環境の消失だけでなく、托卵鳥であるカッコウの存在も推測される。モズは夏鳥であるカッコウの渡来前に 1 回目の繁殖を終えているが、夏鳥であるチゴモズではそれができない。

【保全上の留意点】

愛知県では通過個体群のみ確認されているので保全対策の想定も困難であるが、過去に観察された場所や環境の特性について再検証を行い、その環境の保全や再生を試みることは必要と思われる。他の絶滅危惧種についても同様の試みを行うことが、絶滅危惧種を絶滅から守る最善策と考える。

【特記事項】

カッコウの托卵によるモズ類の繁殖に対する脅威は予想を超えるものである。豊根村の茶臼山高原で確認されたモズの巣内の卵が全てカッコウのものであったという記録もある。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

アカモズ *Lanius cristatus* Linnaeus

【評価理由】

繁殖期の観察記録はあるものの県内での繁殖は確認されておらず、愛知県では耕地や河川敷の疎林で春秋に記録される旅鳥である。以前は同じくモズ科で国の絶滅危惧 I A 類のチゴモズより遙かに確認記録数は多かったが、近年急激に確認数が激減しており 2000 年以降は殆ど記録が無くなっていることから、通過個体群は絶滅危惧 I A 類と評価された。

【形態】

モズと同じ大きさで頭頂から背と腰や尾までの上面は赤褐色で翼は黒褐色、嘴は黒色。顔から胸は白く胸脇から腹は淡橙褐色であり、顔には太く黒い過眼線とその上に太く白い眉斑がある。雌雄ほぼ同色であるが雌は眉斑が細く全体の白や黒の色が不明瞭で胸脇や腹は鱗模様である。亜種には色の薄いシマアカモズや翼の黒いカラアカモズもあるが、いずれも日本海側で見られる亜種で、愛知県で見られる可能性は低い。

【分布の概要】

【県内の分布】

渡りの季節は県内全域で報告されているがその数は少なく、殆どが 1 羽の記録である。確認記録が少ない理由として、繁殖期以外は単独で行動することにより確認される機会が少ないこと、モズとの識別ができる観察者が少ないことが挙げられるが、都市公園や民家の庭木より広大な農地や河岸に立つ樹木を好むことにも依る。

【国内の分布】

繁殖地は北海道や本州中部以北の平地や高原にある牧場のよう開けた草原にある疎林の環境である。都市化や温暖化により国内からこうした環境が消失する傾向があるため、国内の繁殖分布も減少している。

【世界の分布】

アジアのシベリア南部から中国南部や日本で繁殖し、インドから中国南端、インドネシアやフィリピンで越冬する。アジア東部に分布するモズであるが、他の種と比較すれば分布の範囲は広く、4 亜種がある。

【生息地の環境／生態的特性】

低木のある牧場のような草原、明るい林、公園などに生息し低木に枯れ枝や細根、枯れ葉などで皿型の巣をつくる。繁殖期は番いや家族群で生活するが、春の渡りでは番いで行動することがあるものの、それ以外は単独で行動する。渡りの季節も広い農地や河川周辺の疎林や木立で見られることが多く、大半は 1 羽の記録である。モズとの識別ができない場合は見逃されていることが推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内では北海道や本州中部以北で繁殖しているが局所的である。開発や温暖化で生息環境は消失しているが、アカモズの生息環境は夏鳥で托卵鳥のカッコウの生息環境と似ているため托卵による影響が大きいことが推測される。留鳥のモズであればカッコウの飛来前に 1 回目の繁殖を終えているが、夏鳥であるアカモズではそれができない。

【保全上の留意点】

県内で繁殖できる環境があるのは面ノ木園地周辺や茶臼山、池の平などの高原と思われるが、近年の温暖化に加え牧畜産業の衰退や観光化による開発が進められている。同様の環境に生息する絶滅危惧種の数も多いことから、こうした環境の保全と環境の再生が愛知県の生物種保全に大きな効果をもたらすことに注目して今後の環境保全政策に活かしていくことが重要である。

【特記事項】

カッコウの托卵によるモズ類の繁殖に対する脅威は予想を超えるものである。豊根村の茶臼山高原で確認されたモズの巣内の卵が全てカッコウのものであったという記録もある。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

クロツグミ *Turdus cardis* Temminck**【評価理由】**

ツグミの仲間では標高が低い環境でも繁殖する種であったが、こうした個体がいなくなり、標高が高い環境での繁殖個体も激減している。春の渡りでは平野部や沿岸部でも囀りを聞くことができたが、近年は殆ど無くなっている。減少の要因は不明であるが、県内全域に分布を拡大している特定外来生物であるソウシチョウの存在が考えられる。このことから愛知県では繁殖個体群は絶滅危惧 I A 類、通過個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

国内に生息するツグミ属の中では最も小さく、ツグミより小さくて嘴は黄色。雄は白に黒い斑のある腹面以外は全身黒色、雌は雄の黒色の部分がオリーブ褐色で白い眉斑があり、下顎も黄色。腹部の脇は橙褐色である。飛翔時の雄は下雨覆が暗色、雌は橙色であるのも識別のポイントとなる。雌雄共黄色いアイリングがあるが、雄の方が目立つ。

【分布の概要】**【県内の分布】**

5月から7月に低山の山麓から標高の高い山地にある林地まで広く繁殖していたが、近年は低山での繁殖が激減しているようである。春の渡りは4~6月で平野部の緑地でも囀ることが多い。秋の渡りは8~10月であるが、タカの渡りのコースではタカの渡りのピークより少し遅れて見られることが多い。

【国内の分布】

夏鳥として北海道から九州までの広葉樹林や針広混交樹林で繁殖する。渡りの季節は全国各地で確認できる。西日本の一部では越冬期の記録もある。

【世界の分布】

日本と中国中部でのみ繁殖し、東南アジアの大陸北部でのみ越冬する。世界でも東アジア中南部の一部にのみ分布する、世界的にみても希少な渡り鳥であるといえる。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖場所は標高に関係無く明るい林に生息し、囀りは複雑で長く美しく鳴く。国内の三鳴鳥はウグイス、コマドリ、オオルリとされているが、これらより遙かに良い声で鳴くのにここに入っていないのは、体が大きく飼鳥としては不向きであったからと思われる。特に春の渡りでは海岸でも都市部でも美しい声で囀るので、その鳴き声がかげれば見逃すことは無い。

【現在の生息状況／減少の要因】

ツグミ属の繁殖環境は高緯度あるいは標高の高い原生林が一般的であるが、クロツグミだけは特別で比較的身近な山麓でも繁殖していた。近年囀りの声に似ている特定外来生物であるソウシチョウの生息分布が拡大した場所からは姿を消す傾向が見られ、特に標高の低い繁殖地ではその声を聞く機会が無くなった場所も多い。

【保全上の留意点】

標高に関係無く明るい雑木林や針広混交林を好むので、こうした環境の保全は大切であるが、近年同じ環境で一年を通して最優占種となっているソウシチョウとの競合が最も大きな問題となっている。

【特記事項】

愛知県内でソウシチョウの分布が確認されたのは2000年の段戸裏谷であった。その後数年で県内の山麓部まで広く拡散して今に至っている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

コクガン *Branta bernicla* (Linnaeus)

【評価理由】

本種は内湾でも広い海域に面した伊勢・三河湾の磯に生息する数の少ないガンである。確認場所の多くが渥美半島であり、稀に知多半島や三河湾の西三河沿岸部の磯にも飛来する。近年三河湾の佐久島でも越冬が観察されているが、その数は多くても3羽、内湾では全て1羽である。2000年以降は一度の確認例があるだけで、愛知県では越冬個体群は絶滅危惧ⅠB類と評価された。

【形態】

体長61cmとガン類の中では比較的小型である。雌雄同色で頭から胸と体の上面は黒褐色。頸に白い輪があり、脇や下腹、下尾筒は白く嘴と脚は黒い。ガン類の中で配色の似ているシジュウカラガンに比べればかなり小さく、白色の部分の形や位置の違いで識別は容易である。生息場所の似ているクロガモやビロードキンクロなどのカモ類とは大きさや首の長さなど体型が異なる。

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾に面した磯や島嶼で少数が見られる。1931～42年には佐久島周辺で100羽程の群れが見られたが、1970年代後半以降は多くても1～3羽の記録となっており、渥美半島や知多半島の伊勢湾岸の他、佐久島や西尾幡豆の三河湾岸の記録が多い。

【国内の分布】

冬鳥として主に本州中部以北と北海道に飛来する。本州中部以南でも少数が見られるが、海水に依存して生息するため湖沼はあっても海に接していない県や地方に飛来することは殆ど無い。

【世界の分布】

ユーラシア大陸、北アメリカ、グリーンランドの高緯度にあるツンドラ地帯で繁殖し、中緯度のユーラシア大陸や北アメリカの沿岸部で越冬する。3亜種があるが全て北半球に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

草食性で干潮時に岩礁に付いた海苔や干潟のアオサなどを採餌する。満潮時は沖で休息することが多く、淡水の池沼や水路に入ることは殆ど無い。草食性のカモ科の多くは湖沼や水路の水草や、耕地の植物などを食べるために内陸の淡水域と海域の両方に生息するのに対し、コクガンは海域だけに限って生息する特別な種といえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

伊勢・三河湾に面した磯や島嶼に生息する。渥美半島で多く確認され、稀に知多半島や西三河沿岸部の磯にも飛来する。近年三河湾の佐久島でも越冬が観察されているが、その数は多くても1～3羽であり、2000年以降の確認例は1回のみである。

減少の要因として、海域の貧栄養化による海草の減少が指摘されている。

【保全上の留意点】

下水道がほぼ整備され、その終末処理場の排水から窒素やリンをはじめとする栄養塩類の濃度が除去されていることから、植物プランクトンや海藻類が生息できずそれを食べる動物も姿を消していることが指摘されている。

【特記事項】

伊勢・三河湾の貧栄養化により、2010年代半ば頃からアサリの漁獲量が全国1位であった三河湾からアサリが消失したことが問題となっている。同様に海苔の生産量も激減しており、伊勢・三河湾における海苔粗朶の面積は最盛期の1/10にも満たない。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

トラフズク *Asio otus* (Linnaeus)

【評価理由】

本種は中型のフクロウ類で、県内では冬期に耕地の周辺にある疎林に飛来して主に農業に害を及ぼすノネズミ類や小鳥を主食とする農業の益鳥である。1990年代には市街地の神社で10羽を超える記録もあったが、2000年代に入ると多くても2羽以下の記録となり、近年はその確認記録も激減している。このことから愛知県では越冬個体群は絶滅危惧 I B 類と評価された。

【形態】

全長 37cm、雌雄同色で、顔は黄褐色で縦に白色と暗色の線があり、顔の周囲には細く黒い線で縁取りがある。体全体の羽根は黄褐色の地色に黒褐色の縦斑があり、45mm 程の長い羽角と橙色の眼が特徴。脚は趾まで黄褐色の羽毛で覆われている。木の枝に止まっていることが多く、警戒した時には体や羽角を細く真っ直ぐ伸ばして木の枝に擬態する。

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に県内全域の平野部にある農地や河川敷などへ飛来して越冬する。丘陵地や農地など開けた場所にある神社の森や緑地の林などを罫として、夜になると農地や草原などの上空を飛び回ってノネズミ類や小鳥などを捕食する。通常は1~2羽で罫をとるが、茶畑が広がる西尾市では1998年に12羽という記録もある。

【国内の分布】

北海道と本州中部以北で局地的に繁殖し、長野県までは繁殖の記録がある他、鳥取県でも記録があるが、愛知県での繁殖記録は無い。冬期は本州中部以南で越冬するが、新潟県や宮城県で越冬するものもいる。

【世界の分布】

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地域に広く分布する。世界には3亜種が分布しており、北方で繁殖するものは冬期に南へ移動するが、ヨーロッパ中南部に分布するものは大きな移動をしないようである。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖地は本州中部以北の低山や平地の社寺林などで、主に針葉樹に営巣し、巣は樹洞やタカノ古巣を利用する。繁殖期も越冬期も葉の茂った樹の枝で静止していることが多いので樹の下まで入らないと姿を確認することは困難である。姿を見られたことを知ると直ぐに飛び立って移動することが多いので、その性質を熟知していないと自然な状態を観察することは困難である。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来越冬期の罫は毎年同じ場所を利用する種であるが、近年こうした場所が無くなっており、周辺を探しても見つからないことから生息数が激減しているものと危惧される。農業で殺虫剤や殺鼠剤が使用されることによる餌資源の減少も考えられる。近年は写真撮影が身近な趣味となっているため、一旦生息場所が知られると写真撮影者が殺到することにより、生息できなくなってしまう例も多発している。

【保全上の留意点】

農業の効率化のために殺鼠剤等の使用は致し方無いとしても、危険な残留性をもった殺虫剤や除草剤等の使用には消費者への影響を含め十分な配慮が必要である。また、写真撮影者の弊害を防止するためには生息情報の拡散をしないことや、野生生物の保護に配慮の無い作品に対しては評価をしないという風潮も必要である。

【特記事項】

トラフズクは冬鳥として広い農地などに飛来する。西尾市では広大な丘陵地に茶畑が広がり、1998年にはここに在る神社の森で最大12羽の越冬が確認されていたが、ここにもカメラマンが集まり近年は飛来しなくなってしまった。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

トウネン *Calidris ruficollis* (Pallas)**【評価理由】**

1990年代までの愛知県には広大な干潟や塩田跡、埋立て途中の湿地が拡がり国内でも有数のシギ・チドリの生息地であった。当時の湿地には大小無数のシギが生息しており、その中で最も小型のシギであったシギが一歳に満たない幼鳥と思われて「当年」と呼ばれた。当時春秋の渡りでは何千羽と見られたが2010年代後半以降は五百羽程度に激減していることから、愛知県では通過個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長15cmとシギ類の中では最も小さいシギの仲間である。夏羽は顔から胸が赤褐色で頭頂から後首には黒褐色の縦斑がある。上面は赤褐色に黒褐色の斑があり下面は白。春の早い時期には各羽の周辺に白い縁取りがあるが次第に擦り切れて色が濃くなる。冬羽の上面は一様に灰褐色。幼鳥の上面は黄褐色の羽に黒い軸斑があり、背には明瞭な白いV字斑がある。嘴と脚は黒く、嘴は短い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

広い干潟を持つ庄内川河口、汐川河口と境川河口や矢作川河口や矢作古川河口の一色干潟などに春秋の渡りの季節には多数が飛来しており、内陸である安城市や岡崎市、豊田市、豊明市などの河川敷や水田などの湿地でも少数が確認されているが、近年はその数が激減している。

【国内の分布】

春秋の渡りの季節には全国の干潟や湿地で確認される渡り鳥であり、干潟の多くは毎年定期的な飛来する中継地となっていたが、近年は飛来数が激減したことで全く飛来しなくなった場所も多い。西日本では越冬する個体もある。

【世界の分布】

シベリア北東部とアラスカ西部のツンドラで繁殖し、東南アジアやオーストラリアで越冬する。日本はその通過点にあるが、越冬する個体もある。近似種であるヨーロッパトウネンの繁殖や越冬の分布はトウネンの分布の西側に接している。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口の干潟に飛来するが、満潮時に安全に生息や休息ができる後背地と呼ばれる環境が必要で、広大な干潟が存在しても隣接する後背地が無ければシギ・チドリは生息できない。理想的な後背地は干拓地の水田や埋立地の湿地などで、土壌生物が豊富な環境であるが、貯木場の材木の上や広く開けた砂地など、安全に休息できる環境があればシギ・チドリの生息は可能である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の調査では県内の全てを合計しても500羽程度しか確認されなくなっており、1990年代の何千羽と比較すると1/10程度まで減少しており、越冬の記録も無くなっている。減少の要因は沿岸部の埋立地や干拓地の開発が進んだこと、干拓地内に存在していた池や湿地が全てソーラーパネルで覆われてしまったこと、減反の水田が大豆や麦への転作に変更され農地から湿田が消失したことなどが挙げられる。

【保全上の留意点】

後背地の湿地対策として、干潟に近いある程度広範囲の水田を定めて稲の連作と冬期湛水などを推奨することで餌となる土壌生物の消失を防ぐことが必要である。海域の貧栄養化による干潟の餌資源の消滅を防ぐために、終末処理場における栄養塩類の排出基準を緩和する必要があると指摘されている。海域の貧栄養化による野生生物や人間社会に及ぼす悪影響についての啓発も重要となる。

【特記事項】

シギの仲間は識別が困難で、1970年代までは有効な図鑑さえも無い時代であった。愛知県には鍋田や汐川などの観察適地が残されており、中でもトウネンのような識別が困難な淡水系の小型シギの識別には大きく寄与してきた歴史がある。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii* (Temminck)

【評価理由】

主に山地の藪に生息する数の少ない種であるが、狩猟鳥に指定されており狩猟圧の高い種でもある。狩猟者の中にはこの種の狩猟を目的としている者が多く、その生息地も熟知されている場合が多い。2010年代までは県内各地の山地で繁殖が確認されていたが、近年はその場所も限られており丘陵地での観察例が激減していることから、愛知県では繁殖・越冬個体群とも準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長雄 125cm、雌 55cm。体型の割に頭が小さく、雄は全身が赤褐色で頭から頸が特に濃く金色の光沢がある。背、翼、胸、腹の羽には白色～淡色の羽縁があり体の下面は上面に比べて色が淡い。眼の周囲に赤い裸出部があり 42～95cm と長い尾には灰白色、黒色、赤褐色の横帯がある。雌は雄より赤味が少なく尾が短い。雌はキジの雌に似ているが全体に赤味があり尾の先が白い。キジの雌の尾の先端は黒っぽい。

【分布の概要】

【県内の分布】

丘陵地や山地であれば沿岸部から奥三河の県境まで県内の全域に分布し繁殖もしているが、知多半島では記録が無く渥美半島での記録は 1 例のみである。ヤマドリはその体型から飛行能力が低そうに見えるが、高空を飛んで離れた山から山へ移動することもできる。

【国内の分布】

本州、四国、九州に留鳥として分布する。近畿地方以北に亜種ヤマドリ、本州の温暖地に亜種ウスアカヤマドリ、本州の中国地方と四国に亜種シコクヤマドリ、九州の北部と中部に亜種アカヤマドリ、九州南部に亜種コシジロヤマドリが生息する。

【世界の分布】

本種は日本固有の留鳥であり、国内でも本州、四国、九州以外には分布していない。主に雄の羽色の特徴により 5 亜種に分類されており、南に行くほど赤味が強くなる傾向があるが、コシジロヤマドリは腰および上尾筒が白色である。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県では沿岸部の丘陵地から標高 1,000m 以上の茶臼山高原まで生息が確認されており雑木林などの森林を好んで生息する。繁殖期は 4～7 月で木の根元や土手に窪みをつくり枯れ葉や羽毛を敷いて営巣する。1 腹 7～10 卵で雌のみが抱卵し 24～25 日で孵化する。繁殖期以外は単独か番いで生活し、雄は鳴き声ではなく翼でホロ打ちという羽音を出してなわばり宣言や雌への求愛を行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

従来は県内各地で生息が確認されていたが、近年はその場所が限られる傾向にあり生息数の減少が危惧される。現在も狩猟の対象種であり、剥製や尾羽などの価値はキジとは比較にならないため、この種に集中して狩猟を行うハンターも少なくない。近年捕獲される数や狩猟時の出会い数も減少しているので、狩猟制限等何らかの対策を試みる必要があると考えられる。

【保全上の留意点】

現状のヤマドリについては手遅れとなる前に県内における生息数をより正確に把握するための調査を実施して、必要に応じて保護区の設定や捕獲数の制限を行うことが必要な時期に来ていると思われる。これは狩猟対象種全般に言えることであるが、調査の結果狩猟圧を低減することが必要な時期に来ていると判断された種については必要な保護対策を施すことが望ましい。

【特記事項】

日本の固有種であり、その長い尾は日本の国鳥のキジより長く、昔から狩猟の対象として好まれて来た。年配の猟師が最も好む狩猟鳥であり、手塚治虫の漫画「火の鳥」のモデルともなっている。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ヒメアマツバメ *Apus nipalensis* (Hodgson)

【評価理由】

日本では1967年に静岡県で初めて繁殖が確認された種で、その後西日本の太平洋岸などへ繁殖分布を拡大している種で、環境省ではリスト外と評価されているが、県内に於ける繁殖分布は局地的で安定していない。イワツバメと同じく人工物で繁殖し、昆虫食でありながら少数の越冬も確認されていることから僅かな環境の変化により絶滅が危惧されることで愛知県では繁殖・越冬個体群とも準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長13cm、翼開長28cm、雌雄同色で体は黒褐色、下顎から喉は白く背と上部雨覆に青色光沢がある。腰と上尾筒は白く、尾は浅い凹尾。嘴と脚は短く黒色。イワツバメより大きく翼が長く、体の下面は汚白色。アマツバメはより大きく翼が長い。尾はより深い凹尾。イワツバメやコシアカツバメの古巣も利用する。泥やワラで巣をつくり、巣の入り口に羽毛を付けるのがこの種の特徴である。

【分布の概要】

【県内の分布】

1980年代までは愛知県での繁殖は無いと思われていたが、1992年6月に岡崎市で営巣が確認され、その後豊田市でも確認されている。イワツバメと共に越冬することも多く、越冬しない年もあるが越冬する年は数十羽のイワツバメの群れに数羽が混じることが多い。

【国内の分布】

1929年6月に南大東島で1羽が採集されて以後国内での記録が無かったが、1967年7月に静岡市で繁殖が確認され、以降本州の太平洋岸を中心に四国、九州などの温暖な場所で留鳥として繁殖する。西南諸島や北陸地方でもごく少数が繁殖する。

【世界の分布】

アフリカ大陸、ユーラシア大陸南部のヒマラヤ周辺から東南アジア、中国東部や関東地方以西の日本、台湾などに広く留鳥として分布するが、分布は局地的で生息数は多くない。一部は冬期に南へ移動する。

【生息地の環境／生態的特性】

広い河川や海岸に近い市街地に生息し、ビルの軒下や歩道橋の下などで繁殖する。イワツバメやコシアカツバメの古巣にも好んで営巣するが、巣の入り口に羽毛を付ける性質がある。イワツバメも全長13cmとほぼ同じ大きさであるが、翼の長さはヒメアマツバメの方が遙かに長く、羽ばたきの形もアマツバメ特有のものなので識別は容易である。秋の渡りではタカの渡りと同じコースを通る。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖は局地的で安定しておらず、毎年越冬する訳でもない。生息数も2000年代後半には繁殖期に一カ所で40羽という記録もあったが、近年は渡りの季節でも10羽以下しか確認されていない。減少の要因は不明であるが、昆虫食なので越冬期の餌不足なども考えられる。温暖化により越冬期の生息条件は良くなっているものと推測されるが、今後の観察に注目していきたい。

【保全上の留意点】

愛知県ではイワツバメと一緒に見られることが多いので、市街地で繁殖するイワツバメの繁殖環境を保全することも大切と思われるが、近年はその生息数も繁殖数も少なくなっているので手の施しようがないというのが現状である。とりあえず現時点では、県内に於ける生息状況についてもっと詳細に調べることから始めなければならない。

【特記事項】

ツバメの亜種であるアカハラツバメを除けば、ツバメと呼ばれる鳥は冬には居ないと思われていたが、近年は越冬するイワツバメの記録も多くなり、それと共存するヒメアマツバメの観察記録も報告されるようになっている。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ミヤコドリ *Haematopus ostralegus* Linnaeus**【評価理由】**

県内では数の少ない冬鳥として少数が沿岸部で記録されていたが、2010年代半ばより三河湾で数十羽の群れが見られるようになった。その後佐久島で20羽程の越冬が確認され現在に至っている。国内では東京湾や三重県の伊勢湾などで生息数が増加し、県内で増加した時期は三重県で増加した時期に一致するが、国内でも生息数の少ない種であるため愛知県では越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長45cm。雌雄同色で体は太め、頭部から胸と上面は黒色。嘴は長く赤色で目立つ。腹部から下尾筒は白色で脚はピンク。翼上面は黒く、太い白色の翼帯がある。翼下面は白色。非繁殖羽では嘴先端が暗色になる。幼鳥では上面に褐色味があり、嘴は淡色で先端は黒色。いずれにしても体が大きく目立つ色彩をしているので、識別に困る種ではない。

【分布の概要】**【県内の分布】**

1970年代から三河湾の佐久島では少数が生息していたようであるが、近年は伊勢湾の三重県沿岸で数を増しており、その一部が伊勢湾の鍋田や三河湾にも飛来していると思われる。県内では佐久島で多い時には20羽以上が見られるが、その一部が一色干潟へも飛来して、2014年3月には55羽の記録がある。

【国内の分布】

1960年代までの国内では迷鳥とされていたが、近年は冬鳥として東京湾や三重県沿岸で数が増え、三重県に飛来する一部の個体が三河湾などにも飛来しているようである。三重県では2017年3月に津市で63羽という記録がある。

【世界の分布】

14亜種があり、ヨーロッパ、アジア東部、カムチャツカ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南北アメリカなどに分布する。日本に飛来する亜種はカムチャツカか沿海州で繁殖するものと思われる。

【生息地の環境／生態的特性】

東京湾や三重県、三河湾に生息する個体群は干潟でアサリなどの二枚貝を食べているが、かつて佐久島に生息していた個体群は岩礁に生息していたことから岩礁に付いたカキを食べていたと思われる。ミヤコドリの英名が **Oyster catcher** であることから、佐久島の個体は本来の食性であるカキを食べる種であった可能性がある。現在の佐久島の個体群は岩礁でも干潟でも採餌しているようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在国内で見られるミヤコドリは干潟でアサリなどの二枚貝を食べるものが大半のようであるが、佐久島で生息していたカキを食べる個体群が現在も存在しているのであれば国内ではかなり希少な存在であるといえる。これからその食性について観察を続けることでその系統が分かれば日本でも新しい発見であると言える。

【保全上の留意点】

佐久島で生息していたカキを食べる個体群が現在も存在しているのであれば国内ではかなり希少な存在であるといえる。今後は佐久島の個体だけでなく、愛知県全体のミヤコドリについてもその食性の調査を行う価値はあると思われる。

【特記事項】

貝を主食とする水鳥は、食べる貝の種類によって嘴の形も異なると言われていた。英名の **Oyster catcher** の通り、本来は岩場に多いカキを食べるものと思われていたが、近年国内で多くなってきた個体は全てアサリなど干潟の二枚貝を食べている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ムナグロ *Pluvialis fulva* (Gmelin)

【評価理由】

国内では春秋の渡りの季節に通過する旅鳥とされているが、愛知県では沿岸部で少数が越冬する。県内での生息数は春の渡りに多く、秋の渡りでは少ない傾向がある。春の渡りでは内陸部を渡っていることも考えられ、沿岸部だけでなく内陸部にある湿田や山地部の湿原で確認されることもあるが、近年はその数も激減しているため愛知県では越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約 24cm で中型のチドリである。雌雄同色で夏羽では頭頂から体の上面は黒色と黄褐色のまだら状であり、顔から腹までの体下面は黒色で体上面との境は眉斑から脇までは白線が続く。冬羽は下面が灰褐色で、頸から胸に褐色の淡い縦斑がある。嘴は黒、脚は暗灰色、幼鳥は冬羽に似るが、上面の黄褐色味が少なく、下面は脇から腹まで褐色の斑がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

渡りの季節に木曾川や矢作川、汐川、伊川津などの河口周辺に飛来するが、塩水よりも淡水を好むため、干潟よりその周辺の水田や草原で見られることが多く、県内では越冬するものも少くない。2010年頃までは1群100羽を超える群れも見られたが、近年は多くても60羽程度に減少している。渡りの季節には内陸の豊田市や岡崎市などにある湿田でも見られ、新城市の長ノ山湿原で見られることもある。

【国内の分布】

国内では旅鳥として全国の沿岸部に飛来するが、内陸を通過する個体も少くないようである。本州中部以南で越冬することが知られている。

【世界の分布】

2亜種があり、シベリアとアメリカ西部のツンドラで繁殖し、南アジア、オーストラリア、熱帯太平洋で越冬する。世界には近似種としてヨーロッパムナグロとアメリカムナグロがいるが、日本では迷鳥であり別種である。

【生息地の環境／生態的特性】

国内にはよく似た種としてダイゼンがあるが、ダイゼンの生息環境が干潟であるのに対し、ムナグロは淡水の湿地環境を好む。近年沿岸部の湿田が乾燥化したことにより、稀に干潟に入る個体を見ることもあるが、基本的にムナグロの生息環境は淡水の湿地や乾燥した草地である。越冬の時もこうした環境を好み、海岸のテトラポットで群れるようになるのは渡去が近くなってからである。

【現在の生息状況／減少の要因】

2001年には豊橋の神野新田で66羽、2004年の春には海部郡で400羽の群れも見られたが、2022年以降は20羽を超える群れが見られなくなった。減少の要因は沿岸部に存在した埋立地や養魚池などの淡水湿地が埋められソーラーパネルで覆われたことや、減反で湿地が多かった水田が麦や大豆への転作に変わったことにより沿岸部から湿田や湿地の環境が消失したことによる。

【保全上の留意点】

淡水湿地の環境を確保する以外に方法は無いので、埋め立て地の遊休地に浅い淡水湿地を再現すること、干拓地内にある程度の面積の水田を確保して稲の連作を奨励することで、冬期湛水する湿田の環境を再現すること、などの対策を急ぐべきである。ソーラーパネルを取り払うことは無理であるが、新しく養魚場跡になりそうな環境を確保することも大切であろう。

【特記事項】

近年の沿岸部から淡水湿地の環境が消失している現状に注目して、早急な対策が講じられなければ、かつてシギ・チドリをはじめとする水鳥の天国と呼ばれた愛知県からもこうした絶滅危惧種は姿を消すことになる。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

オオセグロカモメ *Larus schistisagus* Stejneger

【評価理由】

主に冬期、伊勢・三河湾や外洋に飛来して生息するが、ユリカモメやカモメの仲間の大群の中に同じく大型かもめであるセグロカモメと共に数十羽が見られる程度である。西尾市沿岸の三河湾では比較的多く見られるが、最大でも200羽余りである。夏期には越冬する幼鳥や若鳥も見られたが、近年は他のカモメと同様に激減し環境省で準絶滅危惧とされたので、愛知県も越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約64cm。雌雄同色の大型カモメ。頭部から下面は白く、嘴は大きく黄色で下嘴の先端付近に赤色斑がある。背と翼上面は濃い灰黒色で最外初列二枚の黒斑の内側および風切各羽の先端が白い。尾は白く、脚はピンク。非繁殖羽では頭部から頸にかけて灰褐色の羽毛が混じる。第1回冬羽は全身灰褐色で嘴は黒色。翼上面の雨覆と風切の濃淡差は小さく、尾は一様に灰褐色。大型カモメの中で最も背の色が濃い。

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期の一斉調査では幡豆町の海岸で200羽を超える記録もあるが、県内の通常の干潟では多くても20羽程度である。夏期には繁殖地に戻っても繁殖できない若鳥が他のカモメ類の若鳥と一緒に干潟や埋め立て地の湿地などで越冬する姿を見ることが普通であったが、近年の酷暑では、夏期には確認されなくなってしまった。

【国内の分布】

日本では5～8月に北海道から青森県や岩手県など本州北部の海岸や島の断崖などで集団繁殖し、冬期は日本全国から九州まで南下して越冬するものもいるが、冬期も繁殖地に残る留鳥もいる。

【世界の分布】

アジア東部のみに分布する。カムチャツカやコマンドル諸島、千島、ウスリー、サハリン、北海道、本州北部などの沿岸で繁殖し、冬は本州、四国、九州、伊豆諸島、沖縄、中国の東海岸で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口などに生息し、雑食性で魚類や甲殻類、海産小動物などを食べるが、愛知県では内陸にある岡崎市の矢作川で観察されたことがあり、他のカモメ類と同様にスカベンジャーとして川や海に捨てられた生ゴミなども食べるのであろう。ただし内陸で見られたのは一度だけなので、セグロカモメと比較すればより海水を好む種であることが分かる。繁殖地では他の鳥の巣を襲ってそのヒナなども食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息数が激減しているのは温暖化の影響と思われるが、今後も調査を続けなければ正確なことは分からない。ただし、冬鳥である他のカモメ類やカモ類も激減していることに間違いはないので、今後も調査をしっかりとっていくことは重要である。

【保全上の留意点】

絶滅危惧種を絶滅から守るために、今すぐ地球の温暖化を防止する対策をとることが重要である。加えて生息環境である湿地の確保も重要であり、このままの状態では消滅する野生生物は増え続けることになる。

【特記事項】

大型カモメの仲間にはシロカモメ、ワシカモメ、オオセグロカモメ、セグロカモメの4種がある。近年セグロカモメが幾つかの種に分割されてはいるものの、オオセグロカモメは東アジアだけに分布する唯一の固有種である。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
 鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
 愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
 日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

（執筆者 高橋伸夫）

コウノトリ *Ciconia boyciana* Swinhoe

【評価理由】

国内に野生で繁殖する個体は 1960 年代に絶滅したが、愛知県では大陸から越冬のために飛来したと思われる野生個体が 1982 年まで確認されている。環境省では国内で人工増殖して放鳥した個体を含め絶滅危惧 I A 類と評価しているが、近年愛知県でも脚環や発信器を装着された個体が増加しており、雄同士での営巣行動なども確認されていることから、愛知県では越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 112cm、雌雄同色。大型の水鳥で全身が白色、虹彩は黄白色で顔の皮膚は赤色。嘴は黒く、太く長くて先端は尖る。風切と大雨覆は黒色で脚は長く赤色。ツル類に似るが嘴や頭、頸や体がツル類より太く重量感がある。コウノトリは樹上に営巣するが、地上で営巣するツル類には木の枝に止まる性質が無いので、日本画に描かれている「松に鶴」のモデルはこのコウノトリと言われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張、西三河、東三河の平野部や知多半島、渥美半島などで確認されているが、2009 年以降は全て人工繁殖の個体やその子孫が飛来している。2024 年 4 月 26 日には平野部ではなく新城市作手の長ノ山湿原でも 1 羽を確認したことで、国内でも内陸の山地の上空も移動していることが判明した。

【国内の分布】

現在は人為的に導入された種ということで「日本鳥類目録」にはその分布が記されていないので詳細は不明であるが、野生個体は江戸時代まで日本の各地に留鳥として普通に生息していたとされている。

【世界の分布】

ウスリー、アムールから中国東北部および日本で繁殖し、主に中国東部で越冬するとされている。2000 年以前に日本に飛来した冬鳥の個体はそこで繁殖した個体であると推測される。国内では 2005 年から人工繁殖させた個体の放鳥事業が行われている。

【生息地の環境／生態的特性】

農耕地、河川、湿地などに生息し雑食性で魚類、両生類、軟体類を好む。本来は松などの大木に樹枝などで大きな巣をつくって繁殖し、昔は社寺林に大きなコロニーをつくって繁殖していたと言われているが、近年ではコロニーは確認されていない。また近年は樹木の他に電柱などでも営巣を始めたために、営巣用の専用櫓などを設置してそこに誘導する対策も取られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

1971 年に野生個体が絶滅し、2005 年から人工飼育個体の放鳥が始まった。日本鳥類目録では国内移入種とされたことで国内に於ける現在の生息状況の詳細は不明であるが、野生種が絶滅したのは明治以降の乱獲と農薬による影響が最大の要因であることに間違いは無い。農薬による影響はコウノトリへの直接の影響だけでなく、餌生物の消失による二次的な被害も大きいので、こうした要因の分析は今後も必要となる。

【保全上の留意点】

前項でも述べたが、人間活動の結果として現在の環境があり、野生生物は全てそれに順応して現在の生態系が形成されてきた。近年急に環境問題が台頭したことでカーボンフリーや SDGS が環境問題解決のための最善策とされているが、メガソーラーや風力発電等は、その環境に順応してきた野生生物には大きな脅威である。

【特記事項】

ユーラシア大陸に 3 亜種が繁殖分布しており、西端のヨーロッパに分布する亜種は体がやや小さく、嘴が赤いのでシュバシコウと呼ばれる。子供を運んで来るといった縁起の良い話になっているのはこのシュバシコウである。

【関連文献】

- 黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* (Linnaeus)**【評価理由】**

県内では沿岸部から低山帯まで普通に見られ、沿岸部や丘陵地の水辺ではアマサギやコサギと共に集団繁殖しており、サギの仲間ではコサギと共に最も生息数の多いサギとされていた。2010年までは一カ所で100羽以上の記録があり、1994年には一色沿岸だけで4,000羽の記録もあったが、その後激減して近年では姿を見ることも困難な状態になったために、愛知県では繁殖・越冬個体群とも準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長57.5cm、雌雄同色で頭頂から背、肩羽は紺色で、後頭には細く白い飾羽が2本ある。額から眼の上までは白い。翼と腰、尾は灰色。体の下面は白く、測頸から脇は灰色みを帯びる。嘴は黒、脚は黄色。眼先は青灰色で虹彩は赤。幼鳥は全体に褐色で、白色やバフ色の斑が密にあり、「ホシゴイ」と呼ばれる。夜行性で飛びながら「クアッ」と鳴くので「夜ガラス」と呼ばれることもある。

【分布の概要】**【県内の分布】**

標高の高い地域では少ない種で、県内平野部周辺の全域でコサギと共に普通に見られる中型のサギであった。丘陵地や平地の林で中型や小型のコサギやチュウサギ、アマサギと共に集団繁殖していたが、近年こうした小規模の集団繁殖地は消滅傾向にあり、現在の集団繁殖地では大型のアオサギやダイサギが優先種となっている。

【国内の分布】

本州から九州で繁殖し東北地方以北では夏鳥、本州中部以南では留鳥、西南諸島では冬鳥である。愛知県に分布するものは留鳥とされていたので、各個体が夏鳥であるのか冬鳥であるのかといった調査はこれまでなされてこなかった。

【世界の分布】

ユーラシア大陸、アフリカ大陸、南北アメリカ大陸の温帯から熱帯地方に広く分布する。東アジアでは日本の他に朝鮮半島や中国東部で繁殖し、大陸で繁殖するものはインドや東南アジアで越冬する。日本で繁殖する個体群の中にも南下するものがある。

【生息地の環境／生態的特性】

基本的には夜行性であるが昼間に活動するものも多い。主に昼間は薄暗い森や茂った竹藪などで休息し、夕方から水辺に出て魚やザリガニなどを捕食する。群れで居ることを好み、同種やコサギなどと群れ、繁殖も中型や小型のサギと一緒にコロニーで行うことが多い。日本では留鳥で渡りは行わないと思われていたが、冬期にフィリピンや中国南部に渡るものも少なくないことが標識調査で明らかになっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前はコサギやアマサギなどと共に知多半島の鵜の山などの大型コロニーで普通に繁殖していたが、近年はより大型のアオサギやダイサギが増加したことで、ここで繁殖する個体は殆ど見られなくなっている。県内の各地の平地や丘陵地にある水辺の周辺でゴイサギを含む中型や小型のサギのコロニーができることもあったが、継続は難しいようで、近年はこうしたコロニーを見ることも無くなっている。

【保全上の留意点】

かつては養殖漁業の害鳥として駆除の対象となった種でもあったことで、単純にその生息数の増加に注力することには考慮も必要ではあるが、1977年の愛知県の定点調査の合計が1,500羽を超える生息数であったものが、現在では100あるいはそれ以下にまで減少していることは大きな問題として考えなければならないが、当面はこうした調査を継続してその対策を科学的に考慮することが重要と思われる。

【特記事項】

平家物語の中で後醍醐天皇の命じで捕らえられたということで五位の位を与えられたという故事がその名の由来である。このように古来人の身近で普通に生息していたサギであったが、近年はアオサギやダイサギが身近なサギとなっている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

(3) 汽水・淡水魚類

2025年版レッドリストに掲載された汽水・淡水魚類のうち、新たにリストに掲載された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。

【掲載種の解説（汽水・淡水魚類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

キタドジョウ *Misgurnus* sp. (Clade A)

【評価理由】

近年ドジョウとは別種とされた種であり、現在は名古屋市内の1地点しか生息が確認されていない。生息地面積の減少や環境悪化、狭義のドジョウとの交雑が進んでおり、絶滅寸前の状態にある。

【形態】

全体的な形態はドジョウと同様だが、尾鰭基部における尾柄高が小さく、尾鰭以外の各鰭がドジョウより小さいため、全体的に細長く見える。また、胸鰭分枝軟条数と総脊椎骨数の最頻値がドジョウより多い。成熟したキタドジョウの雄の胸鰭骨質板はドジョウに比べて未発達で、背鰭後部の体側にのみ瘤状隆起を持つ。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市。過去には三河地方に分布した記録がある（現状不明）。

【国内の分布】

北海道から福井県（北海道は人為分布）。

【世界の分布】

ロシア（サハリン）。

【生息地の環境／生態的特性】

伏流水が湧出し、抽水植物帯が広く発達する湿地に生息する。福井県における調査研究では、良質な環境を有する湿地帯とその周辺に分布が限定されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

西尾市や安城市に遺伝的に特異なドジョウが分布していたことは、各地のドジョウの蛋白質多型の分析結果によって示されていた（木村・尾庭, 1981）。それらはキタドジョウと考えられるが、現在の三河地方では分布が確認されていない。名古屋市では2023年にキタドジョウの分布が確認され（向井ほか, 2023）、当初は人為分布が疑われたが、その後、全国のキタドジョウの mtDNA と比較することで在来系統と考えられるようになった。現在知られている唯一の生息地周辺は開発が進行しており、ドジョウとの交雑も進んでいる。

【保全上の留意点】

生息地となる湿地の規模と環境を維持する必要がある。飼育下での系統保存も必要と考えられる。

【特記事項】

本種は分類学的な混乱があり、他の和名・学名が用いられることもある。

【引用文献】

木村正雄・尾庭きよ子, 1981. 各地のドジョウ集団の蛋白質多型. 動物血液型研究情報, 9: 32-36.
向井貴彦・浅香智也・鳥居亮一・宇地原永吉, 2023. 名古屋市におけるドジョウの mtDNA の系統と分布. なごやの生物多様性, 10: 81-86.

【関連文献】

中島淳・内山りゅう, 2017. 日本のドジョウ, 224pp. 山と溪谷社, 東京.
Okada, R., T. Inui, Y. Iguchi, T. Kitagawa, K. Takata and T. Kitagawa, 2017. Molecular and morphological analyses revealed a cryptic species of dojo loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Cypriniformes: Cobitidae) in Japan. J. Fish Biol., 91: 989-996.
Okada, R., K. Morita, T. Toyama, Y. Yashima, H. Onozato, K. Takata and T. Kitagawa, 2024. Reconstruction of the native distribution range of a Japanese cryptic dojo loach species (*Misgurnus* sp. Type I sensu Okada et al. 2017): has the Type I loach dispersed beyond the Blakiston's Line? Ichthyol. Res., 71: 337-352.
八嶋勇氣・岡田龍也・北川忠生, 2021. 福井県三方湖に流入する水路から得られた西限記録となるドジョウ隠蔽種 *Misgurnus* sp. Type I sensu Okada et al., 2017. Ichthy. Natural History of Fishes of Japan, 8: 1-4.
Yashima, Y., R. Okada and T. Kitagawa, 2023. Differences in sexual morphological dimorphisms between two loach species of the genus *Misgurnus* (Cypriniformes: Cobitidae) in the River Shono system, Fukui Prefecture, Japan. J. Vertebr. Biol., 72: 1-15.

(執筆者 向井貴彦)

(4) 昆虫類

2025年版レッドリストに掲載された昆虫類のうち、新たにリストに掲載された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。一部の情報不足種については、簡易な解説を記述した。

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。また、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用または記録として使用した文献を、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献のうち、代表的なものを、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

オオサカアオゴミムシ *Callistoides pericallus* Redtenbacher

【評価理由】

1957年の桂川基久男氏採集標本を最後に確認できていない。平野部や里山などの湿潤環境に生息する昆虫類の多くが減少しており、尾張地域では庄内川の河川環境の改修により絶滅したと考えられる。

【形態】

体長 11.3～12mm。頭部は緑色で光沢がある。前胸背板と脚は橙色。上翅は黒色で光沢はなく橙色に縁どられる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市（戸田，2022）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



【生息地の環境／生態的特性】

平地や里山の湿地、水田の縁や水路脇、河川敷などに生息する。走光性があり、燈火に飛来することもある。関東地方の平野部ではよく見られるが、全国的には少ない種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の庄内川河川敷にて得られているが、その後の河川改修などにより絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

現在、平野部の湿潤環境は、ため池や河川敷が多くを占め、都市部で農薬使用の少ない水田などは激減している。よって、ため池や河川の改修は、そこに生息している種について慎重に検討し、行う必要がある。本種も水生種ではないが、湿地的な環境を好むため護岸などで簡単に絶滅すると考えられる。

【引用文献】

戸田尚希, 2022. 桂川基久男氏の蒐集したゴミムシ類. 佳香蝶, 74 (290): 44-45. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 514pp. 保育社, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

エチゴトックリゴミムシ *Oodes echigonus* Habu et Baba

【評価理由】

戦前に名古屋市内で採集された標本が確認された(長谷川ほか, 2015)が、80年以上生息状況がないこと、本種の生息が確認された名古屋港周辺の低湿地環境はすでに失われていることから「絶滅」と評価された。

【形態】

体長 15 mm 内外。オオトックリゴミムシに類似するが、下唇中央歯の先端が陥入しないこと、前胸腹板突起が縁取られること等によって区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

1942年に現在の名古屋市港区土古付近で採集された標本が2点現存するのみ。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



名古屋市, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

池沼の岸边、湿地、水田周辺などの湿性草地に生息する。沿岸部を中心に分布すると推測されるが、詳細は不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

80年以上生息確認がない。

池沼周辺、河川敷など平野部(特に沿岸部)の湿地環境を伴う環境の減少、消失、変質。水質汚濁による水辺環境の悪化。

【保全上の留意点】

沿岸部の低湿地を分布域とする種と考えられるので、現在、沿岸部に残る低湿地環境を残すことが、本種の将来的な自然回復の可能性を残す唯一の方法であるばかりでなく、多くの水生生物にとっても有効な保全手段となる。

【引用文献】

長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希, 2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (25): 21-24. 豊橋市自然史博物館, 豊橋市.

(執筆者 長谷川道明)

スジマグソコガネ *Aphodius rugosostriatus* Waterhouse

【評価理由】

かつて平野部や丘陵地に多く点在していた牧場は、都市化、宅地化が進むにつれ、環境問題から山間部へと移転したり、県内から姿を消したりしている。こういった牧場に依存している本種は、見るができなくなった。

【形態】

体長 4.4～6.8mm。光沢のある赤褐色から暗褐色。頭部は中央が隆まらず、会合線中央は隆起する。前胸背板は大小の点刻を散布する。上翅条溝は深く、条溝内の点刻は強く横長で間室にはみ出し、間室は隆起し小点刻を散布する(川井ほか, 2005)。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市、岡崎市 (戸田ほか, 2022)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、五島列島 (岡島・荒谷, 2012)。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、中国、シベリア (岡島・荒谷, 2012)。



春日井市, 1955年6月17日, M. Sugiyama 採集

【生息地の環境／生態的特性】

放牧地などのオープンランドから見つかることが多い。新鮮な牛・馬・鹿などの糞に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

平地の放牧地の牛糞でかつては普通に見られる種であったが、こういった平地の牧場や草地に依存していた本種は、牧場の減少や移転により、1962年の標本を最後に見つかっていない。

【保全上の留意点】

本種に限らず平野部の牧場は減っており、その様な日当たりの良い草原環境や、そういった場所での動物の糞で生活している種は減少の一途である。

【引用文献】

- 川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 1: 104. 昆虫文献六本脚, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇, 2022. 愛知県の甲虫目録9 (コガネムシ科: ニセマグソコガネ亜科, マグソコガネ亜科). 佳香蝶, 74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. スジマグソコガネ. コガネムシ科マグソコガネムシ亜科, 日本産コガネムシ上科標準図鑑, p.239, (株)学研教育出版, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

クロホシコガシラミズムシ *Haliplus basinotatus* Zimmermann

【評価理由】

全国的にも生息地は限定的で、愛知県内でも限られており、見つかる個体数も減少している。現在残っている環境が浚渫などで改変されれば直ぐにでも絶滅となることが容易に考えられる。

【形態】

背面は黄褐色。頭部は橙色味を帯び、後方に黒斑がある。上翅には5～6対程度の黒斑があり、会合部は黒色縦条となる。上翅基部の様子は変異がある（中島ほか, 2020）。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、豊田市、瀬戸市、田原市（戸田ほか, 2020）と犬山市（緋田ほか, 2021）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬（中島ほか, 2020）。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア極東部（中島ほか, 2020）。



【生息地の環境／生態的特性】

植物の豊富な池沼や水田脇の水路などに生息し、抽水植物や沈水植物が豊富な環境を好む。幼虫はシャジクモ類を食べる事が知られる（中島ほか, 2020）。

【現在の生息状況／減少の要因】

犬山市の生息地での個体数は多くなく、生息地のため池は浚渫された。保護のため流入部にワンドを設けたが、現在すべて埋め立てられ、生息は確認されていない。この池の周囲の生息地は未確認である。また豊田市の生息地では、コイの養殖がなされており、部分的に残っている浅瀬で見られる。いずれも小さな環境で、失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

生息地周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地のため池自体の保全が必要である。

【引用文献】

- 緋田祐太・森井隆文・大野友豪・池竹弘旭, 2021. 愛知県犬山市にてチュウブホソガムシとクロホシコガシラミズムシを採集。佳香蝶, 73 (285): 13-14. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
- 中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
- 戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江昇, 2020. 愛知県の甲虫目録6（コガシラミズムシ科, ミズスマシ科）. 佳香蝶, 72 (281): 54-60. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

ムモンチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus* sp.

【評価理由】

2021年に本種の生息が愛知県でも確認された種で、生息している池は限定している。今後の調査により、新たに生息地が確認される可能性はないではないが、現状は限定的でアメリカザリガニやハスなどの外来種も多く、これ以上の悪化では生息できなくなる可能性が高い。

【形態】

2.2～2.3mm。背面は橙色味の強い黄褐色。上翅はより暗色となる。目立つもようは無い。（中島ほか, 2020）

【分布の概要】

【県内の分布】

常滑市（戸田, 2021）。

【国内の分布】

本州（東海地方以西）、四国、九州、南西諸島（中島ほか, 2020）

【世界の分布】

不明。



常滑市, 2021年5月20日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

水生植物が豊富な池に生息する。既知産地は全国的にも極めて限られる。1990年代から存在は確認されているが、現在に至るまで学名は未決定である（中島ほか, 2020）。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種が得られているのは、住宅が隣接するため池で、ハスが繁茂しアメリカザリガニも多産している（戸田, 2021）。水田の圃場整備、水質の汚染などによる生息地の減少、環境悪化が主要な減少の原因と推測される。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
戸田尚希, 2021. 愛知県にてムモンチビコツブゲンゴロウを確認. 月刊むし, 610: 9. むし社, 東京.

（執筆者 戸田尚希）

スナハラゴミムシ *Diplocheila elongata* (Bates)

【評価理由】

近年、関東地方の一部を除いては、生息確認が極めて困難になっている。愛知県では、1999～2002年に豊橋市内で採集された標本が4点確認され、本県にも分布していることが明らかになった（長谷川原稿準備中）が、他に情報がなく、また本種に適した水辺環境が悪化していることから、危機的状況に陥っている可能性が高い。

【形態】

体長23mm内外。オオスナハラゴミムシに似るが、光沢があり、頭楯の前縁が平ら、複眼内側の剛毛が1本などの特徴により区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内ではこれまで記録が知られていなかったが（間野，2018）、1999～2002年にかけて豊橋市内で採集された4点の標本が確認された。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



豊橋市，長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や池沼の岸辺、水田周辺などの湿性草地に生息する。8月下旬に新成虫が出現するというが、生態的な情報に乏しい。夜行性で、灯火にも飛来する。成虫は際の泥地でタニシなどの水生巻貝を好んで捕食することが観察されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

池沼周辺、河川敷など平野部の湿地環境を伴う環境の減少、消失、変質。水質汚濁による水辺環境の悪化。圃場整備による水田とその周辺環境の画一化。休耕田の管理放棄、遷移進行にともなう湿地の乾燥化などが要因として考えられる。また、水田周辺に生息する種であることから、農薬の影響を受けた可能性も考えられる。

【保全上の留意点】

2002年まで確認されていたことから、本種が確認された豊橋市や同様の環境がある地域で、本種の生息確認調査を実施する必要がある。

【引用文献】

間野隆裕編，2018. 愛知県の生物多様性 グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編，280pp，愛知県環境部自然環境課. 名古屋.

（執筆者 長谷川道明）

チュウブホソガムシ *Hydrochus chubu* Balfour-Browne et M.Satō

【評価理由】

本種は県内で犬山市の1カ所のみが確認されていたが、ため池の改修によりダメージを受けている。

【形態】

2.4～2.5mm。背面は暗褐色から茶褐色で青緑色の金属光沢をもつ。頭部と前胸背板は暗色。上翅に不明瞭な暗色紋がある。上翅の奇数間室の隆起は明瞭（中島ほか, 2020）。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市（緋田ほか, 2021）。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。近県では三重県（三重県, 2015）や滋賀県（滋賀県, 2015）に分布する。

【世界の分布】

日本、韓国（Dae-Hyun Lee et al, 2013）。



犬山市, 2019年9月7日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

植物の豊富な池沼や水田脇の水路などに生息し、抽水植物や沈水植物が豊富な環境を好む。幼虫はシャクジモ類を食べる事が知られる（中島ほか, 2020）。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地での個体数は多かったが、生息地のため池は浚渫された。保護のため流入部にワンドを設けたが、現在すべて埋め立てられ、生息は確認されていない。この池の周囲の生息地は未確認であるが、環境が失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

生息地周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地のため池自体の保全が必要である。

【引用文献】

- Dae-Hyun Lee・Soong Hwa Lee・Kee-Jeong Ahn, 2013. Taxonomy of the Genus *Hydrochus* (Coleoptera: Hydrophilidae: Hydrochinae) in Korea. *Anim. Syst. Evol. Divers.* Vol.29, No.3: 249-252.
- 緋田祐太・森井隆文・大野友豪・池竹弘旭, 2021. 愛知県犬山市にてチュウブホソガムシとクロホシコガシラミズムシを採集。佳香蝶, 73 (285): 13-14.
- 三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015. 7 昆虫類. 三重県レッドデータブック 2015 ～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～: 146. 三重県農林水産部みどり共生推進課.
- 中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
- 滋賀県生きもの総合調査委員会編, 2016. 滋賀県で大切にすべき野生生物ー滋賀県レッドデータブック 2015年版ー, 368 pp. 滋賀県.

（執筆者 戸田尚希）

エンデンチビマルガムシ *Paracymus aeneus* (Germar)

【評価理由】

本種は塩性湿地に生息するが、海岸部は堰堤が整備され、河川以外で塩水が流入する汽水環境が見られなくなった。

【形態】

体長 2.9~3.0mm。背面は黒色で光沢があり、近似のチビマルガムシに比べより強く大きな点刻が密にある。中胸腹板突起後方の薄板はやや発達する (中島ほか, 2012)。

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市、西尾市 (戸田, 2022)。

【国内の分布】

岡山県、大分県 (中島ほか, 2020)、対馬 (小林, 2020)。

【世界の分布】

ロシア極東部からヨーロッパ。



【生息地の環境／生態的特性】

塩性湿地に生息し、海岸付近の植物が散在する浅い湿地で見つかる。灯火にも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境が限定的であるため、現在の生息地が失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

汽水域という特殊な環境であるため、周辺環境開発などは慎重を期し、生息地自体の保全が必要である。

【引用文献】

小林温, 2020. 長崎県対馬からエンデンチビマルガムシの記録. 月刊むし, 592: 58. むし社, 東京.
中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
戸田尚希, 2022. エンデンチビマルガムシを愛知県で採集. 月刊むし, 614: 46. むし社, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

コスジマグソコガネ *Aphodius lewisi* C.O.Waterhouse

【評価理由】

かつて平野部や丘陵地に多く点在していた牧場は、都市化、宅地化が進むにつれ、環境問題から山間部へと移転したり、県内から姿を消したりしている。現在は山間部でシカ糞に依存したものが、かろうじて確認されている。

【形態】

体長 2.9~4.0mm。やや光沢の鈍い赤褐色から褐色。頭部は前縁がわずかに湾入し、頭楯は中央がやや隆まり、会合線上にコブ状隆起はなく、複眼は大きい。前胸背板は大小の点刻をやや密に散布する。上翅条溝は細く、低い隆条で縁どられ、間室の中央に稜状の隆起をもつ (川井ほか, 2005)。



春日井市, 1954年9月4日, 更科廣 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市 (戸田ほか, 2022)、豊川市。

【国内の分布】

北海道、本州、九州、八丈島、八丈小島、奄美大島 (岡島・荒谷, 2012)。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島、中国、タイ、インド、ネパール、スリランカ、フィリピン、ジャワ島、ボルネオ島 (岡島・荒谷, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

分布は局地的で、放牧地などのオープンランドから見つかることが多い。新鮮な牛・鹿などの糞に集まるが、開けた土地の人糞や、林内のシカ糞から見つかる事もある。

【現在の生息状況／減少の要因】

平地の放牧地の牛糞でかつては普通に見られる種であったが、こういった平地の牧場や草地に依存していたものは牧場の減少や移転により、1955年の標本を最後に見つかっていない。現在、山間部のシカ糞に依存し、かろうじて生息が確認されている。

【保全上の留意点】

本種に限らず平野部の牧場は減っており、日当たりの良い草原環境や、そういった場所での動物の糞で生活している種は減少の一途である。

【引用文献】

川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 1: 101. 昆虫文献六本脚, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇, 2022. 愛知県の甲虫目録9 (コガネムシ科: ニセマグソコガネ亜科, マグソコガネ亜科). 佳香蝶, 74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. コスジマグソコガネ. コガネムシ科マグソコガネムシ亜科, 日本産コガネムシ上科標準図鑑. p.237, (株)学研教育出版, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

ダンドナガゴミムシ *Pterostichus dandonis dandonis* Kasahara

【評価理由】

愛知県の特産種で、生息地は限定的である。原生林内の沢沿いにみられるが、近年のシカ害により、林床の乾燥化に拍車がかかり減少が続いている。

【形態】

12.4~13mm (KASAHARA, 1990)。体は黒色で脚は濃い茶褐色。上翅は深い条線のみで、孔点以外に点刻はない。後翅は退化し飛べない。オスの腹端節中央後方は下方に向けて突出する (黒澤ほか, 1995)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市稲武町、北設楽郡設楽町。

【国内の分布】

本州 (愛知県)。

【世界の分布】

日本の固有種である。



設楽町, 2002年6月2日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

原生林内の沢の石下にみられる。他のナガゴミムシ類に比べ比較的水辺に近い環境を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の原生林ではシカ害とスズタケの枯死にともない、林床の乾燥化が著しい。シカによる下草の食害を早急に対処しなければ、多くの種が失われるであろう。

【保全上の留意点】

生息地周辺の伐採、遊歩道の設置保守などの際、小さな沢の改変はせず、林床の乾燥をまねく事象は避けるべきである。

【引用文献】

KASAHARA, Sumao (1990). A New Subspecis of *Pterostichus dandonis* (Coleoptera, Carabidae) from Kappa-do Cave in Aichi Prefecture, Central Japan. *Elytra*, Tokyo, 18(2).

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III), 514pp. 保育社, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

セトナガゴミムシ *Pterostichus taoi* Kasahara

【評価理由】

県内の分布は瀬戸市とその周辺域に限定しており、生息環境は限られている。森林の乾燥化により、個体数は年々減少している。

【形態】

14.7~15.1mm (KASAHARA, 1993)。体は黒色で脚は濃い茶褐色。上翅は深い条線のみで、孔点以外に点刻はない。後翅は退化し飛べない。オスの腹端節中央後方は非対称に湾入するが、深くはえぐられない。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市。

【国内の分布】

本州 (愛知県、岐阜県)。

【世界の分布】

日本の固有種である。



【生息地の環境／生態的特性】

幼虫・成虫とも低山地にある溪流沿いの枯れ葉など堆積物が溜まった湿地に生息する。秋に新成虫が出現し、成虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息している湿地環境自体が限られており、見つかる場所はとても少なく、河川の整備などによる林床の乾燥化は、本種の生息に深刻な影響を与える。

【保全上の留意点】

生息地周辺の森林の開発などは慎重を期し、生息地の溪流やそれに伴う湿地の保全が必要である。

【引用文献】

KASAHARA, Sumao (1993). Two New Pterostichine Carabid Beetles Found on Low Mountains in Central, Japan. *Elytra*, Tokyo, 21(2): 337-345.

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 526pp. 保育社, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

オオフタホシマグソコガネ *Aphodius elegans* Alliberi

【評価理由】

牧場周辺の住民から、衛生環境の改善要望等により牧場が新設移転したことや、牧場の廃業など、生息環境が減少したため生息地が奪われ減少している。かつては市街地近郊や丘陵地にあった牧場も姿を消し、近年生息は確認されていない。残された牧場も少なく、少しの土壌改善でも生息に影響がでることから、継続発生が危惧されている。

【形態】

11～13mm。雄の頭部には角状突起を持つ。特徴的な色彩をもつ大型のマグソコガネである(戸田ほか, 2022)。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市、長久手市、豊田市の記録(戸田ほか, 2022)があるが、現在は豊田市以外の生息が確認できない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島(川井, 2005)。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



豊田市, 2013年10月27日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

真冬を除く秋季から春季に牧場など日当たりの良い獣糞に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は県内2カ所の牧場のみの一部の区画でしか確認されていない。

【保全上の留意点】

生息する牧場の土壌改良や、放牧の減少が生息に影響するため、これらを行う際には配慮が必要である。

【引用文献】

川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群1. 昆虫文献六本脚, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇, 2022. 愛知県の甲虫目録9 (コガネムシ科: ニセマグソコガネ亜科, マグソコガネ亜科). 佳香蝶, 74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

(執筆者 戸田尚希)

ヒメカクスナゴミムシダマシ *Gonocephalum terminale* Reichardt

【評価理由】

河川および海岸砂浜に生息する種で、県内では知多半島及び渥美半島の海岸砂浜に生息している。沿岸域から陸域への移行帯に生息する種と考えられるが、近年護岸工事が盛んに行われた結果、沿岸域と陸域の断絶により県内における生息地の消失が懸念される。

【形態】

体長 9.5～11.8 mm。背面は黒色で光沢は鈍く、灰色の分泌物で覆われていることが多い。同属のカクスナゴミムシダマシとよく似るが、雄の前脛節基部が抉れないことや、上翅が短いことで識別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

常滑市小林町蒲池海岸、南知多町内海小桁つぶて浦、美浜町野間海岸、美浜町奥田、美浜町野間海岸、田原市小中山町日の出西の浜、田原市堀切町堀切海岸、豊田市広幡町、豊田市扶桑町、豊田市百月町、豊田市平井町、豊田市水間町、豊田市川田町、豊田市寺部町、豊田市記念橋、南知多町篠島（戸田ほか、2019）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、壱岐、甬列島（秋田・益本、2016）。

【世界の分布】

朝鮮半島、ウスリー（秋田・益本、2016）。

【生息地の環境／生態的特性】

河川および海岸砂浜に生息しているが、沿岸域と陸域を隔てる堤防の陸域側で比較的多くの個体が発見される傾向にある。冬季には確認が難しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生息が確認されているいずれの産地においても個体数は少ない。護岸工事などに伴って海浜植物が減少したことや、河川からの砂の供給が減少していることなどが個体数減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されている本種の生息地周辺において護岸工事などの開発を控え、生息環境を維持することが望まれる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄、2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.191. むし社, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 5 (ゴミムシダマシ科: スナゴミムシダマシ族). 佳香蝶 71 (280): 101-111. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

(執筆者 大野友豪・戸田尚希)



常滑市, 1999年7月20日, 戸田尚希 採集

クビアカハナカミキリ *Carilia atripennis* (Matsushita)

【評価理由】

愛岐丘陵から三河山地にかけて、広く記録があったが、近年ほとんど生息情報が得られず、著しく減少していると考えられる。

【形態】

体長 7～11 mm。前胸背板は赤褐色。上翅は赤紫色～緑色～青藍色まで変異があるが、本県では青緑～青藍色の個体が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、春日井市、瀬戸市、豊田市、岡崎市、豊川市、豊橋市、設楽町等、愛岐丘陵から三河山地にかけて広く記録があった（湯澤ほか、1990）。

【国内の分布】

本州、佐渡、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



豊川市，長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

県内ではアカマツを寄主植物としていたと考えられ、5月頃にカエデやガマズミの花上で見られた。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ほとんど生息情報が得られていない。マツ類を寄主植物とする種であるので、松枯れによる影響を強く受けたものと思われる。絶滅危惧Ⅱ類と評価されたが、実際にはより危機的な状況にある可能性もある。

【保全上の留意点】

マツ類の自生する里山の管理。松枯れ対策として使用している薬剤の影響を受けている可能性がある。

【引用文献】

湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.

(執筆者 長谷川道明)

マイコアカネ *Sympetrum kunckeli* (Selys)

【評価理由】

平成の大合併前の旧市町村単位での絶滅率は71%、現存数は15であり、準絶滅危惧と評価された。愛知県では平地から丘陵地にかけて広く分布していたが、内陸の産地はほとんど消滅し、海岸に近い地域に生き残っている。

【形態】

小型のアカトンボの仲間で、♂の顔面が青白くなることから「舞妓」アカネと名付けられた。♂の腹部は成熟すると赤化する。一方♀の腹部は淡褐色の個体が多いが、赤化する個体も存在する。ただし赤化♀の出現率には地域差があり、愛知県ではほぼ全てが淡褐色型である。

【分布の概要】

【県内の分布】

51市町村で記録されていたが(吉田ら, 2023)、2024年には飛島村でも確認された。

【国内の分布】

北海道から九州地方にかけて分布する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ロシア(極東)に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシなどの抽水植物が多い湿地や池沼、水田などで見られる。

初夏に羽化した後、未熟時は周辺の草むらなどで過ごし、秋になって成熟すると、♂は抽水植物の先端などに止まって♀を待つ。♀が現れると♂はそれを捕捉し、交尾する。その後♂♀は連結したまま、浅い水面に腹を打ちつけて産卵する。卵のまま越冬し、翌春孵化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代には名古屋市中区や中村区でも確認されており、1980年代には濃尾平野周辺から広く記録されていた(安藤ら, 1990)。また安藤(2004)は「1980年代はじめまでは普通に見られるトンボであったが、その後急速に減少した」と述べている。現在、内陸部からはほぼ姿を消し、海に近い地域を中心に生息している。

豊田市に残る産地は、トンボの幼虫に致死的なネオニコチノイド系の農薬が使われていない水田である。水田やそれに連なる池沼等で絶滅したのは、農薬の影響が大きいと考えられる。また生息地である湿地や池沼の埋め立てによっても絶滅、減少している。

【保全上の留意点】

幼虫に有害な農薬を避けること、幼虫を捕食するアメリカザリガニなどを入れないこと、そして湿地や池沼の環境保全が重要である。

意図せずに本種の移植実験を行った事例がある。それは田原市白浜の海を埋め立てた造成地での観察例である。同地は長期間放置された結果、雨水が溜まり、様々な水草等が繁茂して10数種のトンボが見られるようになった(吉鶴ら, 2018)。このような造成地は農薬が使われず、天敵も少ないので飛来したトンボが繁殖しやすい。結果的にマイコアカネも非常に多産していた。現在同地にはソーラーおよびバイオマス発電所が作られ、マイコアカネの主要発生地は消滅したが、本種が近隣に残ってさえいれば造成地でも繁殖できる、という貴重な記録である。

【引用文献】

- 安藤尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上): 9-78. 愛知県.
安藤尚, 2004. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(2). 佳香蝶, 56(220): 73-80. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
吉田雅澄・成田茂生, 2023. 愛知県市町村別トンボ分布表 2022. *Aeschna* (59): 33-39.
吉鶴靖則・吉田雅澄・川田奈穂子, 2018. 愛知県田原市でスナアカネとハネビロトンボを記録. 三河の昆虫(65): 919-922. 西三河野生生物研究会, 安城市.

【関連文献】

- 尾園暁・川島逸郎・二橋亮, 2022. ネイチャーガイド 日本のトンボ 改訂版, 532pp. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 吉田雅澄)

ミヤマアカネ *Sympetrum pedemontanum* (Muller in Allioni)

【評価理由】

平成の大合併前の旧市町村単位での絶滅率は70%、現存数は11であり、準絶滅危惧と評価された。平地からはほぼ姿を消し、山地を中心に生き残っている。

【形態】

ハネの中央端部寄りに広い褐色の帯模様を持つアカトンボの仲間である。このようなハネの斑紋を有す日本のトンボは本種とコフキトンボの♀（オビトンボ型）だけである。♂は成熟すると腹・胸・顔が赤化する。一方♀は成熟しても黄褐色のままである。

【分布の概要】

【県内の分布】

平地から山地にかけての37市町村で記録されている（吉田ら, 2023）。和名は「深山」アカネであるが、山間部以外にも分布している。

【国内の分布】

北海道から九州地方にかけて分布する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ロシア（極東）に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地にかけての緩やかな流れや水路、水田、大河の河川敷などに生息する。日本のアカトンボはほぼ全種が池沼や水田等の止水で産卵するが、本種だけは例外で、緩やかな流れを好んで産卵する。

初夏に羽化した後、未熟時は周辺の草むらなどで過ごし、秋になって成熟すると、♂は水辺の植物などに止まって♀を待つ。♀が現れると♂はそれを捕捉し、周辺の植物などに止まり交尾する。その後♂♀は連結したまま、浅い流れの水面に腹を打ちつけて産卵する。卵のまま越冬し、翌春に孵化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市中心部では1970年頃まで見られ、名古屋市東部丘陵では1980年代にも確認されていた（安藤ら, 1990）。また安藤（2004）は「濃尾平野の低平部では極めて稀な種。丘陵地や山地の水田周辺では普通に見られるが、個体数の減少傾向は1980年代終わり頃から著しい。愛知県設楽町裏谷ではアカトンボ6種のうち最も個体数の多いトンボであった」と述べている。

現在本種の衰退はさらに進行している。濃尾平野や岡崎平野とその周辺の丘陵地ではほぼ絶滅し、木曾川の河川敷に少数が見られる程度である。愛知県では和名の通り、山間部に行かないと確認が難しいアカトンボになっている。

農薬の使用や河川改修、圃場整備による生息環境破壊により絶滅することが多いと考えられる。またほとんど人手が入らず農薬の影響も小さいと思われる丘陵地から姿を消す例もあり、その原因はよくわかっていない。

【保全上の留意点】

幼虫に有害な農薬を避けること、そして生息地である河川や水路等の緩やかな流れの保全が重要である。

【引用文献】

安藤尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上): 9-78. 愛知県.
安藤尚, 2004. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(1). 佳香蝶, 56 (219): 49-57. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
吉田雅澄・成田茂生, 2023. 愛知県市町村別トンボ分布表 2022. Aeschna (59): 33-39.

【関連文献】

尾園暁・川島逸郎・二橋亮, 2022. ネイチャーガイド 日本のトンボ 改訂版, 532pp. 文一総合出版, 東京.
杉坂美典・鈴木栄二, 2024. 第3次岡崎市版レッドリスト 2024. 岡崎市.

(執筆者 吉田雅澄)

クロモンチビゴキブリ *Anaplecta japonica* Asahina

【評価理由】

生息地は限定的で、また住宅地に隣接する林で見つかっており、開発により生息地がなくなる可能性が高い。

【形態】

約7mm。全体的に黄褐色であるが、前翅基部が黒色のため「黒紋」の和名を持つ(旭ほか, 2023)。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市(旭ほか, 2024)、豊田市(山中, 2018)。

【国内の分布】

山口県・大阪府・静岡県(辻, 2019)、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の固有種である。



名古屋市, 2021年10月8日, 神谷京香 採集

【生息地の環境／生態的特性】

生態も不明な点が多い。本邦のゴキブリ類としては珍しく秋(特に10月)に成虫の記録が集中し、年一化性と考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は小型で非常に俊敏に動き、目視での捕獲採集が難しく、生態も不明な点が多い。

【保全上の留意点】

住宅地に隣接した河畔林や、公園内の林で見つかっており近隣の開発により生息地が奪われることが考えられるため、配慮が必要である。また林床の乾燥化は大敵である。

【引用文献】

- 旭和也・戸田尚希・山岸健三, 2023. 愛知県におけるゴキブリ類の分布について. なごやの生物多様性, 10: 97-102. なごや生物多様性センター, 名古屋.
辻雄介, 2019. 山口県のゴキブリ目 Blattodea (1). 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告, 11: 137-146. 下関市立自然史博物館, 下関市.
山中洋, 2018. 本州に於ける四府県自のクロモンチビゴキブリ採集記録. 佳香蝶, 70 (274): 27-28. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

(執筆者 戸田尚希)

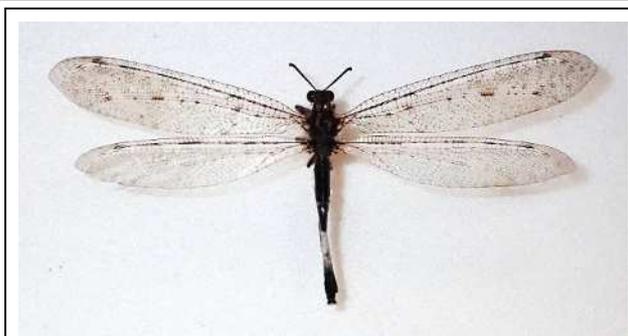
オオウスバカゲロウ *Heoclisis japonica* (MacLachlan)

【評価理由】

本種の分布は、海岸沿いに限られており、県内でも豊橋市表浜など一部にしか生息環境はない。今後、地震津波対策などでの砂浜の環境改変では、本種の生息環境も悪化すると考えられる。

【形態】

成虫の前翅長 60mm ほど。日本産のウスバカゲロウでは最大種。幼虫は、いわゆるアリジゴク型だが、漏斗状の巣は作らない。



豊橋市, 2013年10月27日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市 (間野, 2024)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は海岸などの砂地の草間を徘徊し昆虫類を捕食するが、円錐形噴火口型の巣は作らない。成虫は灯火にも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境の変更はあまり認められない。減少の要因としては、砂浜の砂の減少があげられる。

【保全上の留意点】

生息地である砂浜周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地の保全が必要である。

【引用文献】

間野隆裕, 2024. 愛知県と北海道のオオウスバカゲロウの記録. 佳香蝶, 76 (298): 32. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

(執筆者 戸田尚希)

アリアケキヒロヒラタガムシ *Enochrus bicolor* (Fabricius)

【評価理由】

本種は塩性湿地に生息するが、海岸部は堰堤が整備され、河川以外で塩水が流入する汽水環境が見られなくなった。

【形態】

6.2～7.0mm。背面は橙色味のある黄褐色。中胸腹板突起は板状で三角形に隆起し棘がある。上翅に条溝列がないことで、近似種キヒロヒラタガムシとは区別ができる(中島ほか, 2012)。

【分布の概要】

【県内の分布】

西尾市(戸田ほか, 2022)。

【国内の分布】

大阪府(Kawakami & Hayashi, 2010)、岡山県(千田, 2020)、鳥取県(緋田・渡部, 2020)、福岡県(中島, 2020)、大分県(三宅, 2021)、熊本県(Matsui, 1994)。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア極東部～ヨーロッパ、アフリカ(北部)。



西尾市, 2020年6月9日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

塩性湿地に生息し、海岸付近の植物が散在する浅い湿地で見つかる。灯火にも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地での個体数は多いが、生息環境が限定的であるため、現在の生息地が失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

汽水域という特殊な環境であるため、周辺環境開発などは慎重を期し、生息地自体の保全が必要である。

【引用文献】

- 三宅武, 2021. 大分県初記録の希少なガムシ科3種. 二豊のむし, 59: 100-101. 大分昆虫同好会, 大分.
中島淳, 2020. 福岡県におけるアリアケキヒロヒラタガムシの初記録. さやばねニューシリーズ, 39: 52. 日本甲虫学会, 東京.
緋田祐太・渡部晃平, 2020. 鳥取県米子市でアリアケキヒロヒラタガムシを採集. さやばねニューシリーズ, 38: 61. 日本甲虫学会, 東京.
千田喜博, 2020. アリアケキヒロヒラタガムシ. 岡山県野生動物植物調査検討会(編) 岡山県版レッドデータブック 2020, p.238. 岡山県, 岡山.
Kawakami, Y., Hayashi, M., 2010. A new distributional record of *Enochrus (Lumetus) bicolor* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Osaka city, Honshu, Japan. *Elytra*, 38: 25-26.
Matsui, E., 1994. Three new species of the genus *Enochrus* from Japan and Taiwan (Coleoptera: Hydrophilidae). *Transactions of the Shikoku Entomological Society*, 20: 3-4.
戸田尚希・大野友豪・吉村優杏, 2022. 愛知県からアリアケキヒロヒラタガムシを採集. さやばねニューシリーズ, No.44: 59. 日本甲虫学会, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

ヨツボシマグソコガネ *Aphodius sordidus sordidus* (Fabricius)

【評価理由】

牧場周辺の住民から、衛生環境の改善要望等により牧場が新設移転したことや、牧場の廃業など、生息環境が減少したため生息地が奪われ減少している。かつては市街地近郊や丘陵地にあった牧場も姿を消し、近年生息は確認されていない。残された牧場も少なく、少しの土壌改善でも生息に影響がでることから、継続発生が危惧されている。

【形態】

5～7mm。上翅の黒紋には変異があり、肩歯を持たない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、豊橋市（戸田ほか，2022）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、佐渡、伊豆諸島、対馬（上野ほか，1985）。

【世界の分布】

朝鮮半島、シベリア、コーカサス、ヨーロッパなど。



豊田市，2013年10月27日，戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

春季と秋季に日当たりの良い獣糞に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は県内1カ所の牧場のみの一部の区画でしか確認されていない。

【保全上の留意点】

生息する牧場の土壌改良や、放牧の減少が生息に影響するため、これらを行う際には配慮が必要である。

【引用文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編，1985. 原色日本甲虫図鑑(II)，514pp. 保育社，東京。
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇，2022. 愛知県の甲虫目録9（コガネムシ科：ニセマグソコガネ亜科，マグソコガネ亜科）. 佳香蝶，74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会，名古屋。

(執筆者 戸田尚希)

オオマルチビゴミムシダマシ *Caedius maderi* Kaszab

【評価理由】

砂粒径の大きい海岸砂浜に生息する種で、県内からは田原市の3か所と三河大島しか生息地が知られていない。健全な生息地では見つかるが、生息環境は狭いため海岸の護岸工事などによる生息地そのものの消失が懸念される。

【形態】

体長 4.9~6.3mm。背面は黒色で光沢は鈍く、灰色の分泌物で覆われていることが多い。後翅は退化する。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市伊良湖町伊良湖岬、田原市堀切町堀切海岸、田原市小中山町立馬崎、蒲郡市三河大島（戸田ほか, 2019）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、大隅諸島、トカラ列島、琉球、伊豆諸島（秋田・益本, 2016）。

【世界の分布】

カンボジア（秋田・益本, 2016）。



【生息地の環境／生態的特性】

砂粒径の大きい砂浜を好む傾向があるとされるが、近年県内で生息が確認されている砂浜の砂粒径は特別に大きいわけではない。生息地にはハマヒルガオが生えており、日没前にはその根元で活動、交尾している。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境に指向性が高く、県内での生息地は限られており、護岸工事などに伴って生息環境が損なわれる危険性が高い。

【保全上の留意点】

現在残されている本種の生息地周辺において護岸工事などの開発を控え、海浜植物が豊富に生育できるような環境を維持することが望まれる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.191. むし社, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録5 (ゴミムシダマシ科: スナゴミムシダマシ族). 佳香蝶, 71 (280): 101-111. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

(執筆者 大野友豪・戸田尚希)

シナスナゴミムシダマシ *Gonocephalum klapperichi* Kaszab

【評価理由】

主に河川下流域に生息する種で、県内からは矢作川、豊川、木曾川、庄内川といった大河川中・下流域の河川敷から主に確認されている。健全な生息地では見つかるが、河川敷の護岸工事などによる生息地そのものの消失が懸念される。

【形態】

体長 7.8~8.9 mm。背面は黒色で光沢は鈍く、灰色の分泌物で覆われていることが多い。生息地ではよく似た同属種と混生しており、前胸後角が鋭く尖ることや、上翅間質に3列の茶褐色の毛が生えること、前脛節先端が広がらないことなどから識別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市旭町小渡、豊田市足助町香嵐溪、豊田市時瀬町上時瀬、豊田市樽俣町樽俣、豊田市百月町百月、豊田市西広瀬町西前、豊田市東広瀬町ヲゴソ、春日井市玉野町、西尾市一色町竹生新田、西尾市港町、豊橋市賀茂町井ノ下（戸田ほか、2019）。

【国内の分布】

本州、九州（豊後姫島）、伊豆諸島（新島）（秋田・益本、2016）。

【世界の分布】

中国（秋田・益本、2016）。



豊田市, 1998年6月28日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

河川中・下流域の砂地を好み、枯死したイネ科草本の堆積下などで見つかる。地表を主な生息圏にしていると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在確認されている産地において一度に多くの個体が確認されることは少ないが、大河川中・下流域においては比較的安定して確認できている。ただし、近年河川の護岸工事が盛んに行われた結果、生息地の分断が進み、各地の個体群が脆弱になっていると考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されている本種の生息地周辺において護岸工事などの開発をなるべく控え、本種の生息環境を維持することが望まれる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.191. むし社, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 5 (ゴミムシダマシ科: スナゴミムシダマシ族). 佳香蝶, 71 (280): 101-111. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

(執筆者 大野友豪・戸田尚希)

ヒラヤマコブハナカミキリ *Enoploderes bicolor* K. Ohbayashi

【評価理由】

1990年代に生態が判明し、三河地方に広く分布していることが知られるようになったが、かつて多産地であった本宮山では近年確認が困難になってきており、またかつて生息が確認されていた豊橋市平野部では生息が確認できなくなっている。

【形態】

体長 9～13 mm。体は黒色。上翅は光沢のない朱赤色で明瞭な深い点刻列がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、豊橋市、新城市などから記録があり、三河地方に広く分布していると思われる。尾張地方からは公表された記録は見当たらない(湯澤ほか, 1990; 間野, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

近年、韓国でごく近縁な種が発見された。



豊橋市, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

生活史の大半をアカメガシワなどの大径木にできた洞内で過ごす。成虫は4月頃に出現し、交尾、産卵も洞内で行われるが、飛行中のものや、カエデなどの花上で見られることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

生活史の大半を占める洞をもつ大径木の減少や採集圧が考えられる。本種は複数年にわたって、同じ洞を利用すると考えられることから、同好者が洞内にいる本種を燻りだして採集するため、殺虫スプレーやタバコの煙を使用することによる悪影響がでている可能性も否定できない。

【保全上の留意点】

現在確認されている生息地の環境の維持。特に産卵に利用されている大径木の保全が重要である。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上): 389-433. 愛知県.
間野隆裕編, 2018. 愛知県の生物多様性 グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編, 280pp, 愛知県環境部自然環境課.

(執筆者 長谷川道明)

ヤマトヒメハナカミキリ *Pseudopidonia yamato* (Hayashi et Mizuno)

【評価理由】

太平洋型のブナ林を代表するカミキリムシで、県内では奥三河地方に分布するが、県内ではブナ林は限られており、またニホンジカの食害による影響による林床の乾燥化など、生息基盤が危うくなっている。

【形態】

体長 6.8～11.6 mm。オスは上翅会合部の黒紋（S 紋）は太く、前端は小楯板手前で急に消失する。メスの上翅は、ほぼ黒色で小楯板周辺に 1 対、中央に 2 対、翅端近くに 1 対の黄色紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

奥三河地域のブナの原生林が残されている地域で確認されている（湯澤ほか, 1990；窪木, 2024）。

【国内の分布】

静岡県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



奥三河地域, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

ブナ原生林など自然度の高い森林に生息する。成虫は 6 月頃に出現し、タンナサワフタギなどの花に集まる。幼虫の寄主植物や生態については不明な点が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

ニホンジカの増加により、生息地の環境が悪化している。特に林床の乾燥は本種に大きな影響を与えていると推測される。

【保全上の留意点】

現在の主要生息地である面の木峠、裏谷原生林の環境を維持することが重要。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上): 389-433. 愛知県.
窪木幹夫, 2024. 月刊むし・昆虫図説シリーズ 15 日本のヒメハナカミキリ, 168pp. むし社, 東京.

(執筆者 長谷川道明)

クロホソコバネカミキリ *Necydalis harmandi* Pic

【評価理由】

県内では奥三河に僅かに残されたブナ林に依存して生息しているが、他府県にくらべ存続基盤が脆弱であると判断される。加えてニホンジカの食害によりブナ林の環境が急速に悪化している。

【形態】

体長 14～21 mm。色彩の変異が多様だが、オスでは通常触角は黒色、上翅は褐色で肩から翅端部にかけて太く黒色で縁取られる。メスでは触角第 2～5 節が灰白色で上翅は通常黒色。

【分布の概要】

【県内の分布】

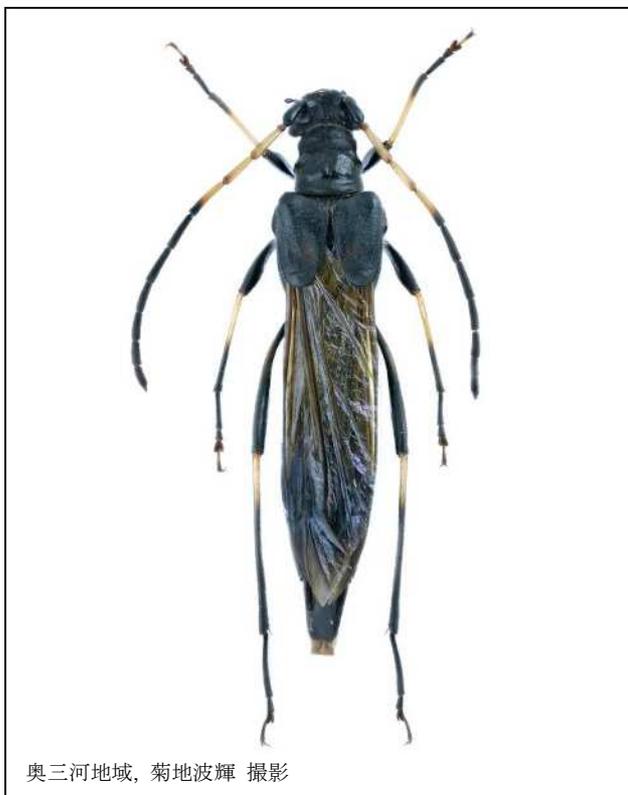
奥三河地域のブナの原生林が残されている地域で確認されている（湯澤ほか，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州（四国、九州産は別亜種として区別されることもある）。

【世界の分布】

日本固有種。



奥三河地域，菊地波輝 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

ブナの原生林など、自然度の高い森林に生息する。成虫は 7 月頃出現し、ブナやミズメ、ナナカマドなどの立ち枯れにみられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ニホンジカの増加により、生息地の環境が悪化している。特に林床の乾燥は本種に大きな影響を与えていると推測される。

【保全上の留意点】

現在の主要生息地である面の木峠、裏谷原生林の環境を維持することが重要。

発生木は長年にわたって使用すると考えられることから、本種が発生又は将来の発生が期待できるブナ等の立ち枯れ木は安易に伐採せず、維持する必要がある。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊，1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫（上）: 389-433. 愛知県.

（執筆者 長谷川道明）

セダカコブヤハズカミキリ *Parechthistatus gibber* (Bates)

【評価理由】

比較的自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、後翅が退化して移動能力が小さいため、地域ごとの固有化が進んでいる。県内では僅かに残された自然林に依存して生息しているが、生息地は限られ、分断されている。また各生息地での状況は悪化しており、個体数の減少が見られる。

【形態】

体長 10.5～22 mm。本県に分布するのは、関東地方から近畿地方にかけて分布する亜種 *shibatai* Miyatake に分類されるが、亜種内でも地域変異が認められる。本県に分布するものは、美濃三河高原に産する個体群とほぼ同一の特徴をもち、表面の微毛は淡い茶褐色で上翅先端部の尖りは弱い。



三河山地, 長谷川道明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

三河山地に広く分布している（湯澤ほか, 1990）。

【国内の分布】

関東地方以西の本州、四国、淡路島、小豆島、九州、隠岐、対馬に分布。多数の亜種が記載されている。本県に分布する亜種は関東地方から紀伊半島北部にかけて分布する（高桑ほか, 2020）。

【世界の分布】

対馬亜種と同亜種が韓国（麗瑞島）から記録されている。

【生息地の環境／生態的特性】

三河山地の自然度の高い森林に生息する。新成虫は夏～初夏に出現し、新しい枯葉を後食し、成虫で越冬。翌年 5 月下旬頃より活動をはじめ、幼虫の寄主植物であるブナやイヌシデなどの倒木等に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ニホンジカの増加により、生息地の環境が悪化している。特に林床の乾燥は本種に大きな影響を与えていると推測される。また、同好者に人気の種であることから、採集圧も受けやすいと考えられる。

【保全上の留意点】

現在の主要生息地である面の木峠、裏谷原生林の環境を維持することが重要。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上): 389-433. 愛知県.
高桑正敏・中村博之・小林敏夫, 2020. 月刊むし・昆虫図説シリーズ 13 日本のコブカヤハズカミキリ, 162pp. むし社, 東京.

(執筆者 長谷川道明)

クシヒゲハイイロヒメシャク *Antilycauges pinguis* (Swinhoe)

【評価理由】

生息環境が不安定で生息場所も極めて限定されている。

【形態】

開帳約 19 mm、♀はやや大きい。灰白色の地に灰褐色点を帯状に散布する。♂の触角は楕葉状で羽の地色は全体的に濃い。



田原市, 2023年9月17日, 間野隆裕 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市 (間野・篠木, 2024)。

【国内の分布】

三重県と愛知県の伊勢湾岸を東北限に福岡県 (河村, 1984)、対馬 (佐藤, 1988)、石垣島と愛媛県 (井上, 1982)、宮古島 (金子, 2011)、喜界島 (鹿児島県) (木村, 2020)、南浮原島 (新田, 2017)、久高島 (沖縄県)、徳之島・与論島 (鹿児島県) (木村, 2022) から記録がある。

【世界の分布】

台湾、中国東部からインドシナ半島に分布する (金子, 2011)。

【生息地の環境／生態的特性】

5月から10月にかけて不連続的に発生し、年3世代位を繰り返すと考えられる。食草は塩生植物シチメンソウ *Suaeda japonica* Makino (ヒユ科) が確認されているが (大塚ほか, 2023)、シチメンソウが生育しない本県では不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内においては田原市伊川津町貝ノ浜が唯一の記録で、生息可能な塩生湿地環境が県内でほとんど見られない。またその塩生湿地は、気象の変化に非常に敏感で不安定な環境下にある。

【保全上の留意点】

生息環境の保全が急務と考えられる。

【特記事項】

2024年に国内における本種の生息環境の不安定な現状が明らかになった (間野・篠木, 2024)。

【引用文献】

- 新田智, 2017. クシヒゲハイイロヒメシャク南浮原島産飼育. ありんくりん通信, 19: 3-4.
井上寛, 1982. シャクガ科, 井上寛ほか. 日本産蛾類大図鑑 1: 425-573, 2: 55-108. 講談社, 東京.
金子岳夫, 2011. シャクガ科ヒメシャク亜科, 岸田泰則編. 日本産蛾類標準図鑑 1: 224-247. 学研教育出版, 東京.
河村忠, 1984. 福岡県産蛾類目録. 北九州市立自然史博物館自然誌資料 1, 339 pp. 北九州市立自然史博物館, 北九州.
木村正明, 2020. 喜界島で昼間に採集した蛾類の記録, *Satsuma*, 166: 93-94. 鹿児島昆虫同好会, 鹿児島.
木村正明 2022. 奄美群島のクシヒゲハイイロヒメシャクの採集記録, *Satsuma*, 170: 93. 鹿児島昆虫同好会, 鹿児島.
間野隆裕・篠木善重, 2024. クシヒゲハイイロヒメシャクの愛知県と三重県からの記録および生息環境について. 誘蛾燈, 255: 4-6. 誘蛾会, 豊橋.
大塚陽香・奥園元晴・矢野文士・日南瑠・徳田誠, 2023. PP19 クシヒゲハイイロヒメシャクの生態および塩生植物シチメンソウ立ち枯れとの関連. 日本昆虫学会第 83 回大会プログラム.
https://entsoc.jp/meeting/2023/2023_program_v2.pdf
佐藤力夫, 1988. クシヒゲハイイロヒメシャク対馬に産す. 誘蛾燈, 113: 105. 誘蛾会, 豊橋.

(執筆者 間野隆裕)

キバナガヒラタゴミムシ *Onycholabis nakanei* Kasahara

【評価理由】

本種の県内での分布は、1979年に北設楽郡豊根村のみが確認されており、その後の記録や確認例は見当たらない。絶滅している可能性もあるが、調査も不十分と思われ情報不足である。

【形態】

大あご、触角、肢が非常に伸長し、触角の第3節から細毛を有することで、他のヒラタゴミムシ類からは一見して識別できる（山崎・森田, 2022）。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村富山（山崎・森田, 2022）。

【国内の分布】

愛知県、長野県（早川, 1996）、静岡県（田形・多比良, 1988）、神奈川県（Kasahara, 1986）。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷の水しぶきがかかるような水辺に生息する極めて好湿性な種である。採集例は主に灯火に飛来したものが多く、愛知県の本種も天竜川（佐久間湖）の河岸付近で、やはり灯火に飛来したものである（山崎・森田, 2022）。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川が護岸改修され、河川敷の岩や石が減少し水の流れも穏やかになってきている。水域と陸地の境目がはっきりと分かれた状態は、湿潤な環境を好む本種の生息には適さない。

【保全上の留意点】

河川環境の改修には、周囲の湿潤環境に配慮した改修が必要である。周囲の乾燥化は、昆虫類の生息地を奪うことになる。

【引用文献】

- 早川広文, 1996. 長野県のゴミムシ第II報. まつむし, (87): 1-59. 松本むしの会, 松本.
Kasahara, S., 1986. Occurrence of *Onycholabis* (Coleoptera, Carabidae) in Japan. Papers on entomology presented to Prof. Takehiko Nakane in commemoration of his retirement. *Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo* (2): 75-80.
田形和弘・多比良嘉晃, 1988. 平野橋（安倍川中流）の灯火に飛来した歩行虫類. 静岡の甲虫, 6 (1): 17-21. 静岡甲虫談話会, 静岡.
山崎隆弘・森田誠司, 2022. 愛知県のキバナガヒラタゴミムシ *Onycholabis nakanei* Kasahara の記録. 佳香蝶, 74 (292): 107. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

ヨツボシゲンセイ *Megatrachelus politus* (Gebler)

【評価理由】

本種の県内での分布は、1852年の茶臼山の標本が最後であり、これ以降の記録や確認情報が無い。本種の幼虫は、ハナバチ類の巣に寄生すると推測されているが、近年のハナバチ類の減少（多田内, 2020）に伴い、本種も影響を受けているものと推測される。本県での本種の生息情報が途絶えてすでに70年が経っており、既に絶滅している可能性も否定できないが、「絶滅」と判断するにはあまりにも情報が不足しているため「情報不足」と評価された。

【形態】

9~12mm。前胸背板は、光沢のある黒色。上翅は黄褐色で4個の黒紋があるが、黒紋はその一部または全部が不明瞭となり、ときに消失する（黒澤ほか, 1985）。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山（北設楽郡豊根村）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国北東部、モンゴル、シベリア東部。



豊根村, 1952年8月2日, 岩月学 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫はハナバチ類の巣に寄生するものと推定されるが未知。成虫は夏に現れ、花に来る（黒澤ほか, 1985）。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境の変更はあまり認められない。減少の要因としては、ハナバチ類の減少が考えられる。

【保全上の留意点】

生息地周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地の保全が必要である。また、ハナバチ類の保全とリンクする必要がある。

【引用文献】

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ). 514pp. 保育社, 東京.

多田内修, 2020. 野生ハナバチ類の分類, 生態, その減少と保全. 農業および園芸, 95 (4): 291-300. (株)養賢堂, 東京

(執筆者 戸田尚希・長谷川道明・蟹江昇)

キアシアオハムシダマシ *Arthromacra flavipes* Nakane

【評価理由】

本種は、これまで三重県以西に分布する種とされていたが、長谷川ほか(2019)により、1968年に豊田市稲武町(北設楽郡稲武町)で採集された標本が確認された。その後、県内各地を調査しているが、上記の標本以外の情報は得られていない。

本種については、本県が分布の東限域にあたることから、本県の生物多様性保全の重要種と考えることができる。加えて、1968年に採集された1点の標本以外、追加情報が得られないことから、本種の生息環境が著しく損なわれている可能性がある。以上のことから、「情報不足」として評価された。今後重点的に情報を蓄積していく必要がある。

【形態】

体長7.7~10.8mm。背面は金緑色で、上翅肩部に角張った縦稜がある。タカハシアオハムシダマシ *Arthromacra takahashii* に似るが、腿脛節は、ほぼ一様な黄褐色であることから区別できる。腹部末端節は黒褐色(秋田・益本, 2016)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市稲武町(長谷川ほか, 2019)。

【国内の分布】

本州(愛知県以西)、四国。



豊田市, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

西日本(京都府・三重県以西)や四国での観察例では、海岸近くの照葉樹林から1,900m程の亜高山帯にかけて広い垂直分布をもつ種で、シイやミズキなどを訪花する(秋田・益本, 2016)。アオハムシダマシ属(*Arthromacra*)の種は、形態が互いに似通っていることや色彩変異に富むことから同定が難しく、多くの種が混同されるなど、長らく分類が混乱した状態にあった。現在の分類に定まったのは比較的最近になってからである。本県からは4種が確認されている(長谷川ほか, 2019)が、アマチュアの昆虫同好者には人気がなく関心を引きにくい存在であったこともあり、県内での記録や標本等の情報が不足している。アオハムシダマシ類の幼虫は林床の湿潤な腐朽材を穿孔して食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では1968年以降の記録や確認が無いので、詳細は不明であるが、旧稲武町の採集地と推測される周辺はニホンジカによる食害がひどく、地表や倒木の乾燥化が顕著に進んでいる。

【保全上の留意点】

日本産のアオハムシダマシ属の種は、金緑色~赤色の強い金属光沢をもつ中型の甲虫の一群で、形態が互いに似通っており、愛知県内でも、何種かは山地の花上などで普通に見られる。

色彩変異に富むことから同定が難しく、ニホンジカやニホンカモシカによる下草や低木の食害を早急になくしないと森林の乾燥が進み、続々と昆虫が減っていくと考えられる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.302. むし社, 東京.

長谷川道明・戸田尚希・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録4 愛知県のアオハムシダマシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (29): 27-32. 豊橋市自然史博物館, 豊橋市.

(執筆者 戸田尚希・長谷川道明・蟹江昇)

【 情報不足種 】

1. ヘイケボタル *Luciola lateralis* Motschulsky

コウチュウ目 ホタル科 (国：リスト外)

ゲンジボタルと並んで光るホタルとしてよく知られた種。かつては県内の平野部から山間部にかけて水田やその周辺環境に広く生息していたが、平野部～丘陵地で生息確認情報が乏しくなっており、今後絶滅危惧カテゴリーに移行する可能性が高いと考えられる。

(執筆者 長谷川道明)

2. キリシマミドリシジミ *Chrysuzephyrus ataxus kirishimaensis* (Okajima)

チョウ目 シジミチョウ科 (国：リスト外)

県内では未記録であったキリシマミドリシジミが田中佑歩・西部俊希 両氏により 2018 年 12 月 29 日 新城市七郷一色の植林地内アカガシから越冬卵として 5 卵採集された。この卵から翌年 2019 年 5 月に 2 ♀が羽化した。なお、同地での成虫は未確認である。

(執筆者 江田信豊・魚住泰弘)

(5) 貝類

2025年版レッドリストに掲載された貝類のうち、新たにリストに掲載された種（いずれも情報不足種）について、簡易な解説を記述した。

1. ミジンナタネ *Punctum atomus* Pilsbry et Hirase

陸産貝類 柄眼目 ナタネガイ科 (国：リスト外)

北設楽郡で近年も図示とともに記録されている種である(早瀬・他, 2021)が、微小種でもあり生息情報自体が少なく、これまでの記録に近似種のハリマナタネ *P. japonicum* と本種が誤認された例もあり、今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)

2. コウフオカモノアラガイ *Neosuccinea kofui* (Patterson)

陸産貝類 柄眼目 オカモノアラガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

豊田市で2022年に山間部の谷津田で確認されたが、国内移入の可能性も否めないとされている(河辺・他, 2023)。ヒメオカモノアラガイなどを含めた本種群については、一地域での断片的な産出状況が報告されているが、調査不足や分類学的な区別の困難さから過去の生息状況との比較もできておらず、今回は情報不足と判断された。

3. ハクサンベッコウ *Nipponochlamys hakusana* (Pilsbry et Y. Hirase in Y. Hirase)

陸産貝類 柄眼目 シタラ科 (国：情報不足)

県内の分布域の詳細が判明しておらず、いわゆるベッコウマイマイ・シタラ類の標本を含めた過去のデータも極めて少ないため、今回は情報不足と判断された。今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。

4. トガリキビ *Parakaliella acutanguloides* Kuroda et Azuma

陸産貝類 柄眼目 シタラ科 (国：情報不足)

県内の分布域の詳細が判明しておらず、いわゆるベッコウマイマイ・シタラ類の標本を含めた過去のデータも極めて少ないため、今回は情報不足と判断された。今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。

5. オオコウラナメクジ *Nipponarion carinatus* Yamaguchi et Habe

陸産貝類 柄眼目 オオコウラナメクジ科 (国：準絶滅危惧)

県内の分布域の詳細が判明しておらず、ナメクジ類の標本を含めた過去のデータが極めて少ないことも踏まえ、今回は情報不足と判断された。今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。

6. カワネミジンツボ *Akiyoshia kawanensis* Habe, in Masuda et Habe

淡水産貝類 エゾタマキビ目 ヌマツボ科 (国：情報不足)

豊橋市で2022年に生息が確認された地下水系に生息する微小な巻貝。本種の特殊生息環境の調査、分布域の把握は極めて不十分なので今回は情報不足と判断された。本種の生息域の特殊性より高いカテゴリーの種である可能性がある。

(執筆者 木村昭一)

7. カワコザラ *Ferrissia nipponica* (Kuroda in S. Uchida)

淡水産貝類 モノアラガイ目 ヒラマキガイ科 (国：絶滅危惧ⅠA類)

分子系統解析および形態の再検討で、これまでカワコザラとされてきた種の大半は移入種メリケンコザラ *F. californica* (Rowell, 1863) の誤同定と判明した。日本在来のカワコザラも実在しているが、現在では山間の水系など人為的影響の少ない生息環境に生息が確認されている。近年の調査で岡崎市の湿地で少数個体が採集された。形態の検討より在来種のカワコザラである可能性が示唆された。殻径 4mm、笠形、螺塔は低く、殻質は薄く脆い。殻表は成長脈以外平滑。分布調査、個体数の把握も不十分なので今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)

8. ヒメヒラマキミズマイマイ *Gyraulus* sp.

淡水産貝類 モノアラガイ目 ヒラマキガイ科 (国：絶滅危惧ⅠB類)

最大個体でも殻長 0.5mm、殻径 1.7mm 程度の螺層数 3 層平巻きの微小種。本種は、本州から南西諸島、東京都島嶼部にかけて日本国内に広く分布する未記載種であり、学名は確定していない。近年の調査で岡崎市の湿地等で少数個体が確認されている。分布調査、個体数の把握も不十分なので今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)

9. シナヤカスエモノガイ *Thracia concinna* Reeve

淡水産貝類 スエモノガイ目 スエモノガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

田原市で 2021 年に海岸に漂っていた死殻 2 個体の 1 例が確認された、県内に確実に生息しているとは断定できず、愛知県周辺の県並びに市における分布の現状を考えると生息していた可能性が高く、今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。しかし、分布調査（潮下帯の追加調査）、個体数の把握も不十分なので今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)